

## 筑前 39 一本杉窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）

経営：

焼物名：小石原焼

年代：〔1号窯〕17世紀後半

〔2号窯〕寛文9年(1669)～

現況：公園(現地保存)・山林

備考：〔1号窯〕村44、県550061として周知化

〔2号窯〕村45、県550062として周知化

県指定史跡

小石原窯跡群が集中する大肥川上流域の内、最も下流の右岸に位置する。1号窯は試掘調査のみであるが、2号窯については小石原村教育委員会(現、東峰村教育委員会)により、平成4年(1992)に調査が行われた。

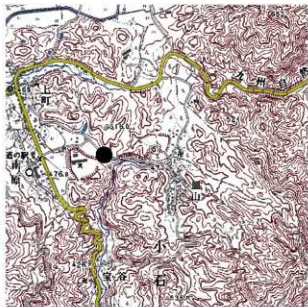
### 〔1号窯〕

奥壁だけにトンバイを使用し、天井・壁を粘土で構築する。他の窯跡とは異なる陶土を使用か。甕・鉢を中心とした陶器を焼く。窯幅が狭く、奥壁にだけトンバイを使用することから中野上の原窯跡より古い窯跡か。

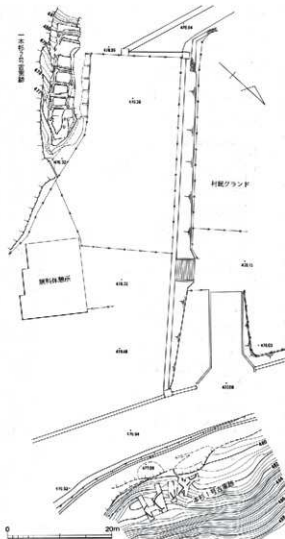
### 〔2号窯〕

全長約20mの階段状連房式登窯で、胴木間と6焼成室からなる。1号窯と同様に奥壁のみトンバイを使用し、天井・壁を粘土で構築する。窯南東側の谷に物原を形成する。出土品は陶器すり鉢が多くを占め、他に水指・片口・壺・甕・鉢と窯道具がある。

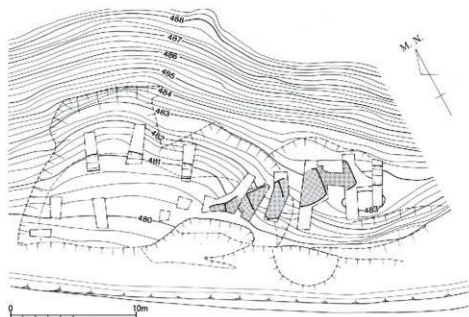
焼成室の第6室奥壁での考古地磁気年代法では1680±30年代の結果が出ている。出土品に肥前の影響が見られないことから、中野上の原窯に先行するものと考えられ、『高取歴代記録』による「寛文9年(1669)に小石原村の中野と云う所に新皿山が出来しより、高取八之丞が移り住む」に該当する窯かと考えられる。



窯跡位置図『小石原』(1/25,000)



一本杉窯跡



1号窟跡実測図 (1/300)



1号窟跡現況 (遠景)

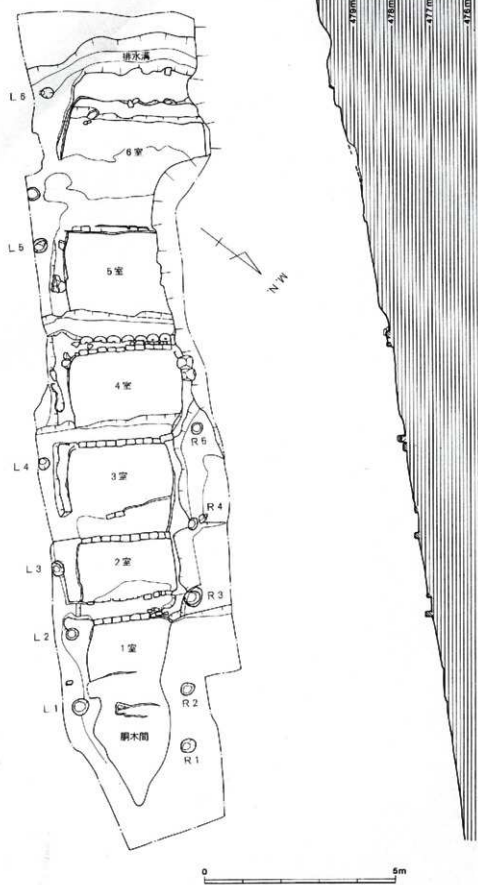


2号窟跡現況 (近景)



2号窟跡 (発掘調査時)

東峰村教育委員会提供



一本杉2号窟跡実測図 (1/100)

## 筑前 40 十文字窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中山

経 営：

焼物名：小石原焼

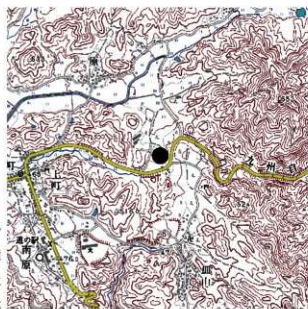
年 代：18 世紀中頃～後半

現 況：山林

備 考：村 46、県 550058 として周知化

小石原焼の窯元が集中する皿山地区から北に低い丘陵を挟んだ位置に単独で所在する。過去に梨園造成中に確認されたもので、多量の陶片が出土し、土漣し場跡と思われる遺構もあったとされるが、窯本体は不明。村教育委員会にパンケース 1 箱の陶片が保管されており、発見当時の出土品とみられる。今回の現地踏査では、杉林に変わっており、数点の陶片が確認されたが、窯の存在に関する情報は得られなかった。

出土品は陶器の皿（小皿・大皿）、碗、鉢、すり鉢、土管があり、保管資料に窯道具は含まれていない。



窯跡位置図 『小石原』 (1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



## 筑前 41 奥畑瓦窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字スキザキ

経営：民窯

焼物名：

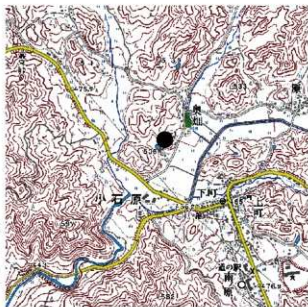
年代：明治？

現況：山林

備考：村 15、県 550015 として周知化

小石原焼の窯元が集中する皿山地区から北西に離れた丘陵裾に単独で位置する。急傾斜から緩斜面に変化する付近に焼土が多数散布し、東側を中心に物原を形成している。

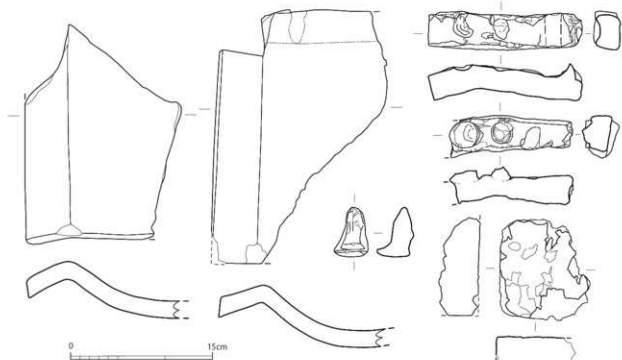
出土品は瓦と窯道具であり、陶器は焼かれていない。瓦は施釉する特色がある。



窯跡位置図『小石原』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



奥畑窯跡出土遺物実測図(1/4)

九州歴史資料館所蔵

## 筑前 42 釜床窯跡

所在地：朝倉郡東峰村鼓

経営：福岡藩

焼物名：高取焼

年代：〔1号窯〕寛文5年(1665)～元禄年間

〔2号窯〕天保6年(1835)～明治

現況：現地保存

備考：1号窯 村95、県550050として周知化  
県指定史跡

2号窯 村96、県550051として周知化

〔1号窯〕

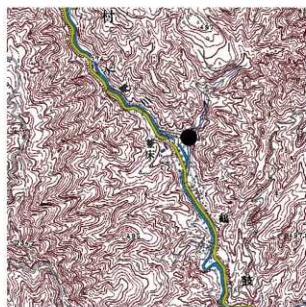
御用窯を営んだ高取焼2代八蔵貞明が寛文5年(1665)(寛文7年の記録もあり)に白旗山窯から移して活動した窯である。貞享年間(1684～88)に大鋸谷(福岡市)を開窯したが、八蔵は鼓から通い御用を勤めたとされる。その後、元禄17年(1704)頃まで焼き続けられた。

窯は大肥川が流れる渓谷に位置し、周辺は急峻な山々が連なる。1号窯は急な尾根線上にあり、2号窯は小河川を挟んだ丘陵裾にある。戦前、高取家が木材搬出路を掘削した際に確認され、多量の陶器片とトンバイが採集された。『高取歴代記録』によると窯は「居宅より丑方に当り山の尾の先也」や「東乃方及山の尾先」と記載される。

窯の中央は掘削され、さらに前面は崩落のため胴木間や焼成室の一部を欠損しているが、調査では6室を確認した。出土品は茶入を中心に茶器が主体をなす。またハマやサヤ鉢等の窯道具が出土した。考古地磁気推定年代によると最終焼成は1710±30年という結果がでている。

〔2号窯〕

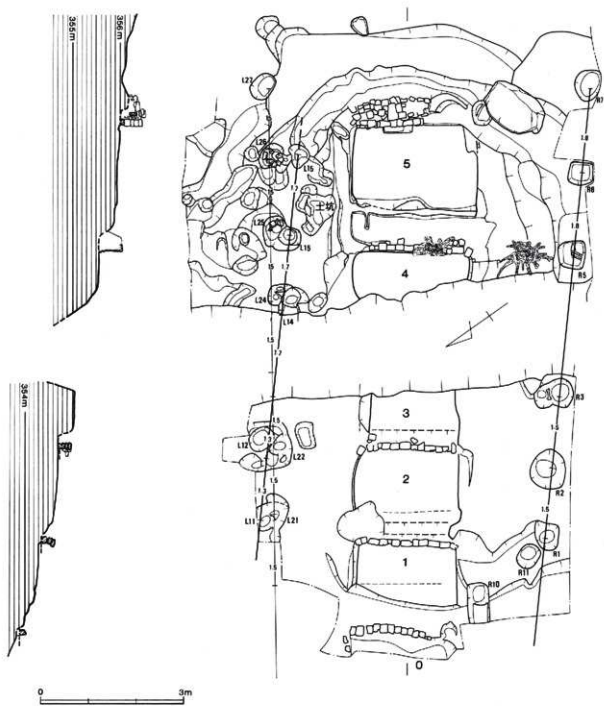
8代高取八郎常保が天保6年(1835)に認可を願い出て築窯したもので、明治まで小石原焼風のを焼いたとされる。初代高取八山夫妻の墓が移築されている付近と想定される。



窯跡位置図 「小石原」(1/25,000)



窯跡付近見取図 「高取家文書」



釜床1号窟跡実測図 (1/80)



1号窯跡現況（近景）



2号窯跡現況（近景）



1号窯跡（発掘調査時）

東峰村教育委員会提供



高取八山夫妻の墓



天照太神宮

〔天照太神宮〕

高取家の敷地内にある。『筑前国統風土記付録』『筑前国統風土記拾遺』『天照太神宮御鎮座之記』では、社は延宝9年(1681)に2代高取八蔵貞明が、高取家が鼓に移り住むまでに営んできた所の神（大行事神社・彦山大権現・撃鼓大権現・天照太神宮・近津大明神・福地大権現・小島大明神）を勧請して建立したとある。

## 筑前 46 三並ヒエデ窯跡

所在地：朝倉郡筑前町三並

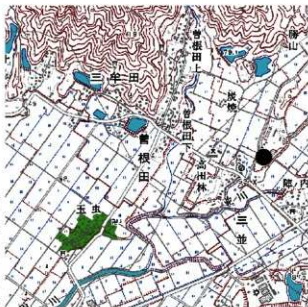
経営：民窯か

焼物名：

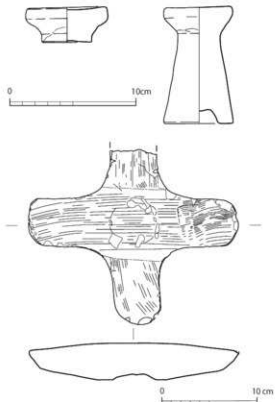
年代：19世紀

現況：宅地

三並ヒエデ窯跡出土銅戈と一緒に甘木歴史資料館に窯道具が保管されている。出土地は標高約60mの緩斜面に位置するが、圃場整備が行われたこともあり窯跡は確認できず、陶片等も採取できなかった。保管されている出土品はトチンとハマであり、焼成された製品は不明である。



窯跡位置図 『二日市』 (1/25,000)



三並ヒエデ窯跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

甘木歴史資料館所蔵



窯跡推定地現況 (遠景)

## 筑前 47 浄満寺窯跡

所在地：朝倉市長谷山

経 営：秋月藩

焼物名：

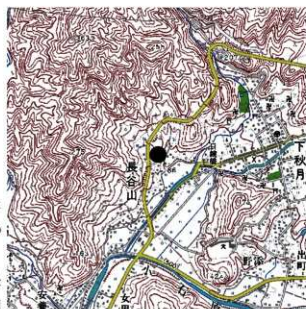
年 代：18世紀中葉～18世紀後半

現 況：山林

秋月藩士の平田望春が天保5年(1834)に記した『望春隨筆』に、宝暦年間の末から明和年間の初めまで焼いたと記される。

秋月城下を見下ろす標高約110mの尾根上に長さ約14m、幅約3mの範囲で窯跡を確認した。周辺は削平を受けていて、露出した土層断面から厚さ約0.5mの床面が、階段状に見える。おそらく3室以上からなる登窯かとみられる。

南側の斜面からは素焼きの皿・すり鉢・甕等の陶器やトチン・ハマ等の窯道具が採取されている。



窯跡位置図『甘木』(1/25,000)



窯跡現況(遠景)

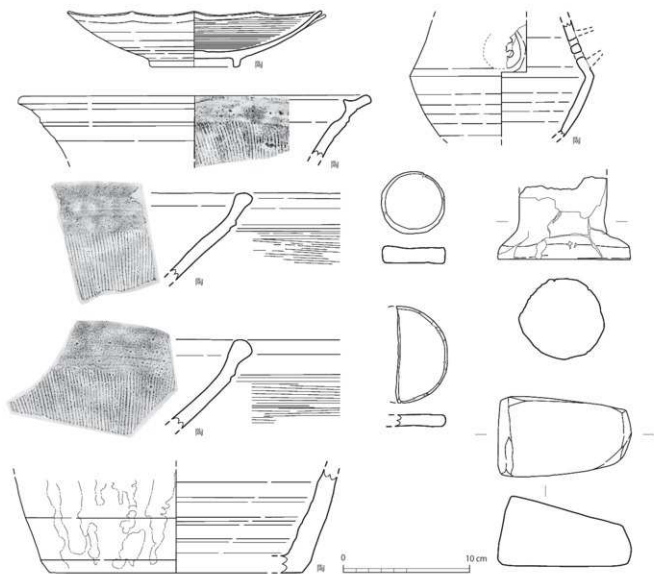


窯跡現況(近景)



窯跡現況(近景)





浄満寺窯跡出土遺物実測図（1 / 3）

朝倉市教育委員会所蔵



浄満寺窯跡出土遺物



## 筑前 48 野鳥窯跡

所在地：朝倉市秋月野鳥

経 営：秋月藩

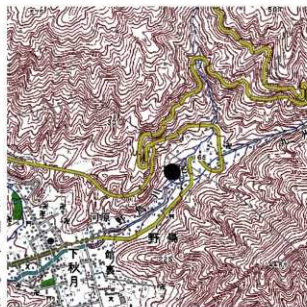
焼物名：

年 代：18世紀後半～19世紀初め

現 況：山林

秋月藩士の平田望春が天保5年(1834)に記した『望春隨筆』に、寛政11年(1799)から約10年間操業され、陶工は上野・小石原から来た後に田香(今任)からも加わったと記される。秋月藩の年譜である『御代々之記』や『秋城御年譜』からは享和2年(1802)から文化9年(1812)の操業と読み取ることができる。

窯跡は秋月城下町から500m程北西の野鳥川右岸に位置する。かつては僅かに壁体が見え、遺物も採集されていたとされるが、副島邦弘による平成18年(2006)の現地踏査や今回の調査でも窯自体は確認できず、今回の現地踏査でも、わずかに周辺から窯壁片を確認したのみである。



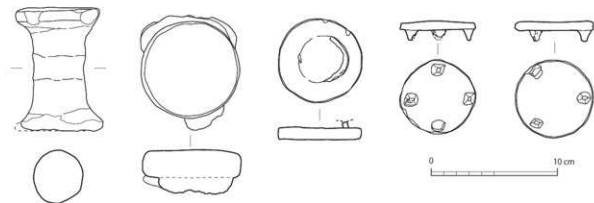
窯跡位置図『甘木』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



野鳥窯跡遺出土遺物



野鳥窯跡出土遺物実測図(1/3)

朝倉市教育委員会所蔵

## 筑後 一の瀬〔朝田〕窯跡

所在地：うきは市朝田

経営：

焼物名：一の瀬焼・朝田焼

年代：文化年間～明治

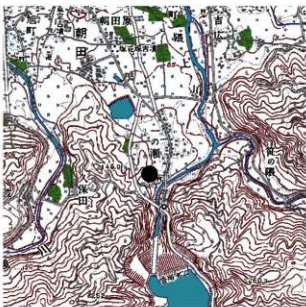
現況：山林

備考：市076、県620024として周知化

文化年間(1804～18)に太田勝次郎が開窯し、最初は陶器を中心に焼いていたが次第に磁器が増えたとされる。勝次郎窯の開窯は文政12年(1829)もしくは天保6年(1835)頃とされる。天保元年(1830)頃には樋口勘次・長作が陶磁両種の窯をかまえ、短期間操業を行う。染付製品の銘にその名がみえる。安政年間(1854～90)には足立寿平が小石原、星野、唐津などの工人を雇い、陶器の生産を行おうとするが、明治初年に廃業したという。現在の窯元は昭和39年(1964)に再興されたもの。

上記の変遷で、同一の窯を使用したのか、別の窯を築いたのかは明確でない。窯跡は耳納山麓の東向きの急傾斜地裾に位置する。陶器窯・磁器窯の二基があったとされるが、陶片は確認されるものの磁器片は見つけることができず、地形が大きく改変されている場所もあることから磁器窯は失われている可能性がある。

器種は陶器については、碗・皿の他、甕や雲助等の中～大形品がみられる。磁器については碗・皿・瓶が多くみられる。磁器には「一ノ瀬」や「朝」、「朝田一瀬樋口勘二」等銘を高台内に記すものがみられる。採集された窯道具は多くはないが、ハマ等がある。



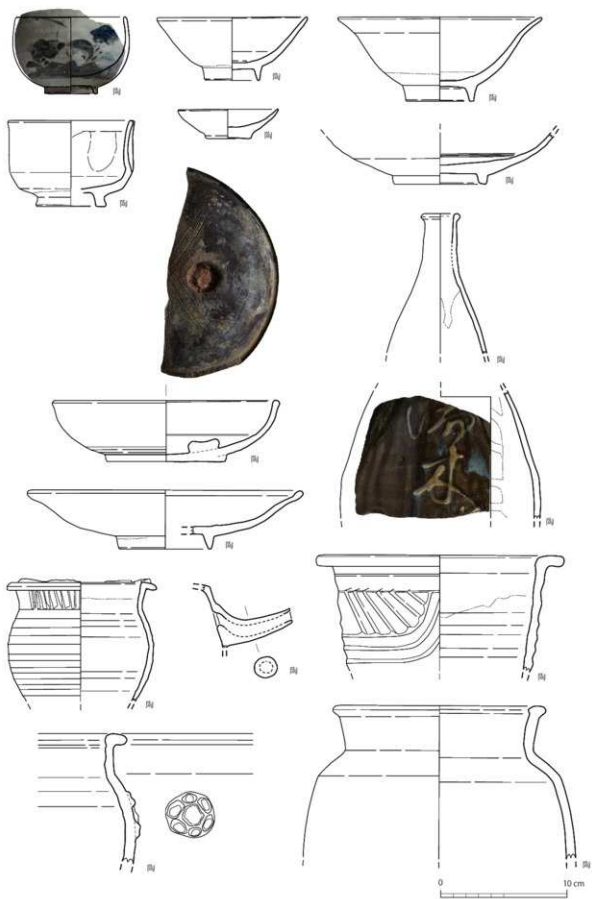
窯跡位置図『千足』(1/25,000)



窯跡現況(遠景)



窯跡現況(近景)



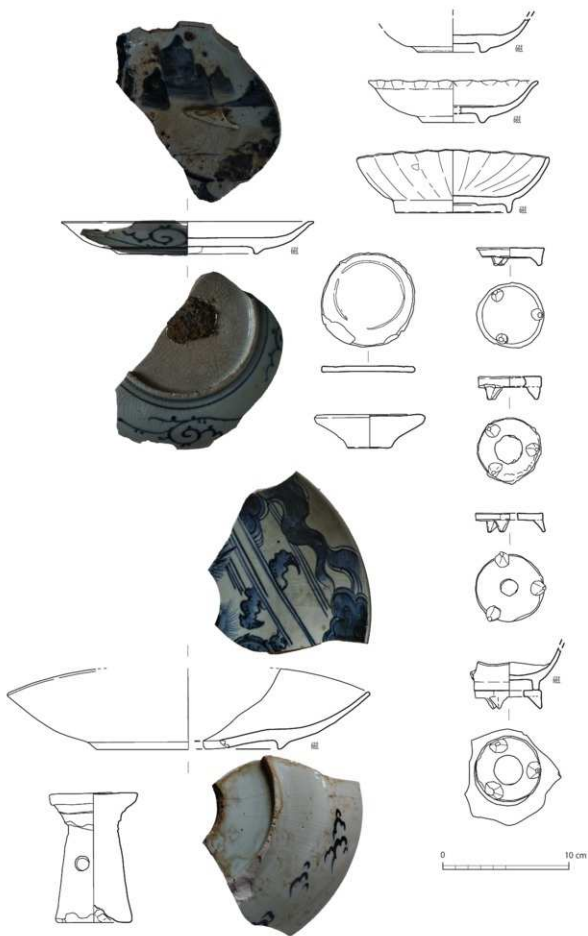
一の瀬窟跡出土遺物実測図1 (1/3)

うきは市教育委員会所蔵



一の瀬窟跡出土遺物実測図2 (1/3)

うきは市教育委員会所蔵



一の瀬窟跡出土遺物実測図3 (1/3)

うきは市教育委員会所蔵

## 筑後 柳原焼窯跡

所在地：久留米市篠山町

経営：久留米藩

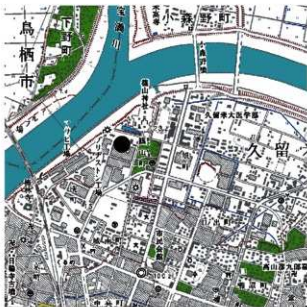
焼物名：柳原焼

年代：天保3年(1832)～天保12年(1841)

現況：工場

久留米藩9代藩主有馬頼徳(月船)が久留米城内の一角で開かせたお楽しみ窯である。天保3年(1832)から同12年(1841)頃までとされる。窯は城内二の丸の新御殿の庭にあったとされるが、現在工場地内であり確認することができない。

赤坂焼や星野焼の陶工が参画し、中国や朝鮮、日本の茶陶を倣い、茶陶を焼かせた。高台脇や高台内に「柳原」の小判形陰刻銘や、月船公の花押の陰刻がなされるものがある。



窯跡位置図『久留米』(1/25,000)



窯跡推定地現況(遠景)

### 筑後3 朝妻焼窯跡

所在地：久留米市合川

経営：久留米藩

焼物名：朝妻焼

年代：正徳4年(1714)～享保13年(1728)

現況：山林

備考：県030253として周知化

『米府年表』や『石原家記』から、正徳4年(1714)に6代久留米藩主有馬則維の命により、釈形焼の陶工が関わり、肥前の工人や絵師を招致して開窯したとされる。享保13年(1728)には閉窯している。

窯は久留米市街地に近い標高約35mの丘陵上に位置する。平成4年、27年に久留米市教育委員会により発掘調査が行われ、残存長は8.8mの焼成室3室と煙道部からなる窯跡と物原が確認され、大部分は現地保存されている。

作業期間は短い、白磁や青磁、染付など色絵を含めて磁器生産が行われた。底部などに「朝」銘をもつ。窯道具はハマ、トチン、チャツ、ナンキン、さや鉢などが見られる。トンバイを煙道部に使用する。ハリ支えがある。煙道部は熊本県南関町に残る小代焼瓶焼窯とほぼ同様の形態を呈すとの指摘もある。



窯跡位置図「久留米」(1/25,000)



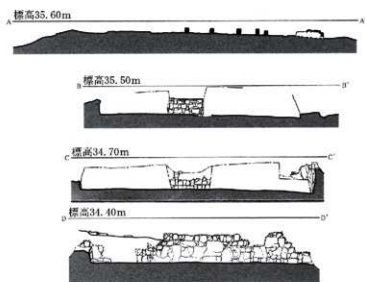
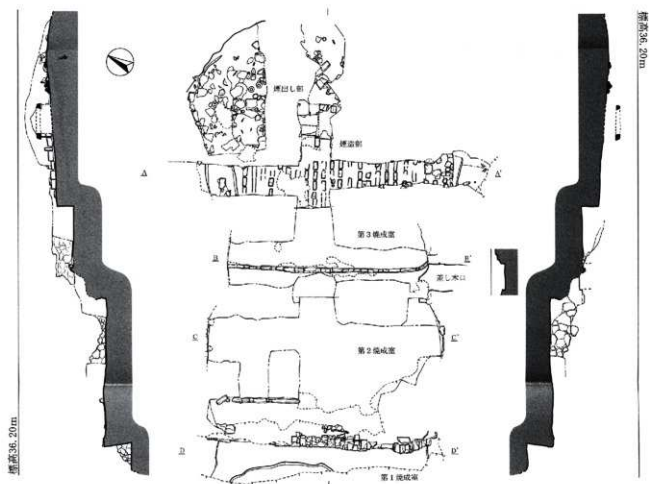
窯跡現況(遠景)



窯跡(調査時)

久留米市提供





朝妻焼窯跡実測図 (1/100)

## 筑後 4 東野亭焼窯跡

所在地：久留米市野中町

経営：久留米藩

焼物名：東野亭焼

年代：慶応元年(1865)～明治8年(1875)頃

現況：消滅

久留米藩11代藩主有馬頼咸により、慶応元年(1865)にお楽しみ窯として開窯されたが、殖産興業を目的とする事業も担った。赤坂焼の陶工・緒方次助の次男・宗一が主に製品(花瓶、茶器など)を作った。廃藩後は民間に引き継がれたが、明治8年(1875)頃に廃窯となった。東野亭の名は、東野中(久留米市野中町)の藩主別邸である「東野亭」に由来する。

久留米市街地の南東部、高良川左岸の台地上に位置する。平成10年(1998)に久留米市教育委員会により発掘調査が行われ、窯は燃焼室と焼成室2～3部屋があることがわかったが、削平を大きくうけており不明な点も多い。陶器の行平鍋や片口、急須、徳利、鉢、すり鉢、灯明具等がある。また、染付で高台内に「東野亭造」の銘がある磁器皿が出土し、磁器も焼かれていたことがわかる。行平鍋の把手には「東壱寿」「東野亭」の銘がある。窯道具ではトチンがないのが特徴で、サヤ鉢、ハマ(逆台形、足付)、シノ(ナンキン)などが見える。



窯跡位置図『久留米』(1/25,000)

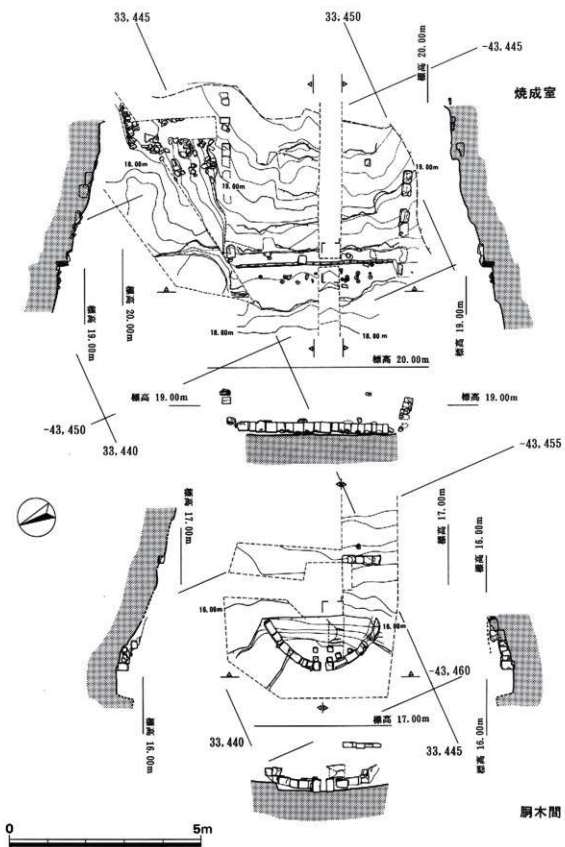


窯跡(調査時)

久留米市提供



窯跡現況(遠景)



東野亭焼窯跡実測図 (1/100)

## 筑後 12 赤坂焼 [三原] 窯跡

所在地：筑後市蔵数字赤坂

経営：久留米藩

焼物名：赤坂焼

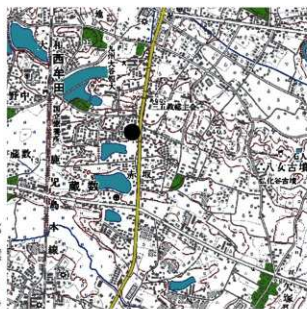
年代：文化9年(1812)～文政5(1822)年

文政7年(1824)～弘化3(1846)年

現況：神社・宅地

文化9年(1812)、水田窯(筑後市水田)の次郎吉が窯を開く。しかし経営はうまくいわず一時廃窯したが、文政7年(1824)に三原富次が再興する。文政10年(1827)には三原が久留米藩御用焼立役となる。三原は久留米藩のお楽しみ窯である柳原窯で制作した製品を赤坂で焼いた記録が残されている。三原窯は富次の次男貞吉の代まで御用窯として創業され、その後は民窯となった。三原窯で従事した緒方家が赤坂焼を維持し、会社窯・峠窯・新窯を営んだ。特に緒方宗市は久留米藩のお楽しみ窯である東野亭焼窯を起すにあたり選ばれて陶匠となった。東野亭焼窯廃窯後は赤坂に戻り窯を築いた。

窯は東西に長く伸びる八女丘陵の西端付近に位置する。三原窯は周辺より高くなる地形にあり、現在は赤坂神社が祀られている。窯跡の上に社殿が建てられており、基礎周辺には焼土面が確認できる。周辺には陶片や焼土が散在する。他の窯跡については推定地を踏査したが、確認することはできなかった。



窯跡位置図『八女』(1/25,000)

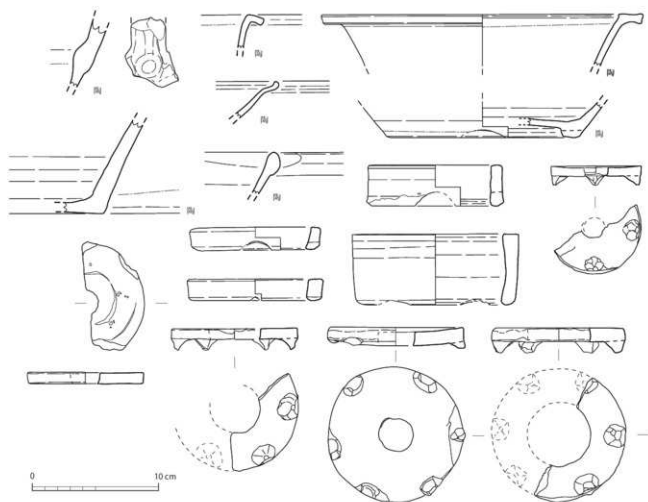


窯跡現況(近景)



赤坂焼窯位置図「筑後赤坂焼」(以下の文章も参照)

- ①次郎吉窯 文化9年(1812)～文政5年(1822) 水田の次郎吉が窯を起こす。
- ②三原窯 文政7年(1824)～弘化3年(1846) 三原富次が赤坂焼を再興 陶名「利左衛門」  
富次 → 貞吉
- ③戸田窯 文政9年(1826)～弘化3年(1846) 戸田衣吾が戸田窯を起こす 陶名「作兵衛」  
衣吾→秀人→正明
- ④緒方勘兵衛窯 安政2年(1855)～昭和初期 緒方勘兵衛→金太郎
- ⑤明治初年(1867) 緒方宗市が赤坂に窯を開く。岡本信吉も同伴「赤岡」の銘を残す  
※安政2年(1855)～大正4年(1915)?
- ⑥峠窯(緒方金太郎窯) 明治末年～昭和16年(1941) 緒方金太郎→徳
- ⑦新窯(緒方徳太郎窯) 大正10年(1921)～昭和初期 緒方徳太郎→栄
- ⑧会社窯(緒方正明窯) 大正4年(1915)～昭和52年(1977) 鶴田邦太郎・緒方秀人他3名で正典舎を創り、会社窯を起こす。  
昭和42年(1967) 正明窯を中心に、豊田勝秋の指導により赤坂焼の復活をみた。



赤坂焼窯跡出土遺物実測図（1 / 3）

九州歴史資料館所蔵



赤坂焼窯跡出土遺物

## 筑後 15 本星野焼窯跡

所在地：八女市星野村大字本星野

経営：久留米藩

焼物名：星野焼

年代：享保年間～宝暦年間

明治 20 年 (1887) 頃～明治 27 年 (1894)

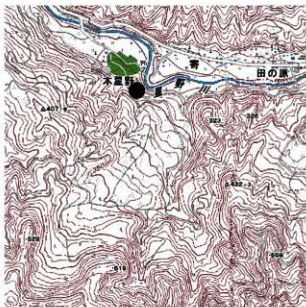
現況：畑地

釈形焼を引き継ぎ、庄屋高木与三右衛門により享保年間に始められる。十六葉菊向附六人揃の箱に享保 9 年 (1724) とあるのが初現。久留米藩の山方史料である「山方小物成方格帳」によると、元文 2 年 (1737) に御用窯として認可された。室山熊野神社の陶製灯籠には元文 3 年 (1738) の紀年と与三右衛門の子、与次右衛門の名がみえ、御用窯認可の感謝を込めて奉納されたものであろう。その後、宝暦年間初頭に高木宇平次により十籠へ窯が移された。

明治 20 年 (1887) 頃に十籠の陶工森松勢蔵が小石原との関係が濃厚な池上清一や坂本計太とともに本星野に再び窯を築くが、明治 27 年 (1894) をもって廃絶した。

窯跡は星野川に近い尾根先端近くに位置する。

器種は、初期のものは茶の保存・運搬のための陶器壺を主体とするが、御用窯となってからは茶器・食器・花器・香炉等多彩となる。図工がいないため、文様図柄の型で押し出したものがある。「星の」等の刻印をもつものもある。



窯跡位置図『八女』(1/25,000)



窯跡現況 (近景)



森松勢蔵の墓



## 筑後 16 星野十籠焼窯跡

所在地：八女市星野村麻生・十籠

経営：久留米藩

焼物名：星野焼

年代：宝暦年間～明治27年(1894)

現況：畑地・道路

宝暦年間(1751～1763)の初頭頃に高木宇平次が本星野から十籠へ移した窯。本星野から引き続き御用窯は継承され、廃藩置県に至るまで代々続く。中でも良八は久留米藩主9代有馬頼徳の御庭焼(柳原焼)の窯に召し出され活躍する。その頃、森松善助・安次親子が陶工として名をなすが、明治維新後、藩による庇護がなくなり窯の経営は傾いた。森松安次・勢蔵親子は十籠の中古野に窯を築き、その後明治6年(1873)に豊岡村今(八女市黒木町今)に移り今村焼を開窯する。安次の死後、勢蔵は再び十籠に戻り作陶を続けるとともに本星野でも新たに開窯した。明治27年(1894)に閉窯した。

窯跡は、急峻な丘陵が緩斜面となる旧星野村中心地に位置する。約30年前の町道拡幅時に遺物を確認した地点を十籠窯跡Aとしている。今回の現地踏査では、窯跡は確認できなかったが、物原推定地周辺で焼土片や陶器片を採集した。『筑後陶査考』では高木窯としており、宝暦年間からの窯跡かと思われる。十籠窯跡Bとしている地点は『筑後陶査考』で森松窯としている窯跡。

器種は陶器の壺・甕を主体とし、「星野十籠焼」等の文字を刻むものがある。



窯跡位置図『十籠』(1/25,000)



窯跡現況 (遠景)

## 筑後 19 釈形焼窯跡

所在地：八女市黒木町笠原字釈形

経営：久留米藩

焼物名：釈形焼

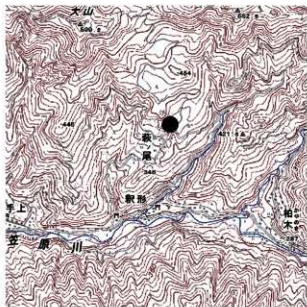
年代：17世紀～享保年間（18世紀前半頃）

現況：山林

個人蔵の茶甕の木蓋に元禄11年（1698）銘があり、文献では『石原家記』の正徳4年（1714）12月に「釈形焼」の記事があるため、元禄年間の開窯と考えられる。ただし有馬豊氏が元和6年（1620）に久留米に入封した後の寛永9年（1632）や正保4年（1647）の書状に黒木の焼物のことが記されており、これが釈形焼の可能性も残される。閉窯は本星野に窯を移す享保年間とされる。

窯跡はなだらかな東南傾斜地の山裾で、上部構造は確認できないが、周辺で焼土塊等が採取される。複数基築かれた可能性も考えられる。近隣にカメヤキドン（甕焼殿）の墓があり開墾に伴い改葬され地蔵を祀るとされるが、確認できなかった。北側に甕焼山があり、原料の白土を採ったとされる。甕焼山にも窯があったと伝えられるが、情報が少なく確認はできなかった。

製品は茶の容器としての陶器甕壺類が中心で、伝世品には「釋」「釈」の一字か、長方形枠内に「釈形」と楷書で刻んだ印がみられる。窯跡で採集される製品は陶器の小片やハマ、焼土塊等少量に留まる。



窯跡位置図「黒木」（1/25,000）



窯跡現況（近景）



釈形焼窯跡出土遺物



釈形焼窯跡出土遺物実測図（1/3） 八女市教育委員会所蔵

## 筑後 20 鹿子生焼窯跡

所在地：八女市黒木町鹿子生

経営：民窯

焼物名：鹿子生焼

年代：創業不明

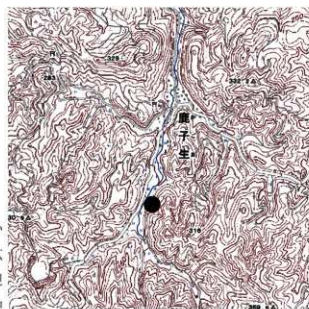
最終段階は天保6(1835)年間窯

現況：災害により消滅

『筑後陶査考』によると窯は持田山の真下に三か所あったとされる。窯ヶ谷という地名の場所には広範に陶片・磁器片・焼土が点在したとされるが、現在では確認できなかった。丘陵西斜面裾の現在地となっている地点は皿山と呼ばれ、天保6年(1835)頃に長岡鳳鳴が窯を開いた場所とされる。以前は石垣にトンバイが埋め込まれており、周辺からは焼土や陶片などが出土した。長岡鳳鳴が開いた窯は鹿子生焼の最後の窯とされる。平成24年(2012)の九州北部豪雨により被災し、窯跡は失われた可能性が高く、他の窯については記録類がないため、開窯時期等不明瞭な点が多い。平成6年(1994)11月に皿山の前面(西側)を圃場整備前に県教育委員会が試掘調査を行ったが、遺構等は確認されなかった。

長岡鳳鳴は食器・茶器・酒器・神仏具・装飾品等多岐にわたる陶器・磁器を焼いたとされる。

現在残る採集資料は少ないが、陶器碗やトチン・サヤ等の窯道具、トンバイがある。窯道具には磁器片が付着しており、陶器・磁器両者を焼いていたことがわかる。



窯跡位置図『黒木』(1/25,000)



石垣に組み込まれたトンバイ 平成6年(1994)

## 筑後 21 池の本焼窯跡

所在地：八女市黒木町木屋

経営：柳河藩

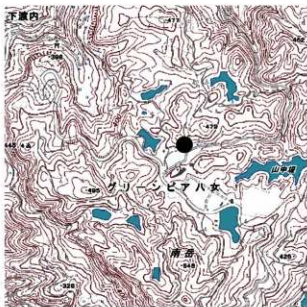
焼物名：池の本焼

年代：17世紀か

現況：山林

記録類にあらわれない窯で、1980年代のグリーンピア八女造成時に発見され、発掘されたとされるが、調査主体を含め詳細は不明である。

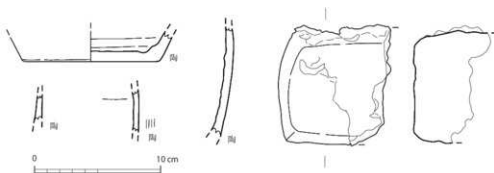
窯跡は熊本県境にあたる筑肥山地の山中、標高約450 mに位置する。現在も存在するとみられ、想定される場所の周辺からは陶器小片や焼土片が出土する。陶片は薄手で内面に青海波当て具痕を残すもので、17世紀に位置づけられる可能性がある。



窯跡位置図『黒木』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



池の本焼窯跡出土遺物実測図(1/3)

八女市教育委員会所蔵

## 筑後 22 男ノ子焼窯跡

所在地：八女市立花町北山男ノ子

経営：柳河藩

焼物名：男ノ子焼

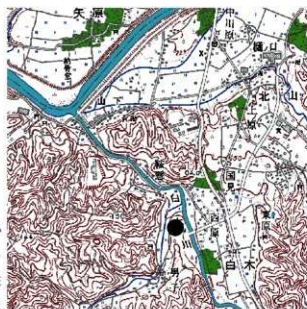
年代：

現況：山林

備考：県 720146 として周知化

柳川藩立花宗茂が三瀬郡浜口村（現在の大川市小保）にて朝鮮人陶工に開窯させたものの原料が乏しく、この地に移ったとされる。開窯の地から浜口姓を名乗ったが、浜口六左衛門が藩主立花鑑虎に献上した陶器に対し不備があり、怒りを恐れて肥後国正臺山に居を移したと伝えられる。操業期間は80年程とされる。

窯は矢部川左岸の丘陵先端部西斜面に位置する。里道造成の際に陶片が多く出土したというが、現状で窯は確認できず、前面の畑からトチンとすり鉢片を採集した。茶壺の他に茶碗や磁器を焼いたとされるが、今回の調査では茶壺の伝世品のみを確認した。窯跡がある地は「窯床」の小字が残る。上流の現在男ノ子焼の里がある地は「瓶焼」の小字が残るため、複数の窯が存在する可能性がある。またそのさらに上流は「白石」と呼ばれ、釉の原料となる長石が多く産出する。



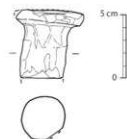
窯跡位置図 『八女』 (1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



窯跡現況 (近景)



男ノ子焼窯跡出土遺物実測図 (1/3)

九州歴史資料館所蔵

## 筑後 25 二川〔後田〕焼窯跡

所在地：みやま市高田町下楠田、上楠田

経営：民窯

焼物名：二川焼

年代：江戸時代末～昭和19年(1944)

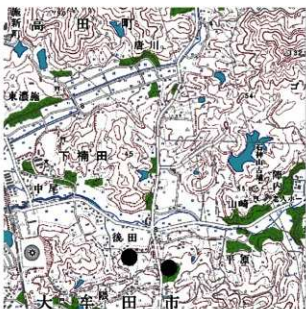
現況：山林

備考：県800005～800008、市0148①～④として周知化

江戸期に丑之助が来て柳河藩主立花家の許可を得て始めたのが起源とされる。明治になり肥前弓野(佐賀県武雄市)から中尾米作が移り住み、弓野焼の手法を伝えたこととされ、松絵を代表的とする鉄絵緑彩の甕や大皿を焼いた。明治44年(1911)の記録には「土焼陶器四戸」の記載があり、昭和初期には上楠田(角窯)・後田(富重窯)・中尾(岡崎窯)・濃施(今村窯)があったとされる。

窯は旧高田町市街地に近い低丘陵にいずれも構築された。現在は角窯と富重窯の窯跡が良好な形で残る。丑之助が創業した初期の窯は特定できていない。

陶器窯で、かつては鉢・壺・甕・皿・徳利等を主体としたが、蘭鉢・捏鉢・骨壺・藍壺・半胴甕・土管・耐酸瓶等を多く焼くようになった。麦や蠟の生産が盛んであったため捏鉢の需要が高かったが、生活様式の変化や機械化により減退した。大正8年(1919)の頃に開かれた富重窯の製品には銘印がある。



窯跡位置図『柳川』(1/25,000)



富重窯跡現況(近景)



二川焼

みやま市教育委員会提供



## 筑後 28 黒崎焼窯跡

所在地：大牟田市碑字黒崎

経 営：

焼物名：黒崎焼

年 代：天明年間～明治

現 況：山林

備 考：市 452 として周知化

山本家により天明年間(1780年代)に創業されたと伝わる。その後も山本家により継承され、寛政年間にかけての初代嘉作、二代友助の時代が最盛期で、「於黒崎村嘉作」「於黒崎村友助」と底に刻む作品があるという。嘉永年間(1850年代)に下火となり、明治の始め頃に廃絶したとされる。

窯跡は、眼下に有明海や干拓地を臨む甘木山丘陵の先端、黒崎山中腹の南斜面に位置する。かつては窯体が観察できたようであるが、現状は比較的急な傾斜地に平坦面を造成している状況をなし、斜面下に窯壁片や陶片が散見される。かつての記録では、長さ10m余、幅4m前後、高さ1～2m余とされている。

採取された資料は磁器の碗・皿が主体を占めるが、焼き損じたすり鉢片もあり、陶器・磁器両者を生産していたものと判断される。窯道具にはトチン・ハマがある。



窯跡位置図『大牟田』(1/25,000)

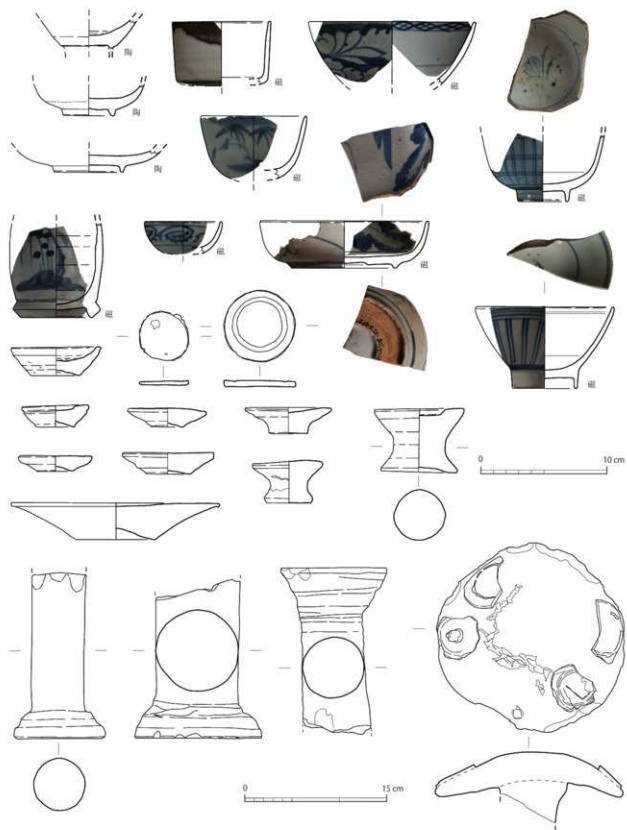


窯跡現況(遠景)



窯跡現況(近景)





黒崎坑窟跡出土遺物実測図(1/3)

大牟田市教育委員会所蔵

## 豊前 1 菜園場窯跡

所在地：北九州市小倉北区菜園場

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：17世紀

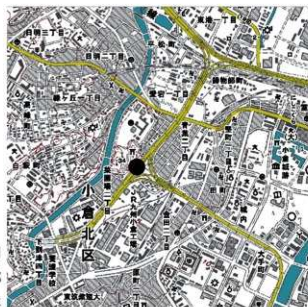
現況：移築し整備

県指定有形文化財（考古資料）

備考：市 2023 として周知化

小倉藩主細川家のお楽しみ窯で二代目の忠利御用の窯とされる。かつては幻の窯とされてきたが、都市計画道路建設に先立ち発見され、昭和 54・57 年（1979・1982）に財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室により愛宕遺跡として発掘調査が行われた。現在は隣接地に移築され、県指定有形文化財（考古資料）として保存されている。

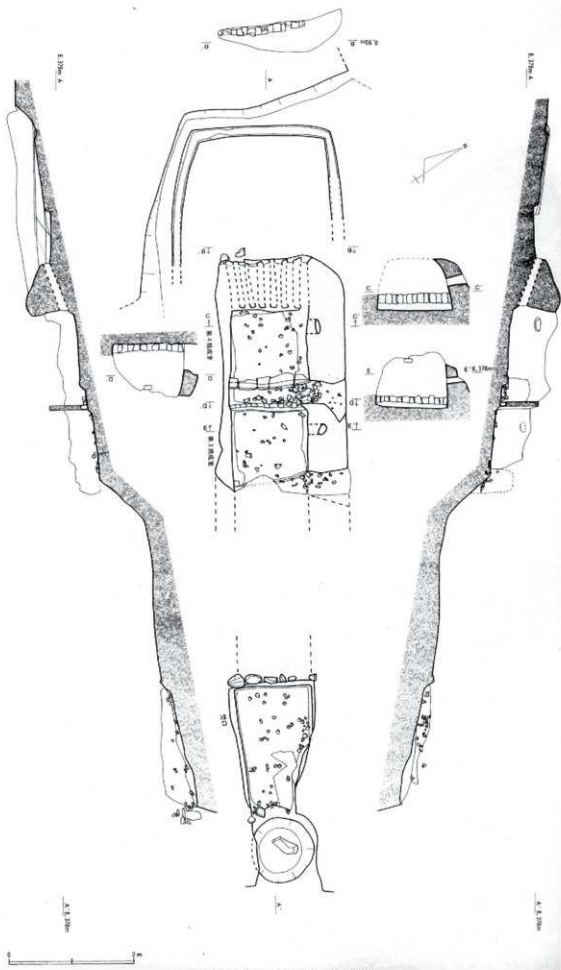
愛宕山東麓、旧板櫃川左岸の河口付近の標高 2～11m の緩斜面に位置する。全長 16.6m の割竹形登窯で、焚口、焼成室 4 室を持つ。出土品には陶器の碗・茶入・水指等があり、薬灰釉、鉄絵、刷毛目、三島手など多彩であり、白磁や染付、焼締陶も見られる。窯道具はトチン、ハマが出土しており、貝目跡が顕著に残る。



窯跡位置図『八幡』（1/25,000）



窯跡（調査時）  
北九州市提供



菜園場窯跡実測図 (1/60)

## 豊前4 釜ノ口窯跡

所在地：田川郡福智町上野字釜蓋

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：慶長7年(1602)～寛永9年(1632)

※1601～1632年説あり

現況：山林

備考：県890015として周知化

慶長7年(1602)に細川忠興が小倉に入城後まもなく尊指一族により創業されたとされる。細川氏が肥後熊本城への移封とともに八代に移るまでの約30年間操業された。元和8年(1622)の『田川郡家人番改帳』に上野村焼物山に「焼物師八人 売子十人」とあり、本窯に係るものと考えられる。

福智山の南西山麓の集落域から外れた標高約160mに位置する。昭和30年(1955)に日本陶磁協会等が主体となり調査を実施し、全長約41mの胴木間と15室からなる割竹式の登窯を検出した。窯は3回の改築した状況がみられるという。窯周辺には工房跡かと想定される平坦地がひろがる。

陶器の皿・碗・茶入・水指・片口など多種多様な出土品がみられるが、正式な報告書が未刊であるため、実態がつかみ難い。

昭和30年(1955)5月27日(再び昭和32年(1957)8月13日)に史跡の仮指定がなされたが、指定には至っていない。

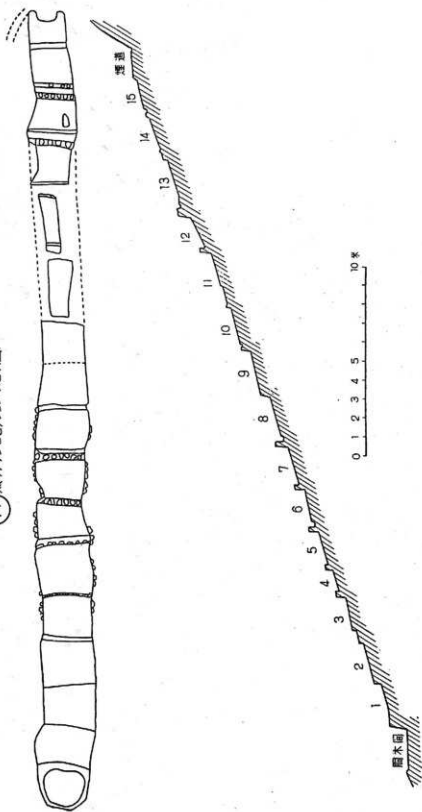


窯跡位置図『金田』(1/25,000)



窯跡現況(近景)

74) 葦のプランとセクションの図



釜ノ口窯跡実測図 (1/200)

## 豊前6 皿山本窯跡

所在地：田川郡福智町上野字皿山

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：元和・寛永年間～明治4年(1871)

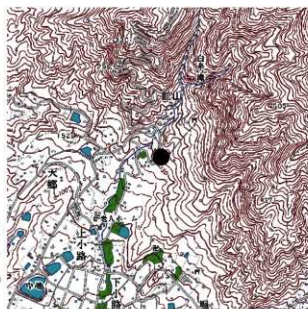
現況：竹林

備考：県890014として周知化

豊前小倉藩の御用窯であり、細川藩時代の創業と考えられる。細川氏の肥後移封に伴い尊楮は長男・次男を連れて八代へ移るが、上野では三男と娘婿の二家が継承し、本窯を操業したとされる。

福智山南西山麓に位置し、釜ノ口窯から一つ尾根を挟んだ北西にあたる。周辺は福智山信仰にかかる坊跡が点在する。

窯は明治期まで長期にわたって営まれ、厚い物原が形成される。長大な構造が想定されるが、具体的な室数等、規模は不明である。小笠原藩時代の操業が中心であり、多種多様な技法・釉薬の陶器がみられる。釜ノ口窯と共通する古式の陶片が含まれるため、開窯は細川藩時代の釜ノ口窯と並行する時期まで遡る可能性がある。



窯跡位置図『金田』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



窯跡現況(窯跡石碑)

## 豊前9 岩屋高麗窯跡

所在地：田川郡福智町弁城字岩屋

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：慶長・元和年間～寛永年間

現況：山林 道路

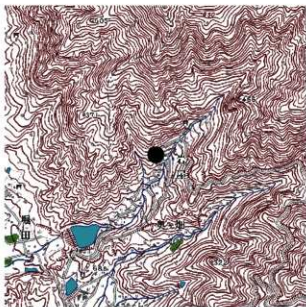
備考：県 840002 として周知化

元和8年(1622)の『田川郡家人番改帳』に弁城村焼物山に「焼物師五人 売子十一人」とあり、本窯に係るものと考えられる。元禄7年(1694)の「豊州紀行」にはみられず、皿山本窯で主体的にみられるような小笠原期のものが含まれないため、操業期間は釜ノ口窯に近いものと想定される。

福智山南西山麓に位置し、釜ノ口窯からは南に尾根を隔てた比較的狭い谷地形に位置する。この谷も福智山信仰に重要な谷とみられ、坊跡が連なる。

かつては通燻孔が並んでいた状況がみられたが、現在では確認できない。これは窯上部であったとされ、道路拡幅時に失われた可能性がある。規模・構造等は不明である。

出土品には陶器の皿や碗類の他、多様な器種がみられる。



窯跡位置図『金田』(1/25,000)



窯跡現況 (近景)



窯跡現況 (窯跡石碑)



## 豊前 12 田香焼窯跡

所在地：田川郡香春町高野字常安

経営：小倉藩

焼物名：高野田香焼

年代：天保年間(1831～1845)～明治

現況：竹林

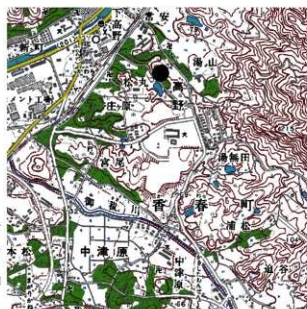
備考：町225として周知化

奥田儀三郎が分家して、天保5年(1834)にはすでに開窯していたとされるが、文献記録がほとんどなく詳細は不明である。田香焼の廃窯後は山岡徹山親子が昭和31年(1956)に香春焼を築窯した。

飯岳山から北西に延びる丘陵の先端、金辺川左岸に位置する。丘陵南西斜面に築かれ、長さ約22m、幅約7mの窪地を確認した。南西側の下る急斜面や池が物原にあたり、遺物片が散在する。出土品には陶器の碗・皿・徳利・水甕・花筒・茶碗・湯呑・狛犬や窯道具がある。「清」の銘がみられる。磁器も焼成したが、出土品はごく僅かである。

周辺の墓地には奥田儀三郎の墓がある。

北西に隣接して香春焼の窯が残るが、現在は使用されておらず、香春焼は飯岳山北麓で継承されている。香春焼には「かわら・香春」の銘がある。



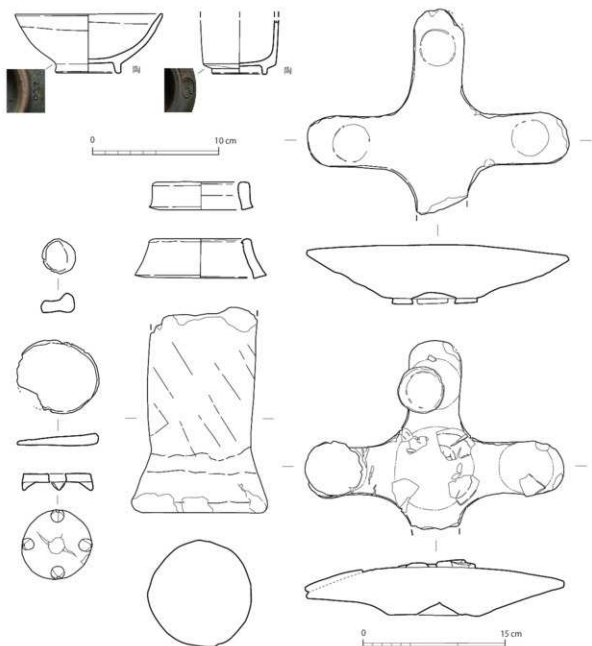
窯跡位置図『田川』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



奥田儀三郎の墓



田香焼・香春焼窯跡出土遺物実測図（1/3・1/4）香春町教育委員会蔵



田香焼・香春焼窯跡出土遺物

## 豊前 14 田香焼窯跡

所在地：田川郡大任町堂原

経営：小倉藩

焼物名：今任田香焼

年代：寛政年間～明治

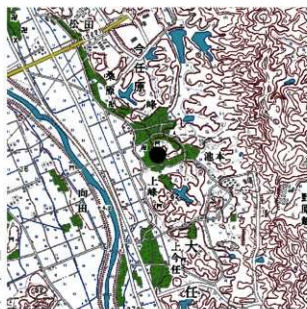
現況：竹林

備考：町225として周知化

上野焼の系譜に連なる窯跡。寛政8年(1796)に成立した天草上田家文書『近国焼物山大概書上帳』に「藤原(堂原)皿山 窯一登 此数六間」「今藤(今任)皿山 窯一登 此数凡六七間」とし、「藤原(堂原)皿山」には8人の陶業者がおり、「楽焼師」が1人いと記される。この記述から、寛政年間には開窯していたものと判断できる。終焉の時期は不明である。

彦山川右岸の標高50m程度の小丘陵南斜面に位置する。平成6～8年(1994～1996)に大任町教育委員会によって発掘調査が行われ、2基の窯が確認されている。1号窯は全長12～15m程の階段状連房式登窯で、焚口と焼成室5室がある。トンパイの使用は通埧孔、火あぜのみである。2号窯は全長10.5mの階段状連房式登窯で焚口と焼成室が3室検出され、トンパイが壁材にも使用される。

碗・皿・鉢・すり鉢・片口・徳利等の日常雑器を主としていたが、小笠原藩茶道師範小市自得斎の指導のもと茶陶も焼いたという。上野焼に見られる象嵌や緑青釉の存在が知られる。また、少数ながら磁器を焼いていたことが判明している。窯道具にはトチン、ハマ、タコハマ、サヤ鉢などが見える。とくに、サヤ鉢に足のつく特異な窯道具が目される。



窯跡位置図『田川』(1/25,000)

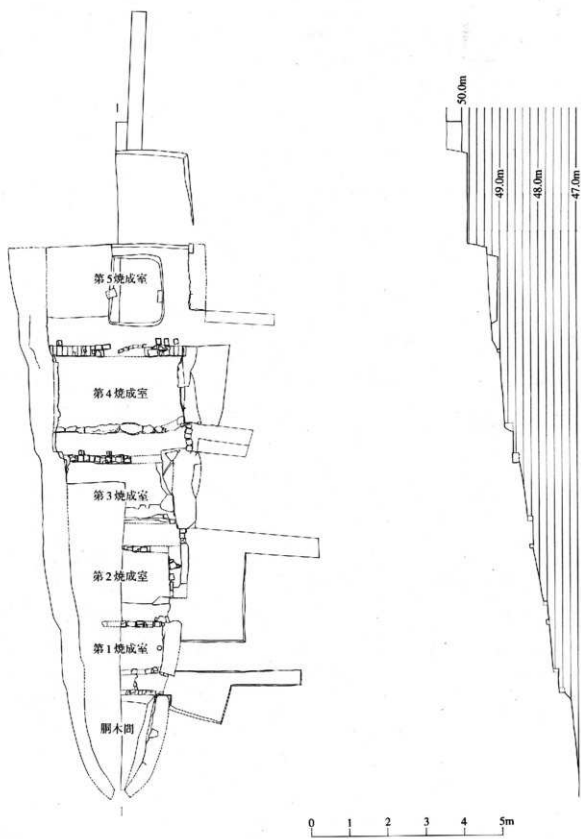


窯跡現況(遠景)



窯跡(調査時)

大任町教育委員会提供



田香烧1号窑跡实测图 (1/100)

## 豊前 15 乙子焼窯跡

所在地：京都府みやこ町上高屋字乙子

経営：民窯

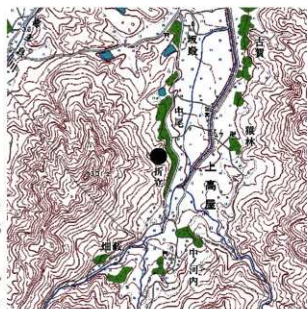
焼物名：乙子焼

年代：江戸時代

備考：町 910226 として周知化

近世の操業免許の記録があり、藩の奨励策に応じた開窯と考えられる（国作手永大庄屋日記 安政5年9月21日条）。

高屋川左岸の帝釈天山麓に所在する。山林に碗や鉢等の陶器片やトチン・ハマ等の窯道具、トンバイが散布する。連房式登窯とされるが、現況で窯体は確認できない。陶片の量は多くはなく、操業期間はそれほど長くない可能性がある。



窯跡位置図 『豊前本庄』(1/25,000)



窯跡現況 (遠景)

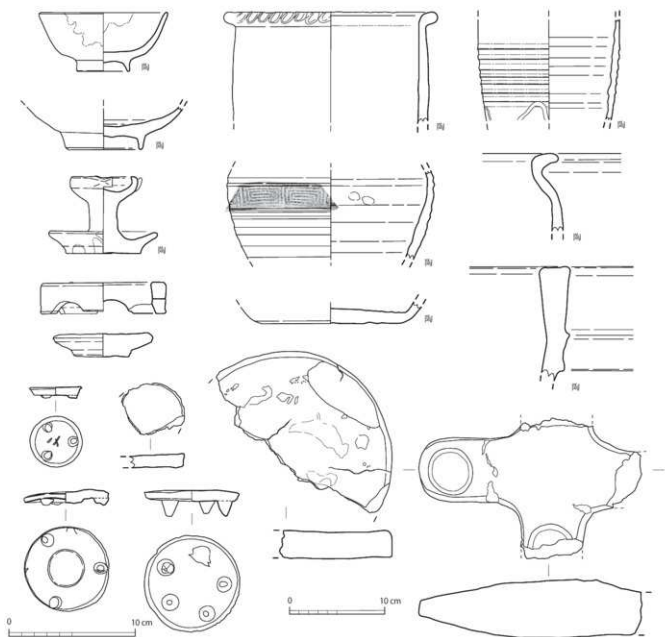


乙子焼窯跡出土遺物

屏川町教育委員会『城井遺跡群』(1992) 所収分



窯跡現況 (近景)



乙子焼窯跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

九州歴史資料館所蔵



乙子焼窯跡出土遺物

## 豊前 16 錦原皿山窯跡

所在地：京都府みやこ町大字豊津

経営：民窯

焼物名：豊津焼

年代：江戸後期?～明治

現況：竹林

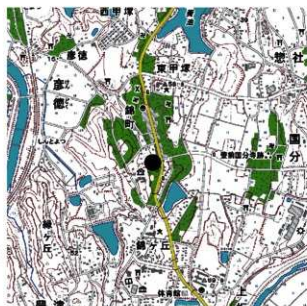
備考：「石走り南遺跡」

町 920112、県 920140 として周知化

明治2年(1869)豊津開府の需要で瓦を焼いたとされる。

昭和30年(1955)、豊津町遺跡調査で見られる。錦町と石走り西山麓に所在したとされるが、錦町のみ残るものと見られる。今川と視川に挟まれた南北に延びる低丘陵上に位置する。

みやこ町歴史民俗博物館には小笠原家別邸「御内家」に葺かれていた瓦が保管されており、本窯で焼かれた可能性が高い。「皿山」の地名から、陶磁器を焼いた可能性もあるが、実態は明らかでない。



窯跡位置図『行橋』(1/25,000)



窯跡現況(遠景)



小笠原家別邸「御内家」に葺かれた瓦



## 豊前 18 唐原焼窯跡

所在地：築上部上毛町上唐原

経 営：

焼物名：唐原焼

年 代：

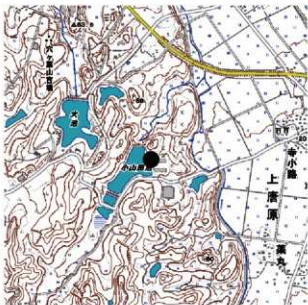
現 況：池

備 考：上毛町指定史跡

黒田長政が中津城に入った際に、高取焼陶工八山に焼かせたと伝わるが、採集資料からは古く遡るものは確認されない。

山国川左岸の低丘陵斜面に位置し、昭和30年(1955)頃に築造された池畔にある。階段状に窯の床面と判断される面が観察され、窯道具等が採取された。

採集資料は参考文献の報告書に紹介されているもの以外に、旧制福岡高等学校歴史地理資料室「玉泉館」にも所蔵されており、現在は九州大学総合研究博物館に収蔵されている。



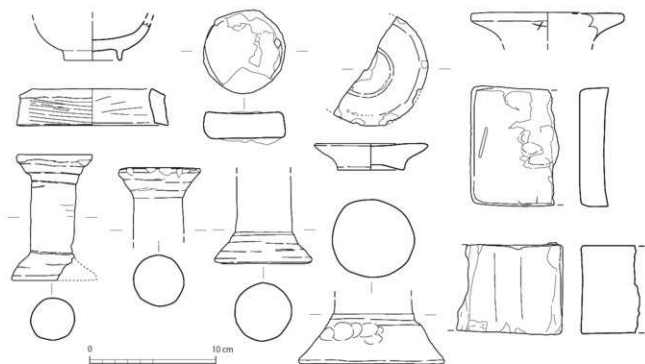
窯跡位置図 『土佐井』(1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



窯跡現況 (近景)



唐原燒窯跡出土遺物実測図（1 / 3）

九州歴史資料館所蔵



唐原燒窯跡出土遺物

福岡県教育委員会『百留居屋敷遺跡』（1999）所収分



唐原燒窯跡出土遺物

## IV 総括

### 1. 調査成果

#### (1) 調査表1

調査表1では筑前53件、筑後32件、豊前21件の総数106件の窯跡の情報を得た。それぞれの旧国別に状況のみをみる。

(筑前)すでに窯跡の所在が確認されているのは、16件である。それ以外に今回の現地踏査で窯跡を確認できたのは8件、現地で窯跡を確認できなかったが、窯跡の関連遺物を確認できたのが7件である。今回の調査で確認できなかった窯跡は18件で、その内2件は消滅していた。

筑前 53件

※()内は調査表1の番号

○確認されている窯跡 16件

発掘調査 16件		
永清寺宅間窯跡 (1)	上畑窯跡 (10)	須直焼窯跡 (29)
内々磯窯跡 (2)	千石窯跡 (11)	中野上の原窯跡 (32)
山田窯跡 (4)	大鳴窯跡 (13)	火口谷窯跡 (33)
猪之鼻窯跡 (5)	能古焼窯跡 (16)	金敷様裏窯跡 (38)
白旗山窯跡 (8)	西皿山窯跡 (23)	一本杉窯跡 (39)
		釜床窯跡 (42)

○今回の調査で窯跡又は遺物を確認した窯跡 15件

窯跡 8件	遺物 7件
黒田窯跡 (6)	野口窯跡 (7)
野間焼窯跡 (27)	東皿山窯跡 (22)
夜所畑新窯跡 (30)	宇美障子岳窯跡 (31)
日下組窯跡 (35)	十文字窯跡 (40)
日上組窯跡 (36)	龍研窯跡 (43)
	三並ヒエダ窯跡 (46)
	野島窯跡 (48)

○今回の調査で確認できなかった窯跡 18件

不明 7件	参考文献からの情報 9件	現在も続く 4件
大庭谷窯跡 (17)	山部窯跡 (3)	石崎焼 (49)
友泉平窯跡 (18)	相田窯跡 (9)	糟尾焼 (50)
荒戸山窯 (19)	上野窯 (14)	宗七焼窯跡ほか (28)
東松山窯 (20)	湯野焼窯跡 (15)	津原崎人形 (51)
田嶋窯 (21)	英一窯 (24)	幸野瓦 (52)
島刺茶屋窯 (25)	日明窯跡 (44)	今宿人形 (53)
大明神窯跡 (34)	雷山窯跡 (45)	
		消滅 2件
		浅ヶ谷【朝谷】窯跡 (12)
		今川高取窯跡 (26)

(筑後)発掘調査が行われたのは、現在の久留米市にある2件のみで少ない。現地調査を行い、陶器片や窯道具などを採集できた10件については、窯跡の所在を判断できた。今回の調査で確認できなかった

筑後 32件

○確認されている窯跡 2件

発掘調査 2件
朝雲焼窯跡 (3)
東野亭【野中】焼窯跡 (4)

○今回の調査で窯跡又は遺物などを確認した窯跡 10件

窯跡 5件	遺物 5件
一の瀬【朝田】窯跡 (1)	本屋野焼窯跡 (15)
赤坂焼【三原】窯跡 (12)	星野十徳使窯跡 (16)
鞍形焼窯跡 (19)	鹿子生地窯跡 (20)
二川【後田】焼窯跡 (25)	池の本底窯跡 (21)
黒崎焼窯跡 (28)	男ノ子焼窯跡 (22)

○今回の調査で窯跡が確認できなかった窯跡 18件

不明 14件	参考文献からの情報 4件	現在も続く 2件
柳原焼窯跡 (2)	野町焼窯跡 (14)	赤石焼 (29)
十三郎焼窯跡 (5)	田の原焼 (17)	糠東焼 (30)
日渡焼窯跡 (6)	今村焼窯跡 (18)	綱山【水瀧】焼 (31)
青木焼窯跡 (7)	浜口【小保】焼 (23)	鎌山焼 (32)
久留米焼 (8)	蒲池【柳河】焼窯跡 (24)	
田川焼窯跡 (9)	バカツクラ【姥ヶ焼】窯跡 (26)	
坂東寺【熊野】焼窯跡 (11)	伏部焼窯跡 (27)	
茶石碑のみ		

た窯跡は 20 件になる。

なお、鹿子生焼窯跡は約 30 年前に窯跡を確認していたが、近年の災害で破壊され消滅していた。さらに坂東寺〔熊野〕焼窯跡は石碑のみで、窯跡は確認できなかった。それ以外の 18 件については窯跡を確認できなかった。

〔豊前〕すでに窯跡を確認できるのは 6 件、それ以外の 3 件については、陶器片や窯道具など採集でき、現地踏査で窯跡の存在を判断できた。その他、12 件については参考文献からの情報のみで、新たな情報は得られなかった。

豊前 21件

○確認されている窯跡 6件 ○今回の調査で窯跡又は遺物を確認した窯跡 3件

窯跡 6件 (発掘調査 5件)	窯跡又は遺物 3件
栗園場窯跡 (1)	田香焼〔高野〕窯跡 (13)
釜ノ口窯跡 (4)	乙子地窯跡 (15)
皿山本窯跡 (6)	鍋原皿山窯跡 (16)
岩屋高麗窯跡 (9)	
田香焼〔今任〕窯跡 (14)	
唐原焼窯跡 (18)	

○今回の調査で確認できなかった窯跡 12件

参考文献から情報 12件		
小倉清水焼 (2)	吉右衛門谷窯跡 (10)	太郎助楽焼 (20)
高保窯 (3)	甲賀焼〔幸賀窯〕 (11)	水町焼 (21)
カンバ窯跡 (5)	鳩軒 (12)	
山ノ神森ノ下窯跡 (7)	漆田皿山 (17)	
かくし窯跡 (8)	常山焼 (19)	

#### ○参考資料

参考資料として、明治～昭和時代にかけて窯業に関わる工場についても情報 (p36～p45) を掲載している。この時代の窯業関連工場では、主に植木鉢、七輪、瓦、煉瓦、陶管、土管、衛生器、歯子<sup>ハシ</sup>などを製造していた。主に『筑前国統風土記』『筑前国統風土記付録下巻』『工場通覧』『全国工場通覧』『工學博士北村彌一郎窯業全集』などの参考文献と市町村からの情報により、筑前 72 件、筑後 100 件、豊前 9 件の総数 181 件が確認された。

筑前では、件数の多い順に現在の自治体別にみていくと、福岡市 22 件、遠賀郡芦屋町 8 件、北九州市 6 件、太宰府市 5 件、朝倉市 4 件、古賀市 4 件、遠賀郡遠賀町 4 件、遠賀郡水巻町 4 件、糸島市 3 件、飯塚市 2 件、宗像市 2 件、糟屋郡粕屋町 2 件、以下、大野城市、筑紫野市、嘉麻市、宮若市、糟屋郡志免町が各 1 件存在した。

福岡市では、市内の西新町や野間で、高取焼や野間焼の関連で植木鉢、陶管、煉瓦を製造していた。また遠賀町、水巻町、芦屋町では瓦製造の件数が 16 件と多く、この地域は瓦産業が盛んであったことが窺え、水巻町の副田瓦工場 (56) は嘉永 4 年 (1851) の開業との情報があるが、詳細については不明である。なお、江戸時代に始まる瓦製造は太宰府市 (40～42・44) に、4 件ある。

筑後では久留米市 58 件、みやま市 24 件、柳川市 8 件、大牟田市 3 件、八女市 1 件、三浦郡大木町 6 件で、主に瓦製造が多い。筑後では江戸時代後期頃と考えられる日渡瓦窯跡 (17) や明治時代～昭和時代にかけて普導寺で使用されたと考えられる普導寺瓦窯 (18・19) がある。また久留米市城島地区の瓦は、城島瓦と呼ばれ、江戸時代から現在に至るまで瓦が製造されている。なお久留米市の一部地域で煉瓦・陶管、大牟田市では磁管が製造されていた。

豊前では、他の地域より情報が少ない。北九州市5件、豊前市2件、田川郡糸田町1件、田川郡大任町1件の9件であり、工場では衛生器、煉瓦、瓦を製造していた。なお豊前では、豊前市（8・9）で江戸時代及び明治2年（1869）から瓦製造が行われていた。

## （2）調査表2

調査表2については、主に『筑前国統風土記拾遺』、『日本近世窯業史』の情報により、窯業の関連遺構として、筑前42件、筑後8件、豊前6件と総数56件を確認した。

筑前では、種別1（陶土の採掘地・磁石場など原料の採集地や集積地）について、土取り跡3件、原土や釉薬に関わる採掘地21件の情報を得た。詳細な場所までは確認できなかったが、これらが関連する焼物としては、高取焼、小石原焼、瓦町焼、野間焼、博多人形に関連すると想定される。時代は江戸時代が中心だが、明治以降のものもある。種別4（古陶磁生産に関連する神社・記念碑・墓地〔墓碑〕）の関連としては、近年に作られた窯跡の石碑が3件（永満寺宅間窯跡、内ヶ磯窯跡、山田窯跡）、陶工の墓石及び慰霊碑が6件あった。なお、陶神や火の神様、土神様など窯業に関連する石碑3件は、『小石原村史』に記載がある。その他、窯業に関連する神社は2件で、天照太神宮（高取焼）、皿山山王神社（野間焼）があたる。

筑後では、4についての情報が8件あった。その内、赤坂焼、坂東寺焼、水田焼、男ノ子焼、池の本焼、二川焼の石碑などが7件、星野焼の陶工の墓が1件ある。

豊前では、種別1の原土の採掘地が2件、種別4の上野焼の石碑が2件、陶工の墓が2件を確認した。陶工の墓2件の内、1件は田香焼（香春町）の陶工の墓である。

## 2. 福岡県における近世の窯跡と窯道具について

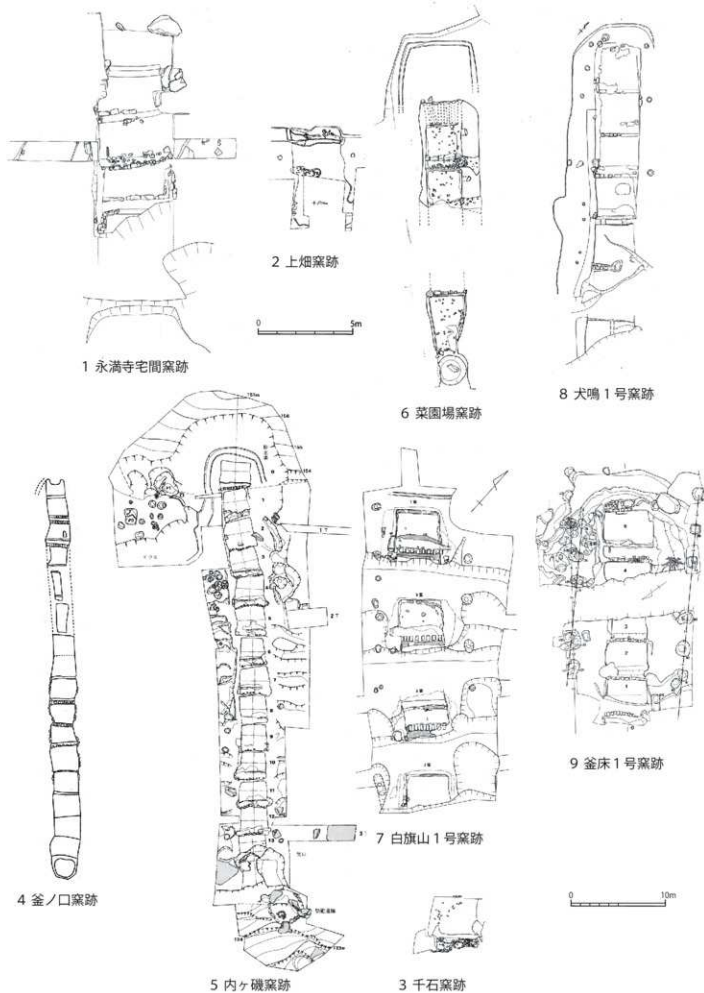
### （1）窯構造

p149に掲げた表はこれまで発掘調査が行われた窯跡の調査成果をまとめたものである。（註1）

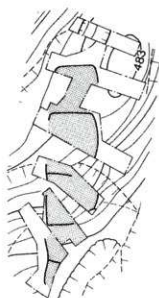
焼成室の計測値サンプルの検出方法については、『考古学ライブラリー 肥前陶磁』（大橋1989）を参考にし、先に今回調査した窯跡のデータを加え、それぞれの窯の形状の特徴を示す胴木間から焼成室4室前後の1室の計測値と比較した。

福岡県での窯跡の構造は、割竹式登窯と階段状連房式登窯の2種類に限られる。今のところ、肥前などで見られる単室登窯は検出されていない。県内で発掘調査が行われた近世窯業遺跡は佐賀県に比べると非常に少ないが、高取焼系窯跡では、時代順で永満寺宅間窯跡（筑前1）、上畑窯跡（筑前10）、千石窯跡（筑前11）、内ヶ磯窯跡（筑前2）、白旗山1号窯跡（筑前8）、犬鳴1号窯跡（筑前13）、釜床1号窯跡（筑前42）、一本杉1・2号窯跡（筑前39）、中野上の原窯跡（筑前32）、火口谷1・2号窯跡（筑前33）、金数椽裏3号窯跡（筑前38）がある。上野焼系窯跡では、釜ノ口窯跡（豊前4）、菜園場窯跡（豊前1）、田香焼1・2号窯跡（豊前14）、それ以外の窯跡として朝妻焼窯跡（筑後3）、東野亭焼窯跡（筑後4）などがある。ただ発掘調査が行われた釜ノ口窯跡・一本杉1号窯跡・金数椽裏3号窯跡は概要報告のみ、上畑窯跡については未報告である。

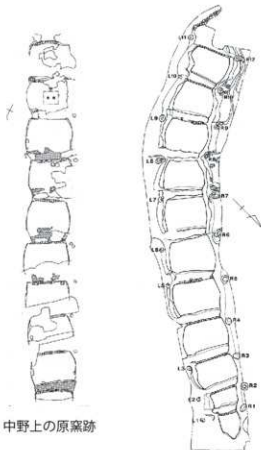
以上の調査結果を分析する上で、副島邦弘、大橋康二、野上建紀の3人の先行研究が参考になる。副



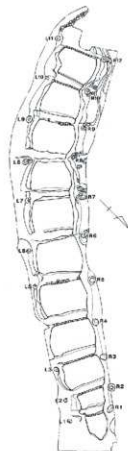
第1図 福岡県近世窯業遺跡1 (1/200、3・5のみ1/400)



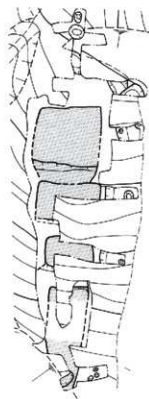
10 一本杉1号窟跡



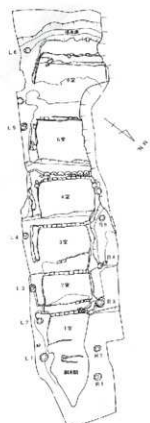
12 中野上の原窟跡



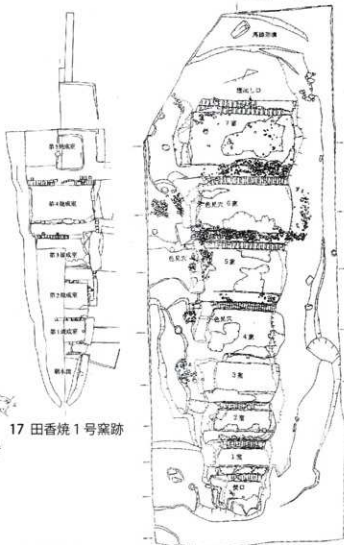
13 火口谷1号窟跡



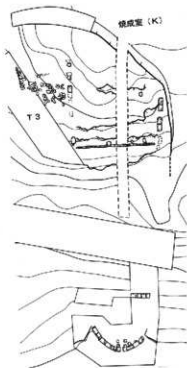
15 金敷様裏3号窟跡



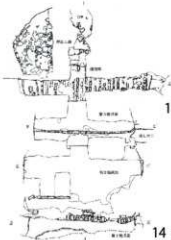
11 一本杉2号窟跡



14 朝妻焼窟跡



19 東野亭焼窟跡



17 田香焼1号窟跡

16 能古焼窟跡



島(副島 1983)は、福岡県内の窯跡を3つの登窯(割竹型登窯、半地下式階段状連房登窯、割竹型階段状連房登窯)に分類した。大橋は焼成室の平均幅・奥行きを計測して6つのグループに分け、そのグループごとに出土した窯道具を分類した(大橋 1989)。さらに『福岡の陶磁』で、福岡県の17世紀～18世紀の窯跡の位置付けを行った(大橋 1992)。野上建紀は『肥前の築窯技術の伝播について』(野上 2006)で、肥前でみられる3つの窯構造(単室登窯、割竹式登窯、階段状連房式登窯)から福岡県で検出された窯について分類した。これらの考察を踏まえて、今回、窯構造・窯道具という2つの視点から本県の特徴について考えたい。

#### ○割竹式登窯

割竹式登窯の外観は竹を二つに割って伏せたような形状で、内部は竹の節に当たるところが間仕切りの隔壁になり、天井はアーチ型で、蒲葺形となる。火はその隔壁に設けた通煙孔により窯内を巡る。また室と室との境は段差が小さい。平面は縦長形又は正方形で、中軸線は焚口から窯尻まで直線である。

県内の割竹式登窯の代表的な窯跡は、永満寺宅間窯跡と菜園場窯跡である。窯の形状はいずれも直線であるが、焼成室の形状は永満寺宅間窯跡で幅3.5m前後の広い横長形で段差はないが、菜園場窯跡は奥行2mを超える縦長形で段差があり、室の形状や大きさ、段差の有無で違いが認められる。

これ以降の割竹式登窯とされるのは17世紀後半の犬鳴1号窯跡がある。窯の形状は直線、室の形状は正方形である。焼成室の大きさは2.6mと菜園場窯跡の幅1.8mよりやや大きく段差がある。菜園場窯跡とは焼成室の大きさで異なるものの、焼成室の形状や段差の有無などから犬鳴1号窯跡に影響を与えた可能性がある。

さらに上畑窯跡も割竹式登窯の可能性がある。焼成室1室程度の調査であるが、幅2.7m、奥行3.9mを測る縦長形の焼成室1室を確認した。

#### ○階段状連房式登窯

階段状連房式登窯は、山腹の傾斜に添って地上にアーチ状の燃焼室を連ねた窯である。焼成室の境は段差を階段状に設け、平面は梯形で、中軸線は各室で異なる。

階段状連房式登窯は、県内では17世紀初頭～前半の釜ノ口窯跡と内ヶ磯窯跡が古い、17世紀初頭の釜ノ口窯跡が若干先行する。両窯の形状は焼成室が連なる直線状で、焼成室の形状は横長形で、幅が釜ノ口窯跡で2.0～3.4m(註2)、内ヶ磯窯跡で幅3m前後となる。内ヶ磯窯跡の焼成室幅と近い窯として千石窯跡では、残存幅2.8mを測る。その後、17世紀前半～中頃の白旗山1号窯跡で幅2.1m前後、17世紀中頃～後半の釜床1号窯跡は幅2.0～2.6mで正方形となる。

17世紀後半の一本杉2号窯跡以降の焼成室の平面形はまた横長形に変化し、肥前の陶工と関連があるとされる中野上の原窯跡は胴張り横長形となり、焼成室の大きさもこれまでの約3m以下から4m以上と、1m以上大きくなる。18世紀前半の朝妻焼窯跡ではこの傾向が拡大し、幅6.1mを測る焼成室も登場する。

なお、一本杉2号窯跡以降は窯の形状が直線であったものが、胴木間から徐々に焼成室が大きくなって行く扇形へと変わる(註3)。扇形の窯跡の胴木間～焼成室4室までの横幅は、一本杉2号窯跡で2.05～3.05m、火口谷1号窯跡で2.85～4.7m、田香焼1号窯跡で2.2～3.5m、金敷榎裏3号窯跡で2.1～3.5m、能古焼窯跡で2.68～4.0m、須恵焼新窯で2.0～3.4m(註4)と1～2m横に広がって

扇形になる。

また窯構造では遺構の残存状況に差異はあるが、各窯跡におけるトンバイ（直方体をなす窯体材）の使用が鍵となる。トンバイは、永満寺宅間窯跡～白旗山1号窯跡の17世紀前半までは通焰孔のみ使用されたものが、17世紀後半の犬鳴1号窯跡以降では焼成室の奥壁全体に使用範囲が広がる。さらに18世紀後半の能古焼窯跡ではトンバイの使用が焼成室5～7室に限定されるが、最も新しい19世紀中頃の東野亭焼窯跡では胴木間や焼成室の奥壁に加え、側壁にもトンバイが使用されており、この頃にはトンバイの窯での使用範囲が広がる。

以上、福岡県の近世窯跡構造の特徴をまとめると、下記の通りとなる。

- ・割竹式登窯は17世紀初期から始まり、17世紀後半の犬鳴1号窯跡以後は姿を消す。
- ・階段状連房式登窯は、17世紀初頭の釜ノ口窯跡、やや遅れて内ヶ磯窯跡から始まる。
- ・階段状連房式登窯の焼成室の形状は当初、横長形から正方形へ、その後横長形へと変化する。
- ・横長形へと変化した焼成室は、17世紀末の肥前の陶工と関連がある中野上の原窯跡から胴張り横長形となる。
- ・窯の形状は直線から扇形へ変化する。扇形は17世紀後半の一本杉2号窯跡から始まり、これ以降は扇形となる。
- ・トンバイの使用範囲が17世紀後半以降、通焰孔のみの使用から奥壁全体へと変わる。19世紀中頃の東野亭焼窯跡では焼成室全体に使用範囲が広がる。

## (2) 窯道具

福岡県内の近世窯跡からは、トチン・ハマ・サヤ・シノ・チャツ・ダンゴ（ダゴ・団子状）などの窯道具が出土しており、この様相から窯の変遷を追うことができる。

17世紀初期の永満寺宅間窯跡ではトチン、ハマのみだが、内ヶ磯窯跡ではシッタ、ハマ、トチン、輪下チ2点が出土する。この輪下チは茶入れなどを焼くために使用されたとの指摘がある（註5）。この後に続く白旗山1号窯跡・釜床1号窯跡でも茶器が作られており、ドーナツ状焼台（輪下チ）の出土が報告されている。菜園場窯跡ではトチン、ハマ、クサビ形焼台かと思われる1点が出土する。

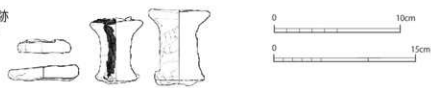
17世紀後半の犬鳴1号・2号窯跡、釜床1号窯跡、一本杉2号窯跡の共通のものとしてトチン・ハマ・クサビ形焼台（※釜床1号窯跡では出土していない）が出土する。これ以外のものとして釜床1号窯跡では桶胴形サヤ、棒状・ドーナツ状焼台（輪下チ）・円盤状焼台などが出土する。桶胴形サヤは白旗山1号窯跡でも出土する。同時期の一本杉2号窯跡ではシノやチャツの出土がある。チャツは肥前の影響を受けた窯道具との指摘があり（註5）、1650年以降に出現するチャツが一本杉2号窯跡、中野上ノ原窯跡、火口谷1・2号窯跡で出土する。17世紀末には、中野上の原窯跡で断面が逆台形状になるハマが出土する。他にも磁器製のハマ・チャツもあるが、この時期唯一磁器生産を行った中野上の原窯跡でしかみられない。またトチンに押印、スタンプ、ヘラ書きを施したものは中野上の原窯跡、火口谷1号窯跡で出土する。

18世紀前半の朝妻焼窯跡ではトチン・逆台形ハマ・チャツ・シノ・サヤが出土する。ここでは磁器も焼かれていることから磁器製のチャツも出土する。

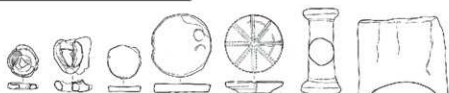
18世紀中頃～後半にかけては、窯跡の報告書が刊行されておらず、詳細は不明である。

18世紀末～19世紀中頃の窯跡では田香焼1号窯跡では、タコハマ（3足・4足・6足）、目、トチン、

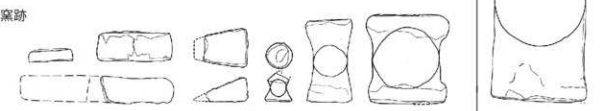
永満寺宅間窯跡  
17世紀初頭～



内ヶ磯窯跡  
17世紀前半～



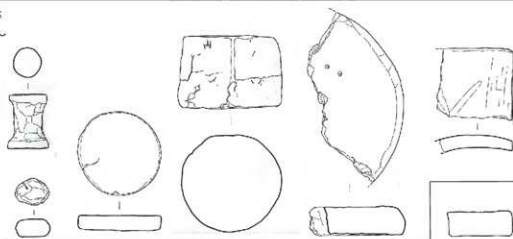
菜園場窯跡



白旗山1号窯跡  
～17世紀中頃



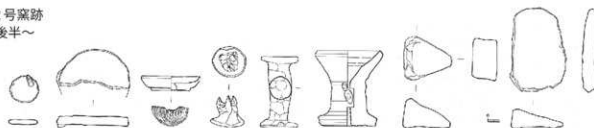
犬鳴1号窯跡  
17世紀中頃～



釜床1号窯跡

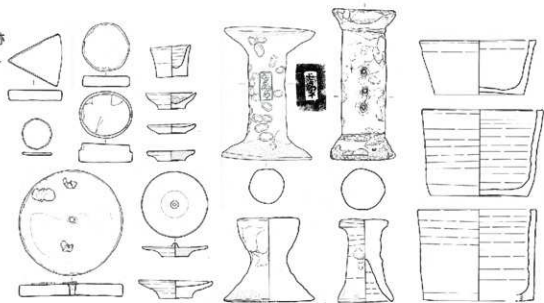


一本杉2号窯跡  
17世紀後半～

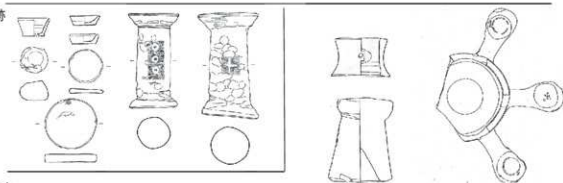


窯道具変遷図1 (1/3、1/4)

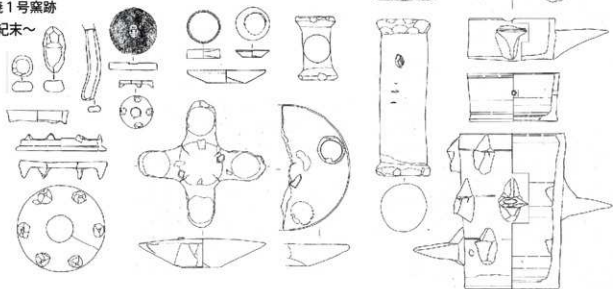
中野上の原窯跡  
17世紀後半～



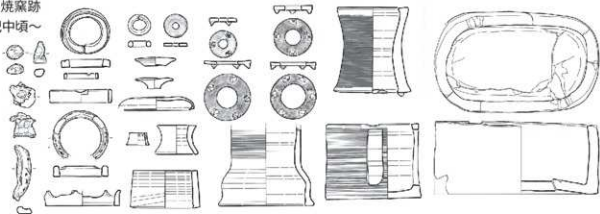
火口谷1号窯跡  
～18世紀前半



田香焼1号窯跡  
18世紀末～



東野亭焼窯跡  
19世紀中頃～



窯道具変遷図2 (1/3、1/4)

足付ハマ、環状(冠状)焼台、テンビン、脚付サヤなどの窯道具がみられる。環状(冠状)焼台や脚付けサヤは、肥前でみられない窯道具で、今のところ福岡県内では最古である。その他にタコハマは役所畑新窯跡、野口窯跡、三並ヒエデ遺跡、鹿子生焼窯跡のように筑前及び筑後で出土する。また脚付サヤについては、猪之鼻窯跡と黒田窯跡で今回の調査の際に採集された。脚付サヤ・環状(冠状)焼台についても肥前に類例がないことから、18世紀末以降に関西など他地域からの技術の流入も考える必要がある。

続く19世紀中頃の東野亭焼窯跡では、輪下子、ダンゴ、ハマ、逆台形ハマ、足付ハマ、環状(冠状)焼台、ツク、桶型サヤ、楕円形サヤ、支脚、焼台など多様な窯道具が出土するが、トチンやチャツの出土はない。ここで出土する環状(冠状)焼台と類似のものが、19世紀前半の赤坂焼窯跡でも表採しており、東野亭焼窯跡と赤坂焼窯跡との関連が窺える。

なお、上記の窯道具の流れは、大橋の区分(大橋 1989)に照らし合わせても、肥前との時間的な相違はそこまで大きくないが、環状(冠状)焼台、脚付サヤなど肥前に見られない窯道具もあり、18世紀末以降に他地域からの技術流入も想定しうることが福岡県の窯道具の大きな特徴の一つである。

### (3) 窯跡の時期

今回の調査及び既刊報告書と文献史料から福岡県内の初期の窯については、割竹式登窯の高取焼系窯跡である永満寺宅間窯跡、上野焼系窯跡である釜ノ口窯跡と菜園場窯跡があり、17世紀初頭に開窯し、閉窯は17世紀前半に取まる。

永満寺宅間窯の開窯は『高取歴代記録』による慶長5年(1600)説と『皿山役所記録』の慶長10年(1605)がある。菜園場窯跡は初代小倉藩主、細川忠興の小倉入部の慶長7年(1602)の時期以降を根拠して慶長8年(1603)開窯と考えられていたが、2代細川忠利のお楽しみ窯の可能性が高く、クサビ形焼台などの窯道具の出土はそのことを示す。釜ノ口窯跡に係る文献史料はないが、尊階一族により始められたとされることから慶長7年(1602)開窯と考えられている。これ以降、階段状連房式登窯の内ヶ磯窯跡が営まれる。内ヶ磯窯跡について『高取歴代記録』と『筑前国統風土記』では、慶長19年(1614)に開窯したとする。続く寛永元年(1624)には、内ヶ磯窯を営んだ高取八蔵が福岡藩主2代黒田忠之の逆鱗に触れ山田村(山田窯跡)へ追放されるが、藩主の許しを得て白旗山に寛永7(1630)年に移る。17世紀後半には、犬鳴皿山に住む新四郎により犬鳴1・2号窯跡が寛文年間(1661～1673)に開窯し、貞享4年(1687)に藩の命令により閉窯する。

『高取歴代記録』によると同時期には小石原鼓(釜床1号窯跡)で、2代高取八蔵貞明が寛文5年(1665)に開窯し、元禄17年(1704)には閉窯する。さらに『高取歴代記録』では、寛文9年(1669)に小石原中野山に高取八之丞が移り住むとあり、その窯が一本杉1・2号窯跡と想定される。小石原中野では、『筑前国統風土記』によると天和2年(1682)にも肥前の陶工が来て陶器を作るとされ、これが中野上の原窯跡の開窯の時期を指すと考えられる。この閉窯については紀年銘のある土管の出土から、享保7年(1722)と考えられ、操業期間としては17世紀末～18世紀前半と考えられる。

これ以後の窯については、朝妻焼、能古焼、田香焼、東野亭焼が文献史料に記されている。そのうち朝妻焼窯跡については、『石原家記』では正徳5年(1715)に6代久留米藩主が有田・伊万里の陶工を招いて開窯したと記録される。

能古焼窯跡については『筑前国統風土記附録』によると「明和の比より此の島にて陶器を製す」とあ

福岡県の各窯概要

窯跡名	通り	窯の形状	全長 (m)	幅 (m)	高さ	窯の形状	焼成室のサイズ		用途	トンパシ使用	文様等の時期	考古学的推定 年代 (年)	備考	
							幅 (m)	高さ (m)						
1 赤瀬川窯跡群	野竹式窯	竪窯	18.6	11' 30"	6	煉瓦造	4	2.5	2.15	なし	透瓦のみ	慶応3年 (1867) ~ 明治元年 (1868)	AD1550 ± 15	
2 上野焼窯	野竹式窯	竪窯?	3.5+			煉瓦造		2.7	3.8		17世紀前半?		赤瀬川窯跡群と同様か?	
3 千仏窯	筒状式窯	竪窯?							2.8+		17世紀前半?	AD1540 ± 20	赤瀬川窯跡群と同様か?	
4 瀬ノ口窯跡	筒状式窯	竪窯	41	14.25	10~18'	18	煉瓦造	4	3	2.4	あり	透瓦のみ	慶長7年 (1602)	後期一部により異なる
5 内ヶ瀬窯跡	筒状式窯	竪窯	46.5 ± a	19'	14	正治造	4	3	3.1	あり	透瓦のみ	慶長19年 (1614) ~ 寛文元年 (1724)	AD1510 ± 30 AD1710 ± 30 AD1510 ± 50 AD1530 ± 30	
6 築港窯跡	野竹式窯	竪窯	約16.6	約15'	4	煉瓦造	4	1.8	2.3	あり	透瓦のみ	慶長8年 (1603) ~ 天明5年 (1825)	AD1430 ± 25	
7 日原山1号窯跡	筒状式窯	竪窯	25前後	19'	10前後	正治造	3	2.5	2	あり	透瓦のみ	寛永7年 (1630) ~ 17世紀後半	AD1310 ± 30 AD1550 ± 50	
8 大嶋1号窯跡	野竹式窯	竪窯	38.5 ± a	12'	8 ± a	正治造	4	2.6	2.6	あり	各窯跡のみ	寛文年間 (1660~1673) ~ 天明4年 (1824)	AD1580 ± 30 AD1540 ± 15	大嶋山山内古瀬川が焼く
9 高木1号窯跡	筒状式窯	竪窯	11 ± a	10' 4"	6 ± a	正治造	5	2.6	2.6	あり	各窯跡のみ	寛文5年 (1665) ~ 天明7年 (1786)	AD1410 ± 30 AD1710 ± 30	高木八重窯 (2号目) が日原山より異なる
10 高木2号窯跡	筒状式窯	竪窯	13 ± a		4 ±	正治造	4	2.6	2.6	あり	各窯跡のみ	17世紀後半	AD1710 ± 30	
11 一本杉2号窯跡	筒状式窯	竪窯	20	10'	6	煉瓦造	4	2.6	2.35	あり	各窯跡・透瓦・土アジ	寛文3年 (1663)	AD1610 ± 30 AD1720 ± 30	釜之辻が中野に付った時の窯か?
12 中野上の窯跡	筒状式窯	竪窯	38.7 ± a	12'	10	筒状式窯	4	4.5	3.9	あり	各窯跡のみ	天明2年 (1822) ~ 天明7年 (1722)	AD1550 ± 15	
13 大谷山1号窯跡	筒状式窯	竪窯	42	8'	18	筒状式窯	4	4.7	4.4	あり	各窯跡のみ	18世紀前半~中頃		
14 柳屋窯跡	筒状式窯	竪窯	8.6 (8.40)		3 (3)	筒状式窯	2 (2?)	6.1	4	あり	各窯跡及び透瓦の一部	18世紀前半		大谷山窯跡主が柳屋・伊豆原の窯工によって焼く
15 佐賀窯跡3号窯跡	筒状式窯	竪窯	15	12' 30"	4	筒状式窯	4	3.6	3.1		各窯跡のみ	18世紀前半		
16 柳屋窯跡	筒状式窯	竪窯	22		7	筒状式窯	4	4	2.4	あり	5~7号窯跡のみ	天明~天明5年 (1784~1787)		
17 須恵焼新窯	筒状式窯	竪窯	32 (35)	13'	4 (5)	筒状式窯	4	3.4	2.6	あり	透瓦・土アジ	寛政元年 (1819) ~ 明治維新前後	AD1810 ± 25	天明11年 (1830) 十稜窯の赤子窯が別窯
18 須恵焼新窯 (複製)	筒状式窯	竪窯	22	11'	7	煉瓦造	4	3.4	3.4	あり	18世紀ごろか			
19 慶長窯跡	筒状式窯	竪窯	35 ± a	16'	4~5		3	5	あり	煉瓦・煉瓦	慶応元年 (1865) ~ 明治8年 (1875)	AD1850 ± 30		

ることから明和~天明年間 (1764 ~ 1787) の18世紀中~後半の操業と考えられる。

田香焼窯跡は、上野焼の十時雨紹の弟子啓吉が文政11年 (1828) に開窯したとされてきたが、寛政8年 (1796) 成立の『近国焼物山大概書上帳』にも記載があることから、開窯の時期が18世紀末に遡る可能性がある。

東野亭焼窯跡では、『加藤田日記』『筑後将士軍談』に慶応元年 (1865) 7月に開窯し、さらにその年の9月に窯開きしたと記されており、19世紀中~後半頃の操業と考えられる。

これ以外の窯については、発掘調査が行われておらず、詳細な時期が不明であるが、赤坂焼などでは『筑後赤坂焼』において、19世紀前半~昭和時代まで操業した窯の場所の変遷についても詳細に記されている。

なお、発掘調査された窯跡のほとんどで考古地磁気測定推定年代が行われており、この科学的に推定された年代は概ね文献の時期に収まっている。

註

- 1 各窯跡については、調査報告書を参考にした。それについては、巻末の参考文献に掲載した。なお、表は調査報告書などの図面から計測した。
- 2 釜ノ口窯跡の数値については、概要報告の図面から導き出した。再調査により、焼成室の数値は変わる可能性が大きい。
- 3 一本杉2号窯跡については、報告書で調査担当者が窯の形状が未広形になるとの指摘がある。
- 4 須恵焼新窯については、須恵町教育委員会からオルソ写真を提供して頂き、それから数値を導き出した。
- 5 輪ドチが茶入れなどを焼くために使用されたことやチャツの出現の時期については、大橋 (1992) の指摘がある。

### 3. 文献史料調査の成果と課題

福岡県近世窯業関係遺跡調査にあたり、基礎的作業として関連する文献史料（史料）の情報を収集した。現在の福岡県域における近世窯業に関する史料は多岐にわたる。この調査では、刊本を対象として、近世窯業に関する先行研究を参考として史料を探索し、また近世地誌等、関連する情報が採録されていることが見込まれる史料を博捜し、情報を収集した。集めた史料の情報は、編年順に表3に整理した。

#### (1) 集めた文献史料

近世窯業関係の史料は、製作された陶磁器が各藩の特産物であることから、藩または民間で編纂した地誌や史書に情報がみられる。福岡藩であれば、『筑前国統風土記』、『筑前国統風土記附録』、『筑前国統風土記拾遺』、『黒田家譜』、『石城志』など、久留米藩であれば、『北筑雑叢』、『米府年表』、『石原家記』、『筑後地鑑』、『柳川藩』、『南筑明覧』、それ以外は古代の大宰府が統治した九国二嶋（九州全域）を対象とした地誌である『太宰管内志』といった地誌や史書にみえる。あわせて、久留米藩の『山方小物成方格帳』など藩の物産に関する記録にも情報が掲載される。高取焼に関する『高取歴代記録』、『筑前高取家旧記』や、『久留米藩土器司田中家資料』など、陶磁器の製作者による記録もある。

その他、寛政8年（1796）に天領天草の支配を預かる島原藩の大横目大原基五左衛門の要望により上田源作（宜珍）が作成した『近国焼物山大概書上帳』、『添田町諸商賈諸職書上帳』（添田手永大庄屋中村家文書）、『上高屋・内垣村諸納控写』（京都郡みやこ町犀川上高屋の乙子焼）、『桑野岳幸家文書』の「年代記」など地方文書や、日記などの古記録にもみえることがあるので、未翻刻の史料まで探索すれば、関連史料は枚挙にいとまがない。

高取焼や上野焼などの陶磁器は、茶会で使用されることがあるので、『有楽亭茶湯日記』、『松屋会記』、『小堀遠州会記』、『元禄会記』、『清風軒会記』、『文政会記』など茶人の日記や茶会記、細川三斎及び忠利の書状、『三斎公伝書』など茶書にも登場する。

上記の紙媒体に書かれた古文書、古記録、編纂物のほか、伝世又は、出土した陶磁器の刻書や染付などの銘文も多くの情報を伝える史料である。

#### (2) 集めた文献史料にみえる焼き物と窯

本調査で集めた文献史料が、地誌や陶磁器の製作者の記録、茶会記を中心としているため、これらにみえる焼き物や窯には偏りがある。豊前国の窯は、近世初期の史料を中心に豊前焼や小倉焼、上野焼がみえる。地元の記録ではない、茶人が記した茶会記などの史料にみえることから、豊前焼と呼ばれる焼き物には上野焼が含まれている可能性がある。

田香焼は、『幻金地方郷土史資料』や『近国焼物山大概書上帳』に、文政8年（1825）に開窯されたと伝える。田香焼の伝世品の銘文として、天保5年（1834）の紀年が「筒形花生」（大任町指定有形文化財）の箱本体及び添え状にあり、安政3年（1856）の紀年が緑輪徳利の外底面に墨書の文字で「安政三 □□ 辰十月」とあることが知られる。

筑前国の窯は『筑前国統風土記』をはじめとする地誌が充実しているため、特に高取焼とその窯に関する史料が多い。内ヶ磯窯跡から白旗山窯跡、東皿山窯跡、西皿山窯跡へという窯の変遷に関する情報も追うことができる。高取焼の小石原鼓の釜床窯跡や高取焼系の中野上の原窯跡、犬鳴窯跡も『筑前国



統風土記」などの地誌を中心に史料がみられる。

須恵焼についても、宝暦年間（1751～64）に寺社司の下吏の新藤安平が開いたことなどがみえる。伝世品の銘文からわかることとして例えば、明和6年（1769）に、須恵焼の白磁釈迦像台座（須恵町指定有形文化財）の外底に「明和六年 丑四月八日 施主 植木村現藏」、内底に「須恵皿山作者 森氏」の銘（須恵焼最古の銘）があり、天明4年（1784）に、須恵焼の染付花瓶（須恵町指定有形文化財）の外底の染付銘に「天明四年 皿山 忠一」とある。文化11年（1814）に、須恵焼の染付龍雲文鉢の外底面高台内の染付による文字に「文化十一年 戊四月初 長澤氏 山泉画」（須恵町指定有形文化財 No.14）とある。また能古焼について、『筑前国統風土記附録』には、明和年間（1764～72）より残嶋（能古島）にて陶器を製したことがみえる。

筑後国の窯は、地誌や久留米藩、柳河藩の記録に、蒲池焼、坂東寺焼、水田焼、朝妻焼、釈形焼、星野焼などの史料がある。筑後国にも多くの窯があったが、地誌が筑前国ほどは充実していないので、史料からわかる情報はそれほど多くはない。久留米藩では坂東寺焼、柳河藩では蒲池焼が近世初期に開かれたことがわかり、伝世品の箱書から元禄11年（1698）には釈形焼がみられる。『石原家記』から正徳4年（1714）または同5年（1715）に上妻郡釈形焼物師文右衛門の手伝夫が、惣郡より割方にて出されたとあり、釈形焼とのつながりが伝承される。『筑後志』は、「その製は肥州（肥前国）の伊万里焼にひとしい」とも述べている。

『筑後志』は「半田土鍋」について、下妻郡水田村の近藤家が製する所で、立花藩主が毎歳江戸幕府に献上していたと記し、「風爐前土器」についても、上妻郡熊野村の田中家の製する所で、やはり江戸城に献上していたとする。水田焼や坂東寺焼に関する記録と思われる。

星野焼については伝世資料として、室山神社蔵の星野焼の灯籠（八女市指定有形文化財）を載せる器台に「奉寄進 元文三戌午天 九月吉日 本星野 与次右衛門」とともに「作者 吉田小右門 大塚幸次郎」と刻まれ、元文3年（1738）の紀年銘がある。寛政7年（1795）に久留米藩で『山方小物成方格帳』を小川勘左衛門が補筆し、「同所本星野名二而皿・茶碗焼之事」として、元文2年（1737）に、同所仙頭与次右衛門が願いによって仰せ付けられ、釈形焼の手筋で焼立てたが、それ以後断絶し、今では近年同村内の十籠名で（つまり十籠焼として）、宇平次が焼立てているとある。

伝世品からわかることとして、天保3年（1832）の柳原焼の大皿の捺刻に「天保三辰年八月朔日於柳原淺田薫保定造之」とあり、九州医学専門学校の富田新氏蒐集の高台破片に、天保三辰年八月十三日と刻したものと、貞八作と自己の名を捺刻したものとがある。また文政2年（1819）に、朝田焼（一の瀬焼）の伝世品の染付鶴文茶碗の入った木箱の銘記に「文政二卯年二月二十三日 生葉郡淺田村一の瀬谷大福山（不明）鶴絵茶碗 拾 平塚」とあり、文政6年（1823）に、やはり一の瀬焼の磁器染付瓶の胴部外面の染付銘に「皿山」「文政六年 閏仲秋」とある。

### （3）成果と課題

福岡県域の近世窯業に関する文献史料を収集したが、いまだ刊本を中心とした調査にとどまり、陶磁器の製作者や藩政史料、地方文書などを悉格的に調査することには及ばなかった。主な窯や陶磁器の開窯などに関する情報を大観すると、上野焼や高取焼のように、近世初期に朝鮮半島からの陶工による窯のほかは、18～19世紀になって各地で開窯されていく趨勢がみて取れる。残された課題としては、やはり、未刊行史料を博捜し、史料の充実を図ることに尽きると言えよう。

表3 歴史史料調査

債物名	番号	譲渡原名	年月日	史料名	内容	備考
瓦		不明	天正5年(1577)11月20日	『宗像社第一御宝殿御柱上之事置礼』	「一様瓦餅之事 博多津中道徳僧会願。小工武人御所。」一宗像社第一の道徳に博多の瓦職人が関わっていることがわかる。	宗像市1996
			天正20・文禄元年(1592)10月30日	『宗通日記』	豊匠青吉、博多の神屋宗通家の茶通次に譲与	川道法が1900
高取債			天正20・文禄元年(1592)	『高取歴代記録』など	「長田長助、八山を拝願す。長政の命により後藤文貞親の家人、鶴山宗右衛門が八山夫婦及び一子を得て譲渡し来る。長政は文禄3年に新築より帰郷。」	尾崎2013
豊前債			天正20・文禄元年(1592)12月26日	『豊前以来由繪覽』		九州陶磁文化館2010 永竹法が1982
豊前債		不明	慶長3年(1598)	北九州市八幡西区木霊里科館 木屋瀬貞 備前伝文書	慶長3年 陸士 叶 ひわりつら □□上々	〔北〕北九州市1982
豊前債		不明	慶長8年(1603)3月11日	『有楽亭茶通日記』	豊前松茶碗に彫ゆ	朝日新聞1981 磯野1980
瀬田債			慶長8年(1604)11月7日・11月9日	『立花家旧文書』 『古地方志近年表』及び「立花家旧文書」訂正書「立花家系譜」	11月7日 筑前国守・田中吉政は土器師・家永・彦三郎を土器司に命じる。 「古地方志近年表」及び「立花家旧文書」訂正書「立花家系譜」を参照して、11月9日吉政瀬田土器師家永方頼に様を与ふ」と記述する。	永竹法が1982 九州陶磁文化館1992/2010 伊藤1948
豊前債			慶長18年(1613)3月11日	『有楽亭茶通日記』	「慶長十八年三月十一日 豊 惣、惣野伊予、伊藤基吉、堀田田八、基物、珠光文、花人、角野中、花、白玉、茶人、盛法印の吉瀬戸茶人、茶、竹の煎、茶碗、豊前産」	井上1843 赤池町1977
高取債		内ヶ嶽家 千石家 上塚家	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『筑前高取家旧記』	「戦前内部焼と云所御陶物に御引替に相成し由其近辺にて開拓田庄近余の所無量にて拝獲御印付赤子等由立昇井土陶を可製整家伝門赤手陶の可も久矣取焼」	永竹1977
高取債		内ヶ嶽家 白旗山原 藤床家	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『筑前国続風土記』巻29「土産考上」	「筑取茶器(やきもの) 産取焼は新築軍の時、長政公の手にも、新築人あまたとほれ来りし中に、茶器を製する上平敷り、考改て八歳云云。・・・寛永七年の比より、戦手郡内焼と云用にて製し、寛永七年の比、種次第合意の年科の白旗山の北の麓に擧りて製し、寛永七年より上塚藤床村にて製す。遠年福岡城の南田植村の東野松山にて製す。」	貝原1710
高取債		内ヶ嶽家 白旗山原 藤床家	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『太宰管内志』筑前之18(戦手郡)の「高島屋ノ城」の項	「・・・また太閤朝鮮攻の時加藤清正彼國にて茶器を製する者をつれ来りて肥後國にて産を造らむ其者ノ名を井原太閤と云用に其製しし器を井戸原と云後に長政新築茶器を筑前に召されて取焼ノ琢水陶物にてそにて茶器を制しめ細心奉に依て高取焼と云く、慶長九年より福岡内ヶ嶽と云ふ處にて八歳と申中て候かめらる是を八歳やきと云其後寛永七年種次第合意ノ年科ノ白旗山の北ノ麓に擧りてや、寛永七年より上塚藤床村につつりてや今の陶工は野八郎が来りたり。」	伊藤1980
高取債		内ヶ嶽家	慶長19年(1614)	『筑前国続風土記』 『高取歴代記録』	内ヶ嶽窯窯。	西日本新聞1992 尾崎2013
豊前債			元和5年(1619)正月23日	『吉田梵舟日記』	「元和五年 正月二十三日 晴 次豊前沢村大学之助引豊前松茶碗三つ、使者之由候 四年 四月十六日 晴 新筑西院院舞、唐音度令同遣也。予豊前今後堂ニテ侍奉也。」	井上1843 赤池町1977
上野債			元和5年(1619)	『吉田梵舟日記』	豊前古上野と呼ばれる「豊前豊三ツ使者持来り」と記載ある。	永竹1980.1/1980.5
高取債			元和6年(1620)	『筑前国続風土記』 『高取家本家山高取債仕法記』	「五十嵐左衛門が徳之に召し抱えられ内ヶ嶽において高取焼と用に製陶に携わらうようになるのはこの頃か。」	尾崎2013
萩原債?			元和6年(1620)12月	有馬豊が国元の家老に宛てた書状3通	「黒木の債物」についての記述がみられる。	星野1998
上野債		番ノ口家 黒山本家 新築高取家	元和8年(1622)6月22日	『田川郡家人番御改帳』	「新築村債物山」戸数30、人口63(男36・女27)、男の内訳(債物師8、売子1)、黒11 「上野村債物山」戸数24、人口65(男37・女28)、男の内訳(債物師6、売子10、黒)、中1	井上1843 永竹1979/1977/1980 九州陶磁文化館2010

遺物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
壺前焼			元和9年(1623)3月4日	『吉田覚昌日記』	「元和九年 三月四日 晴 次白川在井原山淨屋。壺前之壺水指一ツ。皇太后 左衛門梁江袋付録。薪三十石遣也。舟兵使使也。」	井上1943 赤池町1977
飯塚寺焼			元和9年(1623)3月9日	『久留米藩土器岡田中家資料』	「其方事久留米御城土器作二級下御安焼。依夫。高 穴粘土分御燒成御受焼。御御分儀内土物屋同 様御付焼也。可寄其壺者也。 元和九年庚三月七日 輪船基右衛門[花村] 上書部内飯塚寺村 平兵衛との。」	古賀1979
高取焼	山田窯	寛永元年(1624)		『高取歴代記録』など	この頃、八山父子、朝鮮への海路を開いて志之の 勲業にふれ山田村に繁栄となる。山田窯開窯。	朝日新聞1961 永竹1977/1982 西日本新聞 1992 九州陶磁文化 館1992 尾崎2013
壺前焼		寛永2年(1625)		『松屋会記』『小坂遠州会記』	『松屋会記』「壺前焼ヤキワツ小倉水指。」『小坂遠 州会記』「筑前焼茶碗」と見ゆ。	朝日新聞1961
高取焼		寛永5年(1628)4月23日・24日		『小坂遠州会記』	「茶入筑前焼」「筑前焼水指」の名で高取焼が初見。	西日本新聞 1992 尾崎2013
上野焼		寛永6年(1629)7月14日・9月23日		楠川三雲公及び忠利公の書状	上野焼の記述あり。 「上野の焼物除の内、我々いづも……」 「上野焼物御江戸へ奉送感涙万仁付而へ、……」	井上1943 赤池町1977
高取焼	白旗山窯	寛永7年(1630)		『筑前国紀風土記』巻12「穂波郡 榊村 合置」の項	「…高取の製磁(やきもの)、榊村郡の内が確にて焼 て後、寛永七年の比より、中村の内、白旗山の北の 麓に於て、三十二名此處にてや、白旗山に在る の寶金山の本をせり。白旗山に榊野多し。白旗山 西は白旗村に属し、東は中村に属せり。」	貞原1710
高取焼	白旗山窯	寛永7年(1630)		『太宰府管内志』「筑前之18(榊野)」の 「高鳥居ノ城」の項	「高鳥居ノ城」の項に「…寛永を制せしめ給ふる是に依 て寛永後と云づく。寛永十九年より同郡内より焼と云 ふ處にて八歳と云に因せて焼かしめらる是を八歳や きと云其後寛永七年穂波郡合置ノ中村ノ内白旗山の 北ノ麓に於りてや、寛永七年より又上野郡榊村につ つりてや今の陶工は新八歳が末裔なり。」	貞原1710
高取焼	白旗山窯	寛永7年(1630)		『筑前国紀風土記』 『高取歴代記録』 『高取家記録』	白旗山窯開窯。	筑紫1938 永竹 1977/1980/1/19 80.3/1982 高橋1990 西日本新聞 1992 九州陶磁文化 館2010 尾崎2013
高取焼		寛永10年(1633)5月1日			「遠州茶会に「高取」焼水指が初出」	尾崎2013
小倉焼		寛永17年(1640)4月17日		『三雲公伝書』(宗道四増伝書)	「寛永十七年即月十七日朝。吉田(京都)三雲公へ、 書。江開老。松屋久留米人。……(節)……江開山 嶺。小倉御直(園あり)。……(クラヤキトモツ水 サシ。山ノ井御茶人。嶺に人)……(園あり)」	井上1943 赤池町1977
溝池焼		慶安2年(1649)		『三浦郡誌』	「土器師寛永三年方親没す年八十一(三浦)」	伊東1948
高取焼	白旗山窯			『高取歴代記録』	「八歳壺(八山)、白旗山にて造(8月)。餅子、八歳 右衛門多病のため、次男新八郎が二代となり八歳壺 明を名乗る。」	筑紫1938 永竹1977/永竹 ほか1979/1982 朝日新聞1961 九州陶磁文化 館1992 西日本1992 尾崎1994
上野焼		万治4・寛永元年(1661)8月		久留米市吉野三本松町遺跡出土「色 絵黒蓋草子文」の外蓋の年号銘	「万治四己丑閏八月吉日」	久留米市1992
上野焼		寛文4年(1664)10月5日		『細口切之覚』(吉市自傳隨筆記)「志真 公御口解」	茶会記に、上野焼茶碗使用「清茶碗上野」	井上1943 藤和1958 赤池町1977 朝日新聞1961

遺物名	番号	関連地名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼	釜床窯	寛文5年(1665)		『筑前国続風土記』巻38「早良郡上 藤原村」の項	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。中にしよ白。寛文七年より元禄十七年までは上座郡懸村にて陶工あり。」	加藤・高取 1977/1978
高取焼	釜床窯	寛文5年(1665)		『高取型代記録』 『高取家文書』	白飯山から小石原へ陶器(窯)を移す。	西日本1992 尾崎2013
高取焼	釜床窯	寛文7年(1667)		『筑前国続風土記』巻29「土産考上」	「寛文七年より上座郡懸村にて(瓷器を)製す。」	貝原1710
高取焼	釜床窯	寛文7年(1667)		『筑前国続風土記』巻21「上座郡(上)懸村」の次行事社の項の「天雨大神宮」	「釜床に在り。→明和年中に此神の靈廟に依て遊藝の類を奉進高取家にあり。本館に寛文七年國書より高取の陶工を此村の懸に遷て陶器を焼くべしとあり。此の時に懸に陶工は窯にては製せずなりぬ。」	青柳1993
高取焼	内ヶ窪窯 白飯山窯 釜床窯	寛文7年(1667)		『太宰管内志』「筑前之18(鞍手郡)」の「高島原/城」の項	「→瓷器を創せしめ給ふるに依て磁器焼となづく。慶長十六年より御城内へ窯と云ふ事にて、土産云に依りて焼かしめらるる釜人(土産)と云ふ其後寛文七年鎌倉郡合資屋ノ中村ノ白飯山の北ノ麓に移りてやぐ。寛文七年より上座郡懸村にうつりてやぐの陶工は新八郎が実領なり。」	伊藤1969
高取焼	釜床窯	寛文7年(1667)		『石原家記』	「此年上座郡懸村に焼物まる。元来合資焼物師此處に移る(石原)。」	伊藤1948
高取焼	釜床窯	寛文10年(1670)		『筑前国続風土記』巻11「上座郡 懸村」 巻29「土産考上」	「→懸河内の内。つると云所に。寛文十年國書より高取の陶工を遷はしおれり。陶器をやぐ。今に其所にあり。」 「寛文七年より上座郡懸村にて(瓷器を)製す。」	貝原1710
飯東寺焼	飯東寺窯	延宝3年(1675)		『北筑前志』巻	「飯東寺ノ側ニ民屋有リテ陶ヲ焼ク。其源遠雄員ノ類ノ如キハ深草半 田ノ懸家ト雖モ、亦及ハズ。故ニ源遠雄之ヲ莫異ニ稱シタマフ。」	
高取焼	中野上の原窯	天和2年(1682)		『筑前国続風土記』巻11「上座郡 小石原村 中野」の項 『筑前国続風土記附録』巻18「上座郡下小石原」の項の「中野」 『筑前国続風土記拾遺』巻2「上座郡(上) 小石原村」の項の「土産」	「→此所に天和二年より陶工入り住して陶器を作る。懸村伊集原の屋敷にあらへり。中野の項に云。」「上座郡下 小石原」の項が「中野」に天和年中より上の陶器はして、享保の末より高取焼にならむて中野に定まる器を製せり。寛工の。今も家八戸、(三所)に在り。→。「中野」にて陶器を製す。遠(は)り。花屋 藤原香 藤原其真(い) 等の製なほ種々の土産を造る三處に在り。天和二年白瓷を製して中野焼とを以て其製はして高取焼に皆て日用の器を作る。→。」	貝原1710 尾崎1977/1978 西日本新聞 1992 尾崎2013
高取焼	中野上の原窯	天和2年(1682)		『筑前国続風土記』巻30「土産考上 藤原村」の項	「中野窯器」土器(かわらけ)「天和二年始て上座郡小石原村の南、中野と所にて。源遠光之公陶器を作らして。是は肥前松浦郡伊集原の陶工より傳ふ。大坂の製法にならへる也。其製法、また精巧ならずといへども、甚良用に便あり。」	貝原1710
高取焼	中野上の原窯	天和2年(1682)		『筑前国続風土記』巻33「土産考上 土石原」の項	「後藤(やま)の土」上座郡中野に多し。当中野にてや物や中心にして。其土の形を成(得)やにまんせしに。中野にをのづから有し。他に求めず。天然の幸なり。」	貝原1710
飯東寺焼 水田焼	飯東寺窯 水田窯	天和2年(1682)		『筑後地鑑』上巻	「→東の大門ノ側ニ、源遠アリテ陶ヲ焼ク。其源遠雄員ノ類ノ如キハ、深草半田ノ懸家ト雖モ亦及ハズ故ニ源遠雄之ヲ莫異ニ稱シタマフ。「特色ノ側ニ土師ノ流アリテ陶器ヲ焼ク。半田土師ノ作ル。〔数寄屋用カウル類ノ類〕本館に類ヲシ。故ニ源遠君之ヲ莫異ニ稱セザル。」 「下座郡 水田村に成二子ハ飯野并井陶工。殊ニ半田土師ハ天下ノ美術ナリ。→(後掲)。」	西1682(筑後 道鏡刊行会 1979)
高取焼	中野上の原窯	貞享元年(1684)		『高取型代記録』	「この、山、の原-八之島貞正、小石原中野に移る。」	西日本新聞 1992 尾崎2013
上野焼		元禄年中(1688~1704)		『元禄家記』	(年号不詳)16日/水指 上野 / (同年)10月16日/ 常入 上野 / (同年)11月26日/ 水指 上野 電野 / (年号不詳)正月19日/ 善伊 上野 筑安 飯野 / (年号不詳)3月26日/ 上野 備前兩二付 出立 →。」	井上1943
高取焼	大塚谷窯	元禄元年(1688)		『高取型代記録』	「この前後に、福岡城の南、田嶋村大塚谷に窯を築く(大塚谷窯)。三代先之屋敷、西代編纂部刻(12月)。」	西日本新聞 1992 尾崎2013

遺物名	番号	関連地名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼			元禄3年(1690)	『高取歴史記録』 『高田家譜』願成記	「この後、越前守野村直清、兼田藩の御用焼物となり、御用陶器に能行を行行す。」	
高取焼		大原谷家	元禄6年(1692)	陶器磁形合子	「元禄五年出来 八郎」の墨書紙	歴民2001
高取焼		大原谷家	元禄6年(1692)	陶器唐獅子形書伊	「元禄六年 寛八郎」の墨書紙	歴民2001
上野焼			元禄7年(1694)	『萬葉集』巻8『古今和漢通具知抄』	上野侯の記事	
上野焼			元禄7年(1694)	『貝原益軒遊園紀行』	上野村迄の記事 元禄7年4月5日「此里にすへ物作りて俄く土有る」	森1939 井上1943
釈舟焼			元禄11年(1698)	伝世品の箱書	「元禄11(庚寅)上記す」	永竹1982
上野焼			元禄13年(1700)	吉市無光園「元禄(十三歳年)会記(三)」	「『善宗聖真帖』上野細口花入(花)馬引ノ(徳御茶入)ノの記述」	井上1943
高取焼			宝永年中(1704~1711)	『高取歴史記録』	「御陶山御土立」	尾崎1994
高取焼		大原谷家	元禄17・宝永元年(1704)	『高取歴史記録』	「八郎、磁村より博多船乃へ引越す。大原谷家、不慮に陶取りくすとなる」	九州陶磁文化館1992 西日本1992 尾崎2013
高取焼		内ヶ瀬家 白旗山原 菅原家	元禄17・宝永元年(1704)	『筑前国結城土記附録』巻38「早良郡上 敷原村」の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取、五十屋二人を移して 陶器を製せしめらる。今にしがかり、寛文五年より元禄 十七年まで八上、上座都磁村にて陶工なり。元禄十七 年の春、陶師高取某等事にて居を移し、早良郡細磁村 の内八反間にても陶器せり、今も其跡あり。」	加藤・高取 1977/ 1978
高取焼		小石原鼓渡	元禄17・宝永元年(1704)	『筑前国結城土記附録』巻46「土産考上」 の項の「高取窯」	「『宝永五年より元禄十七年迄は、上座都磁村にて 製せられ、元禄十七年の春高取八郎…井戸侯の事 本編に見へたり。…』」	加藤・高取 1977/ 1978
高取焼		菅原家 貫戸山原 西山山原	宝永5年(1708)	『筑前国結城土記附録』巻38「早良郡上 敷原村」の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取、五十屋二人を移して 陶器を製せしめらる。今にしがかり、寛文五年より元禄 十七年まで八上、上座都磁村にて陶工なり。元禄十七 年の春、陶師高取某等事にて居を移し、早良郡細磁村 の内八反間にても陶器せり、今も其跡あり。寛保三 年上座都小石原村に居を移し、陶工敷原人招かせら れ、其用の陶器を製置せり。此所を土俗西山山とい ふ。陶工の家廿七軒、窯所三ありなり。」	加藤・高取 1977/ 1978
高取焼		菅原家 貫戸山原 東山山原 西山山原	宝永5年(1708)	『筑前国結城土記附録』巻43「早良郡上 敷原村」の項	「結城山原 俗に西山山と云。享保三年より上座都 小石原村の陶工敷原家を移して陶器を製せしめら る。…村の北東新町の南辺に山あり、土の白とい ふ。宝永五年の春陶器所を定むる、即ち陶工高取五 十屋の二氏並に居を移して、其地より上座都磁村に在。 其後移すは、菅原 木原(鎌倉町)又吉(高取) 藤 合等様々の移物を製せしめらる。良工なり、世の人 業を東山山といふ。」	青柳1993
高取焼		貫戸山原	宝永5年(1708)	『高取歴史記録』	貫戸新町に窯を開く	西日本1992
高取焼		犬鳴渡	宝永7年(1710)	『筑前国結城土記』巻13「新平郡 上新入 村 犬鳴山」の項	「此地にて近年道をやり、越すすき、窯器を作 る。…近年は犬鳴山にて陶器を作らる。又炭をもや かす。犬山の木もなくなり散りなり。」	貝原1710
高取焼			宝永7年(1710)	『筑前国結城土記』巻29「土産考上 藤舟 陶」の項	「高取窯(やきもの)『高取焼は新羅軍の神、長政 公の手にも、新羅人あまたとほれ、其し中に、炭器 を製する乎なり。名を次いで八歳三、又八歳清三 の手にも、一人上手あり、駒丸殿と云。二人とも、 高取にて井戸土と云名の竹にて、八歳は駒丸殿が 曾伯。…又十五歳次左衛門元吉あり。在朝吉書 守傳家に仕へ、彼書を渡入して、取朝に交る。此書 守戸安徳の法を習ひ、其外種々の製を留置せり。 …寛保十九年の比より、新平郡の南に古所にて 製し、寛永七年の比、穂原都合屋の中村の白旗山 の北の麓に移りて製し、寛文七年より上座都磁村に て製す。毎年結城城の南白旗村の東の松山にて製 す。」	貝原1710
高取焼			宝永7年(1710)	『筑前国結城土記』巻31「土産考上 藤舟 陶」の項	「土器(かわらけ)『早良郡磁村にて作る所の土器 上し。博多及筑前郡甘木村にも作るといへども、高 取の製にほす。』」	貝原1710



焼物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
清盛焼		室蘭年中(1751～1764)		『筑前國結東土記附録』の巻34「表磨屋郡上 湯恵村」の項の「火山」	「伊勢山更原といふ所にあり、(家)に上白陶器を作り以給ぬ。秋の暮の夜も七へ云にや、吾所に上白焼と云所有。」「室蘭年中申付の下更原安平といへる者発起して新に陶器を製造し、南京焼を製せん事を有司に請ふ。」	加藤・鹿取 1977/1978
清盛焼		室蘭年中(1751～1764)		『筑前國結東土記附録』の巻40「表磨屋郡下 湯恵村」の「土産」	「表磨 伊勢山更原と云所にて製す。今其他を火山とす呼べり、(吾)湯恵の地焼屋す。但上清恵に近し。」 「延長三拾二年所に造。」 「本所(口)に二箇 別製(半)土置、白皮の更焼、吾地 高橋(半)土置、緑瓦其の瓦器を燒出。此は火山に遠く野木多く且更原に遠く水程を敷事焼へ陶土を焼めり、功多し焼成れは湯戸の産品自ら焼成らば呼べり、其初更原年中申付の下更(に)更原安平と云所有。南京焼の器物を製せん事を官に請ければ、別許有て同十四年此所に窯を築き(「後略」)。」	青柳(1993)
能古焼		明和年中(1764～1772)		『筑前國結東土記附録』の巻40「早良郡下 残島」の項	「明和の比より此焼にて陶器を製す。」	加藤・鹿取 1977/1978
		明和2年(1765)		『石城志』巻7の「土産 上」/「瓦工」の項	「土器類瓦町に住す。數家あり、天正4年丁、宗像社を大宮司氏兵衛造せられし時、珠瓦屋博多中津屋敷屋敷といふ名あり、されば古へより造業にて瓦を作りしなるべし。」	津田1977
		明和2年(1765)		『石城志』巻7の「土産 上」/「産物(スヤキモノ)」の項	「瓦町に陶工數家あり。造管、惣七(先祖は播州より來る本匠、といふ事傳はれて、「高橋(半)土置、下野風焼、或は徳とチリシ、智恵屋とチリシ、又は榎木鉢やの物を製す。」「智恵屋は智恵町の産物造白焼に住す。」「産物に用ふる一類の瓦器を造して、惣て此とチリシを作らしめり。」「江戸其外近國にて是を賣す。」	津田1977
		明和2年(1765)		『南京貿易』山門御柳川城の「城外・市中・沖ノ原・二城下ノ村」の項	「一 南京ノ産物ニテ、梅屋夏武二邊製スル品物ハ三月、美濃前土器、製物、六月、和紙、海草、九月、海取次土器、海月、十一月、千日芋菜、餅鹽等。」	戸次1765(後發) 道釋刊行會 1978
清池焼		明和2年(1765)		『南京貿易』三浦郡の項	「一 清池村ノ家永彦三郎ハ、土器師ナリ、太郎勤徳(佐)村、肥後名屋屋二氏土器ヲ製セシガ、太郎勤徳ヲ伊弉木田村に、土器師ノ司メシカ、年二十三石ヲ燒ス。」	戸次1765(後發) 道釋刊行會 1978
		明和4年(1767)		『龜野岳幸家文書』の「年代記」、「明和四下頁」の項	「当春卯ノ殿千部山口村百惣惣兵衛ト申申者ノ屋敷土伊乃丹焼屋並茶碗焼屋出ス、所々ヨリ買物多シ。」	西日本文化協會 1990
清盛焼 及知徳 伊乃萬屋 風	西山山原 山口漢ッ谷 原	明和4年(1767)		肥後天草の庄屋・土田家に伝わる『近国焼物大藏書上巻』	『筑前國焼物山三ヶ所ノ湯恵山・西野山・山口山』	湯恵町 2003
上野焼		明和4年(1767)		上野焼の獅子形香炉外面の刻書	「行慶七十七 十時浦好」	匠民2001
清盛焼		明和6年(1769)		清盛焼の白磁製海岸舟楫(湯恵町指定有形文化財 No.11)	外彫に「明和六年 丑四月八日 施主 榎木親藏」、内彫に「湯恵山山作者 森氏の撰(清盛焼 古の基)」	匠民2001
上野焼		明和6年(1770)		上野焼の白磁製船流し彫牡丹文徳利の外面の刻書	「行年八十六歳 十時浦船作」	匠民2001
高取焼		明和8年(1771)		『高取歴史記録』	「七代治之、五島亭にて御座焼見學」	西日本1992
上野焼		明和～安永年中(1764～1781)		『本倉御用目録控』(『萬々代控』(吉田文書))	上野焼の上として伊方土・夏吉土・市場土・管間土が書替る。	井土1943
坂東寺焼 水田焼		安永6年(1777)		『校訂筑後志』巻二の「土産」	半田土器「下更原水田村近海家の製する所、最も焼品あり、古昔有縁業焼に類する。」	
坂東寺焼 水田焼		安永6年(1777)		『校訂筑後志』巻二の「土産」	高橋前土器「上更原野村、田中家の製する所、製品多品あり、是亦亦高橋江に類する。又大外の土器あり、毎二年三年、五年、七年間の土器と号す。又料(さかづき)土器(かはらけ)あり、上品を内産(うちで)もりと名く。」	
取野焼 新築焼		安永6年(1777)		『校訂筑後志』巻二の「土産」	陶器「生菓郡野村十箇名の産なり、往年上更原野村(やつかた)焼を伝來し、近世鹽山焼の茶器を製す。焼品多なり、夫等焼ありて、御所焼等の地に於て陶器を製し送近に販て、其製州の伊萬屋焼に同じ、今處作り、懐むべし。」	

焼物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
飯敷寺焼 水田焼		安永6年(1777)		『改訂筑後志』巻二の「土産」	坯子「下妻郡水田村・三鏡郡田川村の産。炭・火鉢・水屋等の製。大に民間に利用あり。」	
高取焼		安永6年(1778)		『高取歴史代記録』	「高山高取焼付法記」を五十高次兵衛・高取焼作・高取市村らによって提出	福岡2013
高取焼		安永8年(1778)		『高取歴史代記録』	『高山役所記録』作成	西日本1992
船古焼		天明元年(1781)		『筑前国結城土記抄』の巻4「早良郡上・磯崎濱の」の「安永9」の項	「一在舟の上の山に陶器を造る土あり。天明の初年此土を取て製せしかいほとなく其事のみあり。」	青柳1993
清原焼		天明4年(1784)		清原焼の染付花瓶(清原町指定有形文化財 No.12)の外箱の染付銘	「天明四年 高山 忠市」	歴史2001
宗七焼		天明6年(1786)		建禮権侍外の刻書	「高成徳川経堂遺書 口實大録巻九 博多津陶工正木宗七堂茂造 天明六年丙午閏十月初五日 古織品徳信庵和共新附 現住成徳院大宮玄紹謹記」	歴史2001
清原焼 船古焼		天明7年(1787)		有田の高山代官日記裏書き(多久文書)	「筑前、船崎、清原高山へ有田訪より取十郎と申す者。焼物造りに罷見し取付宛定。船崎全焼に付、焼方のため、下目付共焼し越され焼部一(焼)一取十郎は有田中村郷九郎・良之進・高次郎と名を替へた。小倉か山(清水山)へ所を替へた。船崎全作部の北の名は長之進・高次郎といひ、筑前国江山の者であり、親の親九郎は高山に出生し長江山に在りながら高山上平山に居る。」	九州陶磁文化館1992 大橋1989 宇道2010
高取焼		天明8年(1788)		小石原高取の陶器の胎子の刻書	「建礼権同製口(貞)清成 口天明八戊申年 晩秋吉原日 産門山大光達権大徳法印 亀石坊有并 白敬」	歴史2001
上野焼		天明年中(1781~1789)		『八代郡誌』	「肥後高田焼(八代)産西郡家三代藤西郡家前上野へ至り、十得路右衛門、同家藏、渡久之進、吉田藤久へ陶法を伝授す。」	井上1943
上野焼		寛政2年(1790)		『万々代裡』	上野焼、銅蝋からできる緑青釉初めて現われる	九州陶磁文化館1992/2010 永竹ほか1982 朝日新聞1961
宗七焼		寛政4年(1792)		喜伊の体外の刻書	「寛政四年 正木宗七作(印製)」	歴史2001
釜野焼		寛政7年(1795)		久里米焼で「山方小物成方格様」を小川藏定親門が揮筆する	「肥前本野野名二箇皿・茶碗焼之事 / 元文二己未(1727)、肥前山崎と志右衛門成徳院に付、彼成徳之手筋二箇立候也。其以後漸焼、只今二筋は近年同村之内四十箇を二部、平次焼立候。御目付才判二箇焼立候之手筋も成立候御付候事。」	佐々木2006
高取焼		寛政8年(1796)		『近国焼物山大綱書上編』	「肥前国高山之分」に黒崎高山、釜野高山、「肥前国高山之分」に清原高山、西町高山、「肥前国高山之分」に天野高山、藤原高山、善田高山、寺島高山、清原高山、清水高山、小石原高山が記述される	大橋2010
高取焼	牛野上の新窯	寛政10年(1798)		『筑前国結城土記附録』巻18 上座郡下小石原の項の「牛野」	「天和年中より陶製ハ止て、享保の末より高取焼にならひて民間に便する磁器を製せり。兼工入り、陶家八戸、庵三所にあり。」	加藤・高取1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結城土記附録』巻18 上座郡下赤谷村の項	「スギノイといふ所に白土石を産す。」	加藤・高取1977/1978
高取焼	大噴窯	寛政10年(1798)		『筑前国結城土記附録』巻25 勝手郡上天崎谷の項	「一昔は窯器を作り、炭を焼、紙を造、一」高山山に「輪の本谷口と云所にあり、夫處に身へたる陶器を製せし所也。今も大噴焼といふ焼物焼に民間にあり。」	加藤・高取1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結城土記附録』巻27 勝手郡下磯野村の「鹿取山古城」の項	「永瀬寺村に焼へり。此山の西北の谷こまの尾と云所あり。古へ陶器を焼し所といふ。」	加藤・高取1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結城土記附録』巻28 津賀郡元上畑村の項	「此村中にて陶器を焼出せる事あり。京傳大宮司實家の傳授をせりし所なるにや。」	加藤・高取1977/1978



遺物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
須惠焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻34 表贈郡上 須惠村の項の「瓦山」	「伊勢山重原といふ所にあり。[寛政]に上野陶器を作り、地名取、村の名をもつて瓦山に作り、四州にもすべへ焼と云所有。[寛政]年中寺社の下更製新慶平といへる者發起にて新に陶器を製造し、南京焼を製せしを須恵に譲る。有。須恵村と須恵山に於ておきたへ安平に陶器の事を幸ひせしむ。年々に焼工せる磁器を火らの御用にて其後八州にも販て販て持たせる。安平へ安土五年に於て御用を罷し、土曜に於けるも。翌年病をもつて没せり。其子長平父か遺跡を継ぎ陶山の事を承りしめらる。廣くまた、父の墓前にて自ら製して南京焼に似せり。製す所所、いふに焼工にて奇麗なり。即安平か絶て南京焼を定めて自ら由來を尋じ、[寛政]の初年須恵の山、須恵に須恵山焼と云所、又須恵の焼にて製す所所を多く焼工ししにせし。その焼け繕たる土の中に陶器に用ひて好き也あり。是をもつて西馬山 早良郡豊原村 陶土を採る。既に御用するに其製からず。故に焼しある者一人をえらひ其用をあたへ、彼土を携へ肥前國佐賀縣河津山の陶器に焼し、其志をばしむ。其者廿六日須恵にて焼物の毎焼を幸ひて、もろもろの器物を焼出し携へ帰らぬ。しかりといへども。至平焼の製にて最前に焼工を起しし時、家財を売却しければ今多大なる作業を全へき御書立。幸に親しき家二三家をかたひ、資財を借用して其志を遂げ、今に至りてか窯を御用となん。正倉家・陶器所等を表致し上掃取あり」	加藤・鹿取 1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻38 早良郡上 豊原村の項の「陶器用」	「宝永五年の春より陶工高取・五十二人を擧げて陶器を製せしめらる。年にして。寛文五年より元禄十七年まで、上野製陶にて製せり。元禄十七年の春、陶師高取基博多に原を移し、早良郡田嶋村の内五反間にても陶器作り、今も其跡あり。享保三年と云所、か石原村に居住し、其土を採り、焼に製せしめ、日用の陶器を製造せり。此所を土母西馬山といふ。陶工の家廿七軒。窯所三ヶ所あり」	加藤・鹿取 1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻38 早良郡上 田嶋村の項	「六ツンマといふ所にていしし陶器を製しし事あり。山の焼ししるせり。今も陶器の焼れ残れり。」	加藤・鹿取 1977/1978
船古焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻40 早良郡下 須島山の項	「朝和の比より此焼にて陶器を製す。」	加藤・鹿取 1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻40 土産上 土取及安取(やきもの)の項	「はじめ船手郡鹿取に原で陶器を製す。故に鹿取焼と云となん。本編に詳し。今も鹿取山古窯の西側に家の裏と云處あり。是陶器を製せし跡ながらし。又遠賀郡城塚村・船手郡次鴨吉にも陶器を製せし事有。…寛文五年より享保十七年迄は、上野製陶にて製せしか。元禄十七年の春須賀八重原を博多に移し、早良郡田嶋村の内五反間、又那珂郡下野田村の大谷間に於て製す所所全にせし。又早良郡豊原村の内、上の山にかまを移して今に製せり。其焼工八御定郡向野村の土を採てす。享保の初年豊原村の陶土焼工を罷る。今西馬山と云。焼工に用ゆる井桶及種々の磁器を製す。日用に便あり。其土は穂波郡合置郡中村の内、高宮と云所より採り用す。」	加藤・鹿取 1977/1978
高取焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻46 土産上 中野陶師の項	「本編に費ゆ。上野郡小石原山の内中野にて焼し昔の姿焼。たまたま民間に遺れるを見るに、南京の姿かありて奇麗なり。…又博多に豊長・元和の比。高取五郎七か云所あり。…中野製陶土の焼に於ては、此五郎七か子孫也と云。また本州上野郡の小石原の陶工も五郎七か也と云。…」	加藤・鹿取 1977/1978
須惠焼		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻46 土産上 須惠陶師の項	「定置の如懸置郡須惠村にて製せしめらる。伊萬焼とららひて面に愛せらる。其製伊萬製に似し。…凡箇中に磁器を製する所、上野郡小石原・高取郡佐賀村の内田・早良郡豊原村の内西馬山等なり。須惠郡上野村の土中よりも陶器を製す事あり。而後大宜可産なりし時に、製器を製しし所もへし。」	加藤・鹿取 1977/1978
		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻46 土産上 土器(かわらけ)の項	「本編に早良郡須賀村の製佳品なるよし見え侍れども、今は製す。かほらけ器類といふ名の焼れり。博多にて今も多し。…西馬山と云。焼工の内花津屋年及後須賀村木野にて多し。…」	加藤・鹿取 1977/1978
		寛政10年(1798)		『筑前国結風土記附録』巻46 土産上 瓦の項	「本編に見へたり。今博多瓦野に瓦師数家あり。…此所の瓦師等は上野にて製して下野を多製し、給ふ。此外外郡赤井・地丈郡飯塚・高取郡須賀・須賀郡須賀・上野郡久喜・志摩郡中野、早良郡豊原等にも瓦師あり。今野の瓦よし。所疑もさきく。」	加藤・鹿取 1977/1978

遺物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考	
			寛政10年(1798)	『筑前国経土記附録』巻46 土産考上 瓦陶器の項	「博多瓦野、磁器町、瓦野(博多)は3つと謂ひ、 ふる字を異なる大石戸あり、大石、次ちりゆ、手焼 磁器を製す。就中宗七と云者良工なり、…又渡津 郡日本、高橋並那漢所にも瓦器類を製すれども、 博多の瓦類と云す。」	加藤・豊取 1977/1978	
			寛政10年(1798)	『筑前国経土記附録』巻46 土産考上 土石類の項	「瓷師土」本編に出たり。桂原郡中村の内高宮とい ふ所より、非高橋郡山田に採ゆ。又都郡相模 村の内やしき、上段都森谷村の内さきぞい、都平郡 中山村の内さきほみ、都井村の内さきほみ等にも あり。」	加藤・豊取 1977/1978	
嵐山		野鳥屋	享和2年(1802)	『長野日記』	「秋月園山を野鳥村に隣(ク)。(伊東1948)		
			享和2年(1802)	『古史掇』	「鳥屋三重町金助四人子兼重右衛門伊右衛門四人 女房貞助小石原村武助四人女房延助小車町博助 四人女房四人娘はイノ大石山田等候ニ付下米広村 助三郎方之丞為高段殿被仰付。」	郷土文化研究 所1964 小石原ゆき心の 関係年表	
嵐山		野鳥屋	享和2年(1802)	『望春隨筆』	「…作り人八雲前上野より二三人来り、小石原上 りも来る。後八雲前イマツト云所よりも来る。寛政十 一二年より九十一年迄存。標記「七徳」徳利之類 也。蓋て小石原儀に似たり、…」	日本歴史2006	
			文化3年(1806)		前七徳の女形巻の体抄の刻書	「文化三年五月 正末前七作 (印版)」	歴民2001
			文化9年(1812)		『中村平左衛門日記』	豊前代藩主小笠原忠国が小倉城下藤崎島の清水 嵐山の霊塚に立ち寄り、作品を覧物した	北九州市歴史博 2000
			文化10年(1813)	『筑前国経土記拾遺』巻25 裏面都 上山田村の両神宮の項の「土産」	「磁器に陶治二戸あり、英磁・土磁・花磁・漆器・鉢等 の類を造る。同山に陶器を造る所は此の所に あり、然るに其後絶せしを、文化十年種島の嵐人 再興し、今専ら練方に造せて家産す、…」	青柳1993	
清原儀			文化11年(1814)		清原儀の染付磁器文書の外産品高台内 の染付による文字	「文化十一年 戊戌月朔 長澤氏 山泉園」 (須賀町指定文化財 No.14、1982.4指定)	歴民2001
上野儀			文化13年(1816)		小笠原藩の御茶道頭吉市氏11代自傳 の『江戸会記』	「/ 水指 瓶 / 茶入 蓋伊瓦付 / 茶碗 古上野 不變 磁 / 茶台 山田染付」 文化14年正月23日、同年7月17日、同年6月3日にも 上野儀が見える	井上1943 美和1942
上野儀			文化14年(1817)	『江戸会記』	「文化十四年六月三日 / 江戸、小笠原出江守兼 / 物持 志重公卿文、御茶碗磁器文 / 近江守兼 常二公卿等の賜なり / 香、蜜香、古浄味作、水 指、南蛮平 / 茶入、古上野 真茶。」	赤池町1977	
一の屋儀			文政2年(1819)		浮羽・新田儀(一の屋儀)の伝世品の染 付磁器文書の入った木箱の銘記	「文政二同年二月二十三日 生業郡藤田村一の屋 谷大塚山(不明) 麴結茶碗 磁 平塚。」	浮羽町1988上 永竹1982
上野儀			文政3年(1820)		小笠原藩の御茶道頭吉市氏11代自傳 の『清原野会記』	「/ 茶碗 古上野」 同年6月13日、文政3年正月元旦、同年正月2日、同 年2月5日、同年2月2日、3月7日、文政6年正月元旦、 同年3月7日、文政7年正月2日、同4月18日、同年3月 1日、同年同月2日、同年8月12日、同10月13日、 同年12月17日、文政8年正月22日、文政12年正月18 日、文政13年正月2日、同年2月26日、同年同月28日 にも上野儀類で記載あり。白蜜香、蜜香、茶入、 薄茶入、水指、花入、茶碗、鉢などが見える	井上1943
清原儀			文政4年(1821)	『筑前名所図会』巻9	清原嵐山の記述がある	高倉1996 九州歴史資料 館2009	
上野儀			文政6年(1823)		小笠原藩の御茶道頭吉市氏11代自傳 の『文政会記』	「/ 番合 上野 亀 / 花入 一重、作不知、花サンロ / 水指 上野」 同年9月12日にも上野儀が見える	井上1943
一の屋儀			文政6年(1823)		新田儀(一の屋儀)の福屋染付瓶の瓶 外裏の染付銘	「嵐山」文政六年 閑神秋」	久留米市史 1998 歴民2001
田舎儀			文政8年(1825)	『勾当地方歴史資料』	「此年田村郡高野常安にて田舎儀を始めむ」	伊東1948	
田舎儀			文政8年(1825)	『近国植物山大概書上編』	田舎儀の産原嵐山(豊原儀)、今(今任頼)につい てはこれよりも古く開闢していた	香春町2001	
清原儀			文政11年(1828)		清原儀の染付菊文花文神酒徳利の外 面の染付銘	「文政十一年 露月廿四日 上清原嵐山 小山田勝 高(十六)年菊文花文神酒通」 (須賀町指定文化財 No.15、1982.4.1指定)	歴民2001

焼物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼		西山山房	文政11年(1828)	西山山房造(藤崎造師第35次調査)出土の窯道具の創書	「文政十一年 子五月廿日」	福岡市2006 方規2016
上野焼			文政13・天保元年(1830)	小笠原源の御茶道語古市氏11代自傳書 の「天保小書巻記」	「フ/花入 上野 筆、白磁 / 同月日、同年2月20日、同年3月6日、同年1月28日 にも上野焼の茶入・建水・花入・香合が見える	井上1943
柳屋焼			天保3年(1832)	筑後柳屋焼の文鳥の彫刻	「天保三郎年八月朔日於柳屋田屋幕定造之」 九州博覧会門外史の福岡朝臣風流の高島屋内に、 天保三郎年八月廿三と記せるものと、我入作と 自己の名を彫刻せるものがある。	梅野1934
			天保5年(1834)	『望春隨筆』巻2の「西山」の項	清満寺西山、野島山山の記述あり	秋月1996
田舎焼			天保5年(1834)	「熊形花生」の箱本体及び蓋文状	天保5年の紀年がある 〔天町指定有形文化財〕	大任町1998 豊民2001
高取焼			天保 8年(1837)	『小石原村山日記録』	高取源十郎重定、高取吉十郎重隆により記される	小石原やきもの 関係年表
清盛焼			天保 9年(1838)	長付給文冠子智神清盛刻(後首神田御 一対の外函の染付による文字	「天保九立成 三月廿日 龍土 百四五内彫村」 〔調査報告指定文化財 No.16 198241指定〕	豊民2001
高取焼		西山山房	天保 9年(1838)	西山山房造(藤崎造師第35次調査)出土 の窯道具の創書	「戊十一 西山山 天保九年」	福岡市2006 方規2016
高取焼		釜庄屋	天保 9年(1838)	『太宰管内志』筑前之18(平手郡)の項	「寛文7年より又上座郡懸村にうつりてやく」	小石原村集
上野焼			天保10年(1839)	小笠原源の御茶道語古市氏11代自傳書 の「文政天保寛江戸会記」	「フ/建水 上野 / 天保12年11月5日にも上野焼水指が見える	井上1943
高取焼		水満寺家 白旗山房 釜庄屋	天保12年(1841)	『太宰管内志』筑前之18(平手郡)「高島 屋ノ城」の項	当郡水満寺の内に高取井ノ古城とあり…また 太宰郡移封の跡加藤清正(徳圃)にて高取を築する事 をつれ来りて惣領嗣にて年々進出し其者(寺) 并戸形九郎と云故に其製せし井を井屋と云故に其 故新田屋を筑前に召されて高取ノ寺屋本堂に命じ てそにて又高取を封せしめ給ふ事と云て高取とな づく。其長十九年より筑前内野ノ城と云ふ處にて八 歳と云に附せて懐かしめる所を八歳やきと云其後 寛永七年御領部を中ノ野白旗山の寺ノ屋に 移りてやく、寛文七年より又上座郡懸村にうつりて やくの陶工は新九郎が東家なり、	
屋野焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之2(生葉郡)「屋野」 の項	「〔筑後志二巻〕に陶師は生葉郡屋野村十数名の處 あり往年上座郡新田屋を出来、近年屋山房の年番 を築す尤好品なり去置命て御井郡の地にして陶師 を製しめ給ふ事を遠迄に依て其製肥州の伊万野焼 に等し今更し懐しむべしとあり、	
坂東寺焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之7(上妻郡下)「坂東 寺」の項	「…東大門ノ側有民原陶師其高取源之類深 藤半田之族等亦不及於君毎歲終之東武とな見たり、 …(後略)」	
水田焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之7(下妻郡)	「…さて下妻郡水田村に土師ありて半田(ハン)土 師とて名を出すその事(はしく(知龍))に見えたり、 」	
上野焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』置前之3(田川郡下)「城田 郡」の項	「…序に云上野ノ麓より少し下ノ方ノ上野ノ山とて 陶師を作る處あり上野焼とて名なり其製種は世に 傳れて工とな事なりけれども陶師の者を入れ處に 長く備ふ事なり是は否に筑前國平手郡高島井より 移れりよ高島井に置かしし陶工は太宰郡新田屋の 地加藤源政(徳圃)よりつれ来りし高島井ノ上野に 上野に於て當郡今任村又小倉の清水にも陶師を 作れども其(ノ)製はるがごとしあり、	
			天保13年(1842)	筑紫野原田の原田地区造師第40地点 (原田屋の代官所跡)から出土した小石 原産陶器の徳利の蓋書銘	「天保十三 築屋(置) 廣三月」	筑紫野市2018
宗七焼			天保13年(1842)	宗七焼の胎輪陶器の印の外函の創書	「天保十三壬寅年 〇〇吉日 天神 陶工本宗七 〇〇 作」	豊民2001
清盛焼			弘化 3年(1846)	清盛鉄杖文蓋付染付牡丹唐草文鉢の 蓋書	「七十八日秋遊(花押)」	豊民2001
上野焼			嘉永7・安政元年(1854)	田内繪科の「陶師考、別冊註」嘉永7 年、安政2年著述、明治16年刊	上野焼の記述あり	(井上1943)

焼物名	番号	製造地名	年月日	史料名	内容	備考
田舎焼			嘉永7・安政元年(1854)	個人所有の香炉裏裏の刺紙	「安政年 御原 田舎」	大任町2004 歴史2001
野焼焼			安政3年(1856)	『薩摩藩民政誌』	「那珂郡野焼村御河内にて焼物を製す(頁) 京都の陶工佐々木々三を召き、野焼山山楽殿前」	伊集 1948 九州陶磁文化 誌1992/2010 永竹ほか1982
田舎焼			安政3年(1856)	経輪徳利の外蓋面に書書の文字	「安政三 〇〇 黒十月」	歴史2001
高取焼		中野上の原 区	安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻21 上座郡 上) 小石原村の頃の「土産」	中野にて陶器を製す。埴(とく)花瓦 磁土器 磁土 瓦(いり)等の類なほ種々の土器を造る。其土産に 在り、天明二白免差を領して中野焼と云しを後に 製は止めて高取焼に留て民用の諸器を作る。・・	
高取焼		藤床屋	安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻21 上座郡 上) 藤床屋の頃の「土産」	「藤床に在り、・・延安九年陶師高取氏建立す。其家 造以築延せし意々の神を勧請すと云。明治年中に 此神の靈験に依て道經の祠を祖(奉)事奉祀にあり 。本編に寛文七年福吉より高取の陶工を此村の鶴 に遣て陶器を造らんとす。其の時に焼しに焼すや 窯には製せずなりぬ。」	
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻21 上座郡 上) 赤谷村の頃	「村ノ東村末と云處より陶器の用に黒白土を出 す。」	
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻29 藤床郡上 上山田村の陶神宮の頃の「土産」	「藤床に陶治二戸あり、茶碗 土鍋 花瓦 湯呑 鉢等の 類を造る。即此村に陶師を製する(頁)火文の法に起 れり、然るに其後中絶せしを、文化十一年藤床の愚人 再興し、今専ら力に盡きて高取とす。本城に唐人 谷と名付處あり、むかし唐人來出して家産を領し奉り しと云フ、是元文の社にか又其以前の事か詳ならず、 置取焼の元祖ハ朝鮮人也、其流の陶工なる厥 例となぐ唐人谷とよぶふか、是考ふべし。」	
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻26 藤床郡下 津生村の頃	「……田中に陶工二戸有、其製焼器類に短す。是野 焼上野の成なり。」	
高取焼		大鳴塚	安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻29 勝手郡上 大鳴谷の頃	「……又露山辺木谷筋に在、今も其所を露山と云、高 藤氏居て、是長元和徳の人と云者受産を製せし所なり、 今は陶工なし、大鳴塚とて其陶器を民衆に稱に 稱伝ふ者有。・・(後略)」	青柳1857
高取焼		大鳴塚	安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻31 勝手郡下 乙野村の頃	「……又乙野郡と云處に高藤五郎と云名所のあり、 此者は大鳴谷にて器器を製して土を此地より取し と云云ふ、……」	青柳1857
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻31 勝手郡下 田村の頃	「……昔前國上野氏の成器の器を用て土を出す、其代 物として傳はし(露蘇三十を製村に歸ふ)」	青柳1857
高取焼			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻31 勝手郡下 永満寺村の「土産」	「……又古へ当村にて高取焼とて陶器を製せしか今ハ 絶たり、其跡ハ定規の南野山に野に遠山山段の 御に在、今も御塚と云、御にある所をか赤池池と云、 礎瓦など多し、備土産門に詳也。」	青柳1857
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻32 遠賀郡元 上畑村の「庚平社」の頃	「村南野野余餘か岳の麓に唐人山といふ處あり、其 像家成徳の作此所に陶師を領しか其城域中にか いふにせしとて是を傳せられしと云へたり、今に其 礎瓦土中に埋れてあり、其昔唐人來り焼物に名 づくといふ。」	
			安政4年(1857)	『筑前国経風土記拾遺』巻37 宗像郡中 大井村の頃	「……又土蓋田と云地有、宗像の土の製土を製せし處 也と云」	

遺物名	番号	関連地名	年月日	史料名	内容	備考
須磨焼		安政4年(1857)		『筑前国結城土記物造』巻40 表贈部下 須磨村の「土産」	「後略 伊勢山麓と云所にて製す。今其他西山と云へり。[西濃里の地蔵所す。山上遺蹟に立し。]当長三拾二戸第二所に在。木倉[廿二間] 新築十三間と云。自家の南前 花壇 酒庫 鉢 其内種々の品物を備出す。此業は大山上に於て水多し且貴山に於て水櫃を数多種へ陶土を裁しめ人功を助ければ陶師の摩留自由地所に計らひし。其室器非牛井村の下更に難安早と云者有。南宮焼の器物を製せん事を旨に図ければ、則許容て四十三年此所に事を製す土の質を以て一年を以て、其事を報告ししもの。反出す所の焼物をえらひ陶所に於て其物は他州にも廠を許さる。*(中略)*即安早か此山を起せし始末を記し、室器の始末遺蹟の中西谷の金山まぶと云所及近辺の建山にて石を採穴の内より掘出せる白土を以て、西山山尋常藤原村の陶工を指導て以て陶器を製し心の真製からず。焼に焼ける骨一人を履み所居を号へ日土を削し石前院筑後國南河原山の陶家へ遣し、其法を習はしむ。其骨穴亦余白土を以て器物の始末を記し焼て製品の器物を備出して携へ帰りぬ。*(後略)」	
高取焼		西山山麓	安政4年(1857)	『筑前国結城土記物造』巻43 早良郡上敷原村付高山の項	「秋瀬山 俗に西山山と云。享保三年より上座郡小石原村の陶工数家を築て焼て陶器を製せしめらる。やゝ焼を以て専製し、其(村名)をなり。」 「村の北西新町の南邊に小山あり、上の山といふ。享文五年の春陶器所と定る。即陶工高助五十五歳の二女を以て製して、其焼山と名置けり。其後博多住す。普通 水指(磁薬器) 天目(茶碗) 香合等種々の器物を製せしめらる。良工なり。世の人を東山山といふ。」	
飯古焼			安政4年(1857)	『筑前国結城土記物造』巻43 早良郡上種崎浦の「神宮寺」の項	「*此年の上の山に陶器を造る土あり、天明の初年此土を製て取しけい(焼)となく其事やみたり。」	
高取焼	田島窯	安政4年(1857)	『筑前国結城土記物造』巻48 早良郡下田嶋村の「友良年」の項	「陶器所 六段と云所にて昔陶器を製り、今も其焼出せるもの多く残り。」		
			安政4年(1857)	『筑前国結城土記物造』巻48 志摩郡上谷村の「土産」の項	「*又其工三戸あり、其製焼に値り。」	
田舎焼			安政4年(1857)	金森得木の『本朝陶器図説』	「田川郡豊春村 田事焼のことい田川今任村にて焼物たし焼し、上手ゆへ段々世に立し。当時豊春村に住せむて焼立焼。田事の二字ハ昔焼より焼し、焼、則高取初代にて焼」	豊春町2001 井上1943 豊田1937
			安政6年(1859)	原田家津邊崎人形堂(通称加藤清正堂)の彫刻銘	「安政六〇〇〇〇西月朔日」 「口〇〇〇〇原田眞衛」	
田舎焼			文久2年(1862)	藤輪徳利の外産面の刻書	「文久二 戊 四月廿日 田事」	原民2001 大任町2004
須磨焼			文久3(1863)	染付仙人観音宗栗村立の体形外面の染付による文字	「文久三亥春日 紀寛写(花押)」 「中幸田御石門門」	原民2001
高取焼			元治2・慶応元年(1865)	東山山麓の亀形遺物の外産の刻書	「為山口用器雲村重任製之 慶應元乙丑秋年中旬」	原民2001
須磨焼			慶応3年(1867)	「七瀬在西日誌」	大等所に澤在中の五瀬(三条美実・三条西香・東久並清隆・四美隆(主生基保))が須磨焼山陶所を興物する 「養身、午後須磨山陶所見物。宇美社参詣。暮後帰。所々縁石散置」	伊集1534
高取焼			慶応3年(1867)	東山山の陶器の亀形遺物の外産面の刻書	「為山口用器雲村重任製之 慶應元乙丑秋年中旬」	原民2001
筑後赤坂焼			文久元年(1861)→慶応元年(1865)の頃に誦んだものか		野村望東氏が筑後赤坂焼を誦んだ歌あり 「筑後のまたあるけるにあか飯といふ處ありければ あか飯の殖生のこやす食物のいろはくそ焼いでにけり」	原野1935
			慶応4・明治元年(1868)	『活田村諸書讀物書上稿』(活田村永大庄屋中村家文書)	「高野焼」 「今任焼」の記述あり。 高野は豊春町の、今任は大任町の、田事焼のこと	
乙子焼			慶応4・明治元年(1868)	「上高屋、内匠村繪納裡写」に濃上として長十一月に記載	京都厚野軒(みやこ町)上高屋の乙子焼がこれ以前に製成していらし 「筑物書 巻枚」	広津1981

注

(1)この表は、当館文化財調査室長補佐の伊崎俊秋氏(令和2年度当時)が作成したものを、学芸調査室学芸研究課の清井が訂正したものである。

#### 4 窯跡の保存と活用

今回の調査では、リスト上 106 件の窯跡を把握した。その内、窯本体の確認はできなかったものの陶片や窯道具、窯壁の発見等により確認したものを含め 52 件を確認することができた。その数はリストのおよそ半数であり、残りは所在場所の情報が不明確で、窯跡を特定できなかったものであり、災害等により消滅したのもあった。

既存資料や採集資料、文献史料からの検討により、それらの消長は p166 の表のように整理した。創業や廃絶の具体的な年代がおさえられるものは多くはないが、今後の調査により精度が高まることを期待したい。

第 1 章から述べてきた通り、近世窯業関係遺跡は、大名の庇護にあった国焼はもちろん、地域の産業や政策と深く関わり、地域文化の特色に相関する民窯も、福岡県あるいは当該地域にとって必要な埋蔵文化財として認識でき、必要なものについては埋蔵文化財包蔵地としての周知化と、重要なものについては指定等による保護措置が必要と考える。

重要なものとしての判断基準は、陶磁史的に画期となるもの、系譜において代表的なもの等が考えられ、かつ遺存状態が良いものが挙げられる。

旧国毎にみても、筑前国（福岡藩領）では、高取焼の永満寺宅間窯、内ヶ磯窯、山田窯、白旗山窯、釜床窯、大鋸谷窯、東血山窯がある。これらの内、文化財指定を受けているのは永満寺宅間窯（直方市指定）、釜床窯（福岡県指定）である。内ヶ磯窯は調査後保全措置を図った上でダムに水没、山田窯はボタ山下に埋没、大鋸谷窯と東血山窯は古い開発により状況が不明瞭である。特に白旗山窯は小堀遠州の好みを反映した高取焼を初めて焼成した窯であり、磁器焼成も実験的ながら取り組んでいる、高取焼の展開を考える上で画期となる窯であり、保護措置を図るべき窯と考える。

また、高取焼から派生し、民窯として展開していった、現在の小石原地区に点在する窯跡は、一本杉 2 号窯跡のみが福岡県指定史跡として指定されている。これらの窯は小石原村（現・東峰村）により体系的に確認調査が継続され、中野上の原窯跡・火口谷窯跡・金敷様裏窯跡の調査成果が公表されている。中野上の原窯跡は素材に恵まれず継続しなかったものの磁器生産に本格的に取り組もうとした窯であり、本県の陶磁器生産で重要な位置を占める。既に県指定の一本杉 2 号窯跡を含め、その後に展開する窯跡群を包括的に保護していくことも検討したい。

豊前国については、上野焼の釜ノ口窯跡、血山本窯跡、岩屋高麗窯跡があり、お楽しみ窯である菜園場窯跡がある。菜園場窯跡は開発により確認され、現地から移設して保存されており、県の有形文化財（考古資料）の指定を受けている。上野焼の窯は岩屋高麗窯跡の一部が破壊されているものの、釜ノ口窯跡、血山本窯跡いずれも残存しており、その持つ意義は極めて大きい。そのような意義から昭和 33 年（1958）から日本陶磁協会等が主体となり発掘調査が実施され、国指定の仮指定とされたものの、調査成果が十分に公表されなかったこともあり、未指定のままである。したがって、それぞれの窯跡や出土品の価値を明確化するための調査を経て、保護措置を図るべきである。その前提として、初期の釜ノ口窯跡を代表とした創業時期、技術系譜、製品の諸特徴の把握は、研究が比較的進んでいる高取焼と比較する上でも必須の作業である。また、基礎的な作業として、今回の調査ではかくし窯跡やカンバ窯跡等、先行研究で把握されているものの現地を特定できなかったものもある。上野焼の展開を考える上では、これら窯跡の確認が求められる。

筑後地域については、蒲池焼や坂東寺焼といった国焼の窯が、窯跡の確認等が十分なされておらず、平野部に位置することから大部分が失われている可能性があり、お楽しみ窯である柳原焼窯跡や東野亭焼窯跡も既に失われている。その中で、筑後において磁器生産に本格的に取り組んだ朝妻焼窯跡は特に重要である。

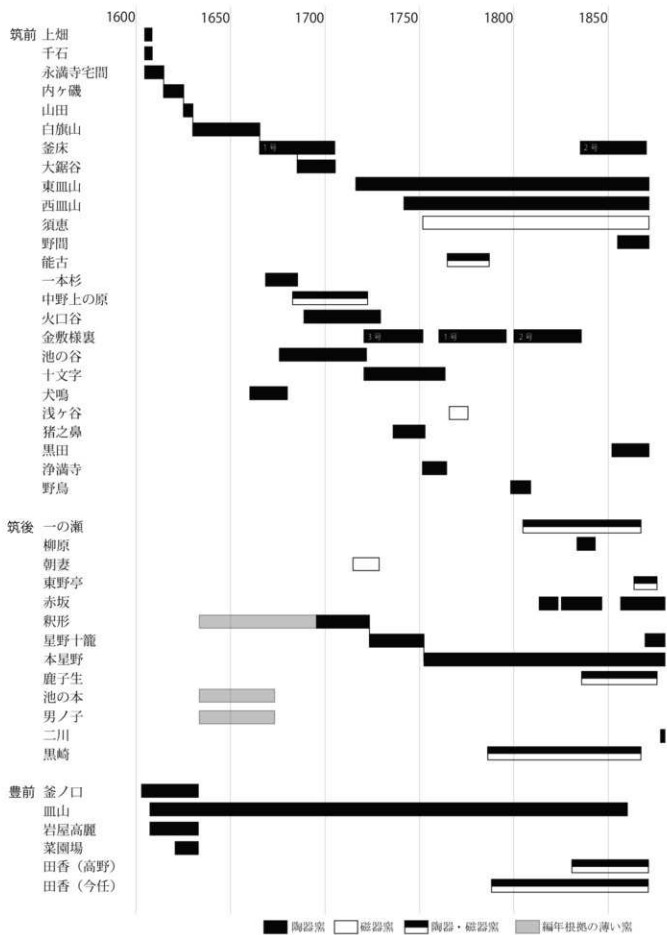
また、筑後地域は現在でも八女茶が大きな産業の一角を占めるが、この茶の文化は地域史として重要な位置付けがなされる。茶の貯蔵器である壺の生産は筑後山間部で早くから行われ、釈形焼や星野焼はそれを代表する。いずれも正式な発掘調査が行われておらず、操業時期は不明確なものも多い。釈形焼窯跡の創業時期や、より古式と考えられる池の本焼窯跡の詳細な情報が求められる。こうした茶生産に関わる陶器焼成窯については、学術的な確認調査を通して位置付けを行う必要がある。また、筑後地域の平野部の窯跡は既に失われたものが多いことを触れたが、二川焼は時期は比較的新しいとはいえ、上部構造の残存状況が良い。

隣県には佐賀県肥前古窯跡や大分県小麓田焼、熊本県小代焼等、近世古窯跡を活かしながら現代の陶芸技術を継承している地域がある。佐賀や大分は窯や工房等が生む景観を文化的景観として保存するとともに特に佐賀では伝統的建造物群保存地区としても保全と活用が図られている。福岡県内では古窯跡を活かしたそうした取り組みは現時点では十分ではないが、今回の基礎的な把握を契機に保存と活用に向けた取り組みが活性化することを期待したい。

このように概観し、評価の方向性を示したが、注意すべきはそれぞれの窯業関係遺跡は、窯本体のみが保護の対象ではなく、工房を始めとして関連する諸遺構も保護の対象とすべき点である。県内の窯跡で積極的に工房が評価されているのは内ヶ磯窯跡と須恵焼窯跡のみである。検証するのは困難と思われるが、土取り場も意識する必要がある。また、窯に携わった工人の墓地も調査の対象となる。

今回行った近世窯業関係遺跡の現時点での悉皆的な把握により、課題や方向性が見出せるようになった。今回は埋蔵文化財包蔵地としての視点が主眼であったため、製品や窯道具の諸特徴については多く検討できなかった。今後、古代の土器編年と同様、近世遺跡を評価する上では出土する陶磁器の評価が肝要であり、そのためにも生産遺跡の評価が重要である。今回把握した窯跡とその出土品の検討が今回の調査を機に進展することを期待したい。

福岡県内窯業遺跡編年表（～明治）





## V おわりに

この報告書では、令和2年～4年度の4年間に渡った近世窯業関係遺跡調査をまとめた。

調査当時はコロナ下の緊急事態宣言により、令和2年度の1年間は資料集約に時間を費やすだけであったが、令和3・4年度には、窯跡のある現地での調査指導委員会開催と重点調査を進められた。最後の令和5年度の調査指導委員会では、雨の中で現地で開催し、この報告書を刊行に向けての十分な協議を行うことができた。

今回の調査では、大きく第1次調査の悉皆調査と第2次調査の重点調査の2つを行った。

第1次調査では関連論文、市町村史誌、市町村発掘調査報告書、歴史史料などから情報を集めた。その結果、窯跡で106件、関連遺跡で56件の情報を得ることができたのは、今回の成果の一つである。情報の中には、参考文献からの情報のみで不明な窯跡も多々あるが、現時点での福岡県内の近世窯業関連遺跡についての情報をまとめることができた。

第2次調査では、重点調査として福岡県内の近世窯業を考える上で、高取焼、上野焼、小石原焼、その他の地域の窯跡に注目して、関連する窯跡28件について現地確認を行った。調査は主に現地へ赴き踏査を行い、現況や遺物の採集から窯跡の有無を判断した。調査に赴いたほとんどの窯跡で遺物を表探することができ、窯跡の存在を証明し、今回の報告書では、できるだけ採集した遺物は、実測して掲載することに心がけ、これまで知られていない遺物についても掲載できたのも今回の成果である。

これら2つの悉皆調査と重点調査で得られた情報をまとめたこの報告書をもとに、確認調査や本調査で詳細な情報が判明していけば、新たな知見を得ることができると期待される。

しかし、この報告書を刊行することで、窯跡や関連遺跡の情報が広まることによる遺跡の盗掘などで保護が疎かになることだけは避けて頂きたい。この報告書で掲載した遺跡が、現状よりもより良く保護されることを期待して刊行されたものである。

埋蔵文化財として取り扱うべき遺跡の範囲については、「I はじめに」で先述したが、再度ここで重要な部分のみを述べると、近世の遺跡の取り扱いについては、「地域において必要なものを対象とすることができる」とされており漠然としている所も多い。しかし現在の私たちが福岡県の歴史やそれぞれの地域の歴史を考える上では、文献史料以外の情報を知る上で埋蔵文化財の近世遺跡の取り扱いはより重視されるべきものと思われる。この報告書の刊行により、近世の窯業関係遺跡の取り扱いに関して、一つの方向性を示すことで、今後の遺跡保護に寄与できれば幸いである。

なお、この報告書で作成した第1次調査及び第2次調査については、市町村の文化財職員の情報提供と調査協力を得て成し遂げられたものである。ご協力頂いた地元の関係者の方々や市町村文化財職員の方々に再度、お礼を申し上げたい。

この報告書の刊行により、掲載された遺跡の保護がさらに進み、福岡県内の近世窯業関係遺跡の調査研究を行う上で、一助になれば申し分もない。

## 福岡県の窯業関係事象年表

- 1422 (応永 29) 【茶】この年または翌年に、僧で茶人の村田珠光が生まれる
- 1423 (応永 30) 【茶】瑞臨禪師が筑後国鹿子尾村(八女市黒木町)に靈巖寺を建立、茶種子を播く
- 1522 (大永 2) 千利休(宗易)が生まれる(1522～1591.2)→天文13年(1544)説あり
- 1543 (天文 12) 武将で茶人の古田織部(重然)が生まれる(～1615.6.11)
- 1579 (天正 7) 小堀遠州が生まれる(遠州流の開祖、宗甫と号す。茶道は古田織部に学ぶ)
- 1592 (文禄 1) 3月 文禄の役(壬辰倭乱)(～1593)  
12月 豊臣秀吉は家長彦三郎に朱印状を与える
- 1596 (慶長 1) 朝鮮出兵の武将・大名帰陣。李朝系工人ら多数帰化し西日本諸域に開窯
- 1597 (慶長 2) 1月 慶長の役(丁酉再乱)(～1598)
- 1600 (慶長 5) 9月 関ヶ原の戦い。12月に黒田長政が筑前名島城に、細川忠興が中津城に入る
- 1601 (慶長 6) 3月 田中吉政が柳川城に、11月に細川忠興が小倉城に入る  
※この頃、永満寺宅開窯開窯か。八山、高取八蔵の名を賜る  
※この頃、尊楷(上野喜蔵高国)、釜ノ口窯開く(説)  
※筑前上畑窯(唐人焼窯)(遠賀郡岡垣町上畑)と千石焼(宮若市千石)開窯説
- 1603 (慶長 8) 2月 徳川家康が征夷大將軍となり、江戸幕府を開く
- 1604 (慶長 9) 11月 筑後国守・田中吉政は土器師・家長彦三郎を土器司に命じる(蒲池焼(柳河焼))  
※永満寺宅開窯開窯説(慶長7年説・11年説あり)
- 1605 (慶長 10) 上野:釜ノ口窯開窯 → 慶長6年(1601)・7年開窯説あり
- 1606 (慶長 11) 永満寺宅開窯が開窯される(慶長7年・9年説あり)
- 1607 (慶長 12) 岩屋高麗窯が開窯される
- 1608 (慶長 13) 正木金右衛門博多瓦町にて瓦を焼く
- 1613 (慶長 18) 3月 茶会記の『織田有楽亭・茶湯日記』に「茶碗 豊前焼」の記述あり
- 1614 (慶長 19) 内ヶ磯窯が開窯される(～1624)
- 1615 (元和 1) 4月 大坂夏の陣(豊臣氏滅亡一元和假武)
- 1616 (元和 2) 筑前国の小石原窯(中野焼)創まる
- 1619 (元和 5) 1月 『吉田梵舜日記』に「豊前焼」の記述がなされる
- 1620 (元和 6) 11月 筑後柳川の田中家が改易され、立花宗茂が陸奥国朝倉から柳河藩主に復帰する  
12月 久留米に丹波福地山から有馬豊氏が転封される
- 1623 (元和 9) 3月 上妻郡坂東寺村の田中平兵衛が久留米藩の御用土器師となる(坂東寺焼開窯)
- 1624～1643 有馬豊氏書状に「黒木の焼物」との記述がある。(後の釈形焼のことか)  
(寛永年間)
- 1624 (寛永 1) 高取焼の山田窯が嘉麻郡(嘉麻市)上山田唐人谷に開窯する  
※筑前・千石焼窯が開窯との説あり
- 1625 (寛永 2) 豊前の上野本窯(皿山)開窯説
- 1628 (寛永 5) 4月 『遠州茶会記』に「茶入筑前焼」「筑前焼水指」の名で高取焼が初めて記載される
- 1630 (寛永 7) 高取焼の白旗山窯が飯塚市幸袋に開窯(～1665)される

- 1632 (寛永 9) 12月 小倉藩細川忠利が肥後に転封、小倉に播州明石から小笠原忠真(忠政)が入る
- 1640 (寛永 17) 4月 細川氏の『三齋公伝書』(茶道四祖伝書)に「小倉焼皿・コクラヤキ」の記述
- 1661～1673 鞍手郡若宮町(宮若市)大字犬鳴の犬鳴焼窯が創業する  
(寛文年間)
- 1665 (寛文 5) 二代高取八蔵貞明、白旗山から小石原へ移り、小石原鼓窯開窯される
- 1682 (天和 2) 上座郡小石原村皿山(中野)の中野焼開窯説(～1722)
- 1686 (貞享 3) 黒田藩主光之は小石原鼓から早良郡田島村大鋸谷(友泉亭御庭窯)に窯を移す
- 1688～1703 星野焼[生葉郡星野村]元禄年間、開窯説(正徳年間(1711-1715)説あり)  
(元禄年中)
- 1698 (元禄 11) 釈形焼[八女郡黒木町]:伝世品の箱書に「元禄 11 戊寅」と記されたものがある
- 1704～1710 この初期、早良郡龜原村上の山に東皿山窯(御用窯)が築かれる  
(宝永年中)
- 1704 (宝永 1) 大鋸谷窯閉窯
- 1705 (宝永 2) 豊後の天領日田に、小石原系の陶窯(小鹿田焼)が開かれる
- 1708 (宝永 5) 2月 早良郡龜原上の山(福岡市早良区祖原皿山)に東皿山窯(東山窯)開窯する
- 1710 (宝永 7) 貝原益軒『筑前国統風土記』が完成する
- 1711～1716 生葉郡星野村の星野焼を藩主有馬氏が御用窯として復活する  
(正徳年中)  
※八女郡水田村野町の野町焼が始まる
- 1714 (正徳 4) 久留米の朝妻焼が藩命により八女釈形窯の焼物師により焼かれ始める
- 1716 (享保 1) 星野焼(本星野焼)がこの頃に始まる
- 1718 (享保 3) 五代黒田宣政は小石原の陶工数人を移動させ、高取系西新町に西皿山を開窯する
- 1730 (享保 15) 福岡藩では、那珂郡山田村の庄屋・高橋善藏から榎畑の栽培が始まるとされる
- 1737 (元文 2) 星野焼の本星野窯が、星野仙頭与次右衛門の願い出で御用窯として認可される
- 1751～1764 宝暦年間の初頭に窯が本星野から十龍へ移る  
(宝暦年中)
- 1764 (明和 1) 表槽屋部須恵村皿山にて新藤安平が須恵焼の窯を築き、白瓷を焼く  
※この頃に、秋月の長谷山浄満寺窯が開窯か(『望春随筆』)
- 1764～1771 早良郡残島で「明和の比より此嶋にて陶器を製す」(『筑前国統風土記附録』)  
(明和年中)
- 1765 (明和 2) 3月 『石城志』巻7「土産上」に瓦町の「瓷器(スヤキモノ)」の項が設けられる  
※『南筑明覧』に、山門郡柳川城の風爐前土器、三瀬郡蒲池村の家永彦三郎の  
記事がある
- 1766 (明和 3) 宗七焼:黒田藩御用素焼物細工師・初代正木宗七死去
- 1767 (明和 4) 春 鞍手郡山口村(宮若市)浅ヶ谷で百姓惣兵衛が磁器焼物を焼成(山口浅ヶ谷窯)  
11月 『近国焼物山大概書上巻』に筑前領の須恵皿山・西町皿山・山口皿山が記載される
- 1764～1781 この頃の記録に上野焼の土として伊方土・夏吉土・市場土・菅尾土が使われるとい  
(明和～安永年中) う記載がみられる

- 1777 (安永6) 『筑後志』の「土産」に、半田土鍋、風爐前土器(上妻郡熊野村)などの記載がみられる
- 1781～1789 (天明年中) 黒崎焼が興る
- 1781 (天明1) 『高取家記録』が成立する
- 1784 (天明4) 柳河藩領の黒崎焼に肥前有田の陶工が移る
- 1787 (天明7) 有田の『皿山代官旧日記覚書』に須恵焼・能古焼の記載がみられる
- 1788 (天明8) 筑後国の水田焼が有馬領主の御用窯となる。筑後国の三原窯が開窯する
- 1798 (寛政10) 『筑前国統風土記附録』完成。焼物・瓦などに関する記述多々あり
- 1799 (寛政11) 秋月藩で野鳥窯が開窯される
- 1812 (文化9) 筑後で赤坂焼が始まる
- 1813 (文化10) 『筑前国統風土記拾遺』嘉麻郡上山田村の項「猪鼻に陶治二戸あり。」の記述
- 1817 (文化14) 太田勝次郎筑後国の朝田窯を経営す(陶器大辞典 1936)
- 1823 (文政6) 三原富次が赤坂焼復興する
- 1827 (文政10) 8月 赤坂焼三原窯が久留米藩御用焼立役となる
- 1828 (文政11) この頃、筑後赤坂焼の陶工が肥前国田代の代官より招かれ、同所瓜生野皿山を創設
- 1830 (天保1) 朝田焼の樋口窯時代で、大村領内の長与焼・波佐見焼との陶技交流もみられる
- 1832 (天保3) 筑後久留米の柳原焼が始まる(1832～1836の間焼成)
- 1835 (天保6) 鹿子生焼;長岡鳳鳴、鹿子生焼開窯(～明治1・2年)
- 1843 (天保14) 博多市瓦町に大坪久次郎染焼を創む(陶器大辞典 1936)
- 1850 (嘉永3) 博多祇園町に中ノ子吉兵衛がこの年に初めて節句人形を作って売り出した
- 1854 (安政1) 豊前国の田香焼興る(陶器大辞典 1936)
- 1854～1860 (安政年中) 須恵焼:須恵皿山役所設置(安政末頃)  
※朝田焼:足立寿平、朝田にて旧窯を利用し、唐津・小石原・星野系の陶工を雇い操業
- 1855 (安政2) 福岡藩が野間柳河内に開窯し、藩御用窯として陶工佐々木与三郎に京焼を造らせた
- 1857 (安政4) 青柳種信ほか『筑前国統風土記拾遺』54巻がこの頃なり、陶磁器関係の記述多くあり
- 1858 (安政5) 5月 豊前小倉の村田成成の『豊国名所』が成り、三館船・田香焼・清水皿山の絵あり  
6月 筑後地方で大風あり。これにより御用窯である坂東寺焼の窯が破損した
- 1860 (万延1) 安政末年、須恵皿山役所が再度設置される
- 1861 (文久1) 野間焼が開窯される(安政3年(1856)開窯したとする説もある)
- 1865 (慶応1) 3月 浮羽郡朝田村の庄屋足立俊平の長男・壽平が一の瀬窯を再興する  
7月 久留米市野中町東野中の東野亭焼(野中焼)の窯が造られ、製陶が始まる
- 1868 (明治1) 11月 京都郡犀川町(みやこ町)上高屋の乙子焼がこれ以前に開窯したとされる  
※筑後の赤坂会社窯が開窯される(陶器大辞典 1936)
- 1870 (明治3) 須恵焼:澤田舜山、野間皿山へ移る → 藩窯としての須恵焼が廃窯される

- 1871 (明治 4) 7.14 廃藩置県 → 藩窯はその基盤を失って廃窯となるか、民窯として存続した
- 1875 (明治 8) 豊前国企救郡水町村 (北九州市門司区) の水町焼が創業
- 1876 (明治 9) 蜷川式胤の『観古図説』陶器之部 (明治 9 年・13 年刊) に上野焼に関する記載がみられる
- 1877 (明治 10) 三池郡の二川焼が焼かれ始める → 肥前弓野焼の中尾米作が来て再興したと伝える  
※久留米市で青木焼が開窯される (陶器大辞典 1936)
- 1886 (明治 19) 須恵焼は、田原養全・玉ノ井勝一郎その他福博の商売人 20 人の株式の経営
- 1888 (明治 21) 糟屋郡須恵村の金鑄焼について、福陵新報雑報に売れ行き好調という記事が掲載される
- 1889 (明治 22) 森長三郎筑前藤崎に高取焼を再興す (陶器大辞典 1936)
- 1892 (明治 25) この頃、三井郡国分村 (久留米市) 日渡で、水田焼の近藤某が日渡焼を開窯する
- 1897 (明治 30) この頃、遠賀郡折尾村 (北九州市八幡西区折尾) で折尾窯が創業される
- 1899 (明治 32) 福岡市西新町の西皿山窯で高取英一が製品を作り、鳥飼に森長三郎の高取再興窯が設置される  
※この頃に三井郡合川村 (久留米市合川町) 十三部で十三部焼創業
- 1902 (明治 35) この頃に、須恵焼が完全に廃窯となる
- 1906 (明治 39) 筑後二川焼について、角熊五郎が窯を引き継いで経営する
- 1911 (明治 44) 「福岡県の鶯谷焼興る」「筑後の柳河焼廃絶」(陶器大辞典 1936)

## 論文等

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
長原由紀	筑前国結城土記	1710		
	近頃物山大塚遺上堀	1798	上田家文書	
加藤一純、重取貞成	筑前国結城土記附録 下巻	1798		
伊藤兼定	太宰管内志	1841		
青柳理博ほか	筑前国結城土記拾遺	1857		
秋月古文書読誦会	筑前結城	1996.11	秋月郷土館資料集2「筑前結城」	筑前秋月秋野倶楽部
秋吉清	筑南の古害	1972.7	福岡の古蹟をたずね	久米久米士研究会
遠野清吉	筑紫寺碑、本印碑、清浄池	1934.10	郷土研究 筑後 2-10	
遠野清吉	筑前津屋野塚及本屋野塚	1934.12	郷土研究 筑後 2-12	
遠野清吉	筑後津屋	1935.8	筑後新報	會文堂
遠野清吉	筑後津屋	1935.9	九州陶磁	寶雲寺
遠野清吉	福岡筑後陶磁史	1978.10		鶴久二郎
アンディー・マスキ	東山山家遺物の試験的伝説書	1994.12	博多研究会誌 第3号	博多研究会
津田史郎編	高山代官日記覽書	1966.7		會華堂
石沢誠司	特殊土人形	1984.12	講座・日本技術の社会史 第4巻 東巻	日本評論社
井上麗藏		1943.3	豊前上野野史稿	筑前豊前陶磁文化研究所
上村佐典	愛宕造形楽園遺蹟	1984.5	海誌 274 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
上村佐典	愛宕造形 楽園遺蹟	1985.10	福岡市博物館記念特刊集 赤巻書影印 船山家の歴史展	北九州市立歴史博物館
上村清吉	筑前津屋野塚の調査報告(一)	1987.10	王塚氏の集 上野後編 附録	福岡県立美術館
島津清一、種野かおる編	筑前津屋野塚	2008.1	特別展 朝鮮・立花家の宝宝 図録	福岡県立美術館
島津清一	築紫の古害	1924	久米久米編入臨時の分類	福岡県立美術館
相賀徹夫	福岡陶磁生産技術の地方変への伝播	2013.8	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
大橋雄二	わが国の窯業における生産技術の展開	2005.1	築前・筑後からみた窯業-筑前窯業の技術的展開と文化	福岡陶磁研究会
大橋雄二		1989.10	考古学ライブラリー 肥前海誌	ニュー・サイエンス社
大橋雄二		1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
岡茂政	福岡ノ貝塚及び焼く様々遺物誌	1929.3	福岡県史蹟と歴史記念物調査報告書 第1輯	福岡県
岡茂政			福岡土記[全]	郷土研究会
岡崎林平	上野古窯実地調査	1955.10	藤田田川 6号 臨時増刊	郷土研究会
岡田利雄	高取遺跡跡地「ずねるの記」	1984.5	海誌 274 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
島村八郎	筑前津屋野塚の調査報告(二)	1987.10	福岡 No.22	西日本文化協会
島村武	筑前津屋野塚高取遺跡の発掘と変遷について	1979.8	大塚遺蹟 No.222	西日本文化協会
島崎直人	筑前津屋野塚遺蹟 高取遺跡	1987.7	西日本文化 233	福岡市美術館
尾崎直人	筑前高取遺跡の研究	2013.3	福岡市美術館報告書 3	福岡市美術館
小野賢一郎編	陶器大辞典	1934		博多研究会
小畑信二	(補録)アンディー・マスキ氏採集遺物について	1984.12	博多研究会誌 第3号	博多研究会
加藤九郎編		1972.10	築紫陶器大辞典	筑紫書房
香森清次、櫻田三郎校訂		1943	北九州陶器大辞典	北九州陶器大辞典
金子文次	筑前津屋野塚と陶器調査	1955.12	筑前土記 第1号	筑前土記会
金子文次	田舎の系図	1958.4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
香春彰徳土史会	郷土記から 第4巻	1986.7		香春彰徳教育委員会
香春彰徳土史会	郷土記から 第5巻	2003.3		香春彰徳教育委員会
九州史学資料館		1999	福岡のやきもの-豊前田舎遺物-	
久保和之ほか	上野古窯実地日記	1955.7	海誌 28	日本陶磁協会
久保智康	藤原における近世瓦生産の開始について-筑前野上丸塚窯土瓦の検討-	1986	福岡県立博物館紀要 第3号	福岡県立博物館
久保智康	藤原瓦の普及と煉瓦の登場	1990.9	文明開拓の光と影-福岡県・その誕生地- 図録	福岡県立博物館
久保智康	近世前期高取における赤瓦の生産	1992.8	日本考古学会誌 第10号	
熊谷和雄	上野古窯遺物集を再考して	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土研究会
熊澤治郎吉編		1929.8	工学博士北村禮一郎著書全集 第三巻	社団法人大日本窯業協会
熊澤直樹、前田泰次校注		1974.6	東洋文庫 254 博訂工芸史料	平凡社
田嶋忠 編		1911.8		好尚会
河江繁雄	古土野の壱史梗概	1974.8	筑前文化 第125号	新日本製陶株式会社 八幡製陶所
轟龍光		1973.3	陶片に聞く	
轟龍光		1990.11	日本陶磁大系 第15巻 上野 高取 八代 小代	平凡社
古賀幸雄	瓦跡久長塚(瀬下遺跡 目録)	1975.9	久米久米編入遺跡調査報告書	久米久米士研究会
古賀幸雄、田中茂		1979.10	久米久米遺跡目録調査資料	田中茂
小林美智子	豊前国津上野塚の発掘とその調査	2006.11	東史より 第124号	福岡県地域史研究所
徳志一郎	高山山荘	1958.4	郷土田川 No.13	郷土研究会
徳志文雄夫	筑前津屋野塚の陶器	1984.10	講座・日本技術の社会史 第4巻 東巻	日本評論社
徳志文雄夫	筑前津屋野塚-その歴史と価値-	2006.12	地方史をたずね 132	
佐藤清司	小倉名物三豆鮎とその産地について	2000.3	研究紀要 第14号	新北九州市長岡文化館資料館 福岡県立筑前文化財調査会
佐藤清司	清見出土の田舎書について	2002.3	研究紀要 第16号	筑前津屋野塚文化財調査会
佐藤清司	小倉名物三豆鮎の生産と流通	2011.3	江戸時代の名産品と消費 江戸造形研究会編	吉川弘文館
佐藤清三	上野野古窯実地調査について	1955.7	海誌 28	日本陶磁協会
佐藤清三	上野野古窯実地調査報告書(一)	1984.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土研究会
佐藤清三	上野野古窯調査と福山と発掘日記	1953.12	上野野古窯調査報告書 陶磁7	日本陶磁協会
佐藤清三		1961.11	陶器全集 第1巻 高・上野・高取・備前	平凡社
塩田力蔵	日本近代窯業史第三編福岡編工業	1991.4	日本窯業史記要 第五巻 日本近代窯業史特別編	鉛書館株式会社
塩田力蔵	日本陶工(陶工九)	1938.2	陶器講座 第22巻	
津田 清	近代に「輝けた人」陶器科一頁の裏の起家人、栄し輝かむ文化史-	2006.8	福岡地方史研究 47	福岡地方史研究会
橋田光一	高取時代八上の高跡	1997.11	歴史のきんぴらみち 第1回 青龍いづか	筑前市歴史資料館
橋田光一	高取の藤山古窯跡の調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
橋田光一	高取の藤山古窯跡の調査	2001.3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
農工省編纂		1921.9	全国工場通覧	日本工業新聞社
関口広次	高取山田窯採集陶片分冊-美濃国	1989.3	藤山の窯場	経緯書房出版
新島邦弘	古高取 内ヶ原遺跡の発掘調査	1981.3	海誌 206 [大名高取特集]	日本陶磁協会
新島邦弘	高取 内ヶ原の発掘	1982.2	日本やきもの編成 12 九州II 沖編	平凡社

執筆者	論文名	刊行年	書籍・誌誌名	発行元
朝島邦弘	臨海市申遺高取家出所出土の遺物について	1982.3	内ヶ嶽実証(古地方文化財調査報告書 第4集)	古地方教育委員会
朝島邦弘	高取町高取町史研究会の発掘調査	1984.5	陶磁 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
朝島邦弘	まぼろしの筑紫秋丹書をさがして	1985.12	陶磁 393	日本陶磁協会
朝島邦弘	高取城の本陣	1986.3	地方史をくまがさ 54	
朝島邦弘	北九州における活字古書集録の研究—福岡県熊手郡若菜町大馬場所在大馬場裏跡について—	1987.11	『東アジアの考古と歴史 下』岡崎敬久先生追悼記念論集	同朋舎
朝島邦弘	高取古大馬場址について	1988.4	陶磁 421	日本陶磁協会
朝島邦弘	高取古大馬場址について	1989.7	陶磁 436	日本陶磁協会
朝島邦弘	北九州における活字古書集録の研究—筑前高取町高取町史研究会について—	1990.11	乙倉重孝先生古稀記念九州上代文化論集	乙倉重孝先生古稀記念論文集刊行会
朝島邦弘	福岡	1997.3	筑立歴史民俗博物館研究報告 第73集 近世家業遺跡 一つと集落	国立歴史民俗博物館
朝島邦弘	北九州における活字古書集録の研究—筑前熊手郡山科村(熊手郡若菜町)遺跡について—	1999.3	九州歴史資料館研究論集 24	九州歴史資料館
朝島邦弘	北九州における活字古書集録の研究—福岡一帯(福岡県)の場合一—	2000.3	九州歴史資料館研究論集 25	九州歴史資料館
朝島邦弘	古高取町史「かまき屋跡」について	2001.3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
朝島邦弘	福岡近世古書集録研究の流れ	2007.1	高取城跡400年歴史記念誌	高取城跡400年歴史実行委員会
朝島邦弘	筑後の近世の遺物を考える	2011.9	福岡地方史研究 49	福岡地方史研究会
朝島邦弘	北九州における活字古書集録の研究—筑前秋月集落について—	1983.7	熊倉重樹(人)・遺跡・遺物 わが考古学論集 1-1	文芸出版
大日本実業協会		1902.47	第一回全国家業品共通報告書	大日本実業協会
高木誠一	新巻焼の系図と子孫	1983.11	郷土文化誌 おおとよ 第3集	
高野野山編	『高取家文書』	1979.1	高取家文書	雄山閣
高山源太郎	筑前県志の歴史	1991.6	ふんふんの自然と歴史 227	
高山源太郎	筑前の織部(鹿嶋)―基礎資料による百年一—	1992.1	福岡県地域史研究 第10号	福岡県
田嶋博之 二宮吉男	高取城の古書集録調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 記録	佐賀県立九州陶磁文化館
筑後郷土史研究会		1957.11	大田村郷土史	筑後郷土史研究会
筑後郷土史研究会		1980.12	福岡市南区 伝説・由來・遺跡	『市民の祭り』運営委員会
筑後郷土史研究会	高取城その他	1982.9	九州陶磁	筑後郷土史研究会
福岡市	石の上野田川遺跡	1939.3	三浦郷土史	三浦町文化財専門委員会・三浦町郷土研究会
福岡市文芸		1936.2	古高取山田家	
刀根為次郎		1914.8	北九州の地名 舞臺の浜	
永尾正朝, 新川實博, 板垣徳雄		2002.3	書簡名所 付 六郷名所記	北九州市立歴史博物館
永尾正朝	朝川築園地蔵の史的考察	1990.8	近世近代史論集	吉川弘文館
永尾正朝	朝川築園地蔵と上野焼陶土	2001.3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
永尾正朝	豊前上野焼および築園地蔵に関する編年史料	2002.3	研究紀要 10	北九州市立歴史博物館
中ノ堂一伸	近代書業の展開 高取城跡の二宮家と其遺物、筑前熊手郡津野村赤地発見の古陶磁	1984.12	講座・日本経済の社会史 第4巻 産業	日本評論社
中山平次郎		1915.2	考古学雑誌 5-6	
中山平次郎	筑前大馬場に於ける高取五郎七の製陶所址	1915.4	考古学雑誌 5-8	
中山平次郎	筑前高尾郡都山郡の高取城跡	1915.6	考古学雑誌 5-10	
西日本新聞社		1982.11	福岡県 資料集	西日本新聞社
農務省農工局工務課		1904.3	工務通覧	
森田博洋	二川焼について	1959.11	郷土研究 Vol.7	福岡県立佐賀南高校郷土研究部
野上謙二	新刊の築園地蔵の伝説について	2005.1	筑後通・築園地蔵からみた家業・築園地蔵の技術的系譜をめぐって	福岡県史研究会
原真	新刊定史 筑古書古案	2006.10	筑古書博物館より 号外	筑古書博物館
広津友一郎	年表について	1981.11	郷土誌 21(1)がわ 新刊号	厚川町郷土史研究会
福岡市観光局		1973	福岡市の史跡と観光 ほかた	
藤丸三雄	三浦町の製瓦業について	2018.10	故郷の文化に希望を	三浦町教育委員会
藤原友子	二川焼とよばれるのはなぜ?	2010.10	古書誌	九州陶磁文化館
豊前市人権センター	明治二年 日本製陶年表	2010.3	筑後通巻別集(一) 産業	豊前市人権センター・歴史史研究会
堀木長吉	高取城と多人数に對して	1932.10	大日本実業協会報誌 41巻490号	大日本実業協会
文化庁文化財部	新発見の文化財 無料文化財	2017.9	月刊文化財46巻	
宇野浩二	田川の陶業—歴史と課題—	1958.4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
山田清成	史跡・筑古高取家跡	1990.5	筑古書博物館より 第4号	筑古書博物館
山田清成	筑古高取家をめぐる問題	1990.7	筑古書博物館より 第5号	筑古書博物館
山田清成	筑古高取家をめぐる問題(続)	1990.10	筑古書博物館より 第6号	筑古書博物館
三上茂男	上野焼の口の古書	1955.10	陶磁 29	日本陶磁協会
三上茂男	上野焼の口の古書	1955.12	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
三上茂男	上野焼の口の古書	1955.12	陶磁 33 上野古陶磁書報	日本陶磁協会
三上茂男	歳時記について	1955.12	上野古陶磁書報 陶磁 37	日本陶磁協会
石田乙次郎		1957.11	水原村郷土史	筑後郷土史研究会
石田乙次郎		1973.9	水原の平伝と編織	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
石田乙次郎	三原家と赤坂城(筑後赤坂城)	1977.8		筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
三島橋・村松正一		1966	須磨郷の歴史・小代焼と二川焼	三井三池炭礦株式会社
水谷富一	九州の民衆 二川の陶業	1933	工藤33号	
水原通雄	製瓦焼の古書集録調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 記録	佐賀県立九州陶磁文化館
美術史の塾	筑前上野古書考	1926.7	小学生の讀物	
美術史の塾		1955.12	年表記に述べた上野焼	筑後通巻別集(一) 産業
美術史の塾	小原宗吉時代の土野焼	1955.4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
美術史の塾, 船木藤司		1975.2	わが一日のやまもひ 上野・高取 小石屋 小原田	淡交社
毛利恒昭	上野・高取の系図	1984.5	陶磁 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
森谷貞久	近代福岡生産の発展	1984.12	講座・日本経済の社会史 第4巻 産業	筑後郷土史研究会
山ノ下啓二	福岡藩御用所家 須磨郷の盛衰	2016.10	西日本文化 400	西日本文化協会
山口博榮	博多土上の素焼人形・近世茶の博多土に於ける工業の研究上—	1988.1	九州考古学 第60号	九州考古学
山口博榮	筑前野焼について	1992.3	『大和遺蹟』西日本鉄道株式会社大分駅前駅舎改築に伴う築前文化財発掘調査報告書(大分市庁舎の文化財第1集)	大分市教育委員会

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
雄山印刷編集部		1979	陶磁用語辞典	雄山館
横河民雄	日本語国家一貫	1935.12	陶磁講座 第1巻	雄山館
横山謙	上野焼への期待	1955.10	雄土田川 6号 臨時増刊	雄土田川研究会
横山謙	田川の古窯跡について	1958.4	雄土田川 No.13	雄土田川研究会
末山公子	初瀬上野焼(美濃焼場)についての一考察	1998.11	美濃山郷土研究会誌 第12号	美濃山郷土研究会
渡辺川博	新渡戸 文書 第2巻 二書	1914	白柳川漫志	山門郡教育会
渡辺川博	第10巻 生物部 第2部 重要生産物	1914	白柳川漫志	山門郡教育会
渡辺川博	第18巻 人物 第4巻 第3部	1914	白柳川漫志	山門郡教育会
渡辺久典(註し平)	上野焼の産理と遠久員焼の歩み	2005.11	文庫より 第124号	福岡県地域史研究所
		2017.3	豊前小倉藩史上野焼展 図録	福岡市
		1992.10	能古博物館紹介と解説	能古博物館

鳳交・市町村史

執筆・編集者	文 献 名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
尾崎尚人	西 陶磁	1994.3	福岡県史 通史編 福岡県文化(下)	福岡県
西田宏子	福岡の歴史における高取焼	1992.3	福岡県史 文化史料編 筑前高取焼	福岡県
尾崎尚人	高取焼研究史	1992.3	福岡県史 文化史料編 筑前高取焼	福岡県
春日市史編さん委員会	春日市史 下巻	1994.3		春日市
力武卓治	藤崎造跡第33次調査	2016.3	新修福岡市史資料編考古1	福岡市
曾波正人	能古窯跡群	2016.3	新修福岡市史資料編考古1	福岡市
高山龍太郎	筑前の磁器「清永焼」	1983.3	清永町誌	清永町役場
清永町誌編纂委員会	二文町誌(平成版)	2005.11	二文町	株式会社名書出版
村土敏	糸島郡誌	1972.9	糸島郡誌	株式会社名書出版
伊藤龍四郎	宗像郡誌 上巻	1944.8	宗像郡誌 上巻	株式会社名書出版
福岡市南区歴史文化財保存会	南区ふるさと	1992.10		
博多人形造り史調査委員会	博多人形造り史	2013.2		博多人形造り史協同組合
津波野史文庫委員会	津波野史 通史編	1999.3		山門郡教育会
筑前野史誌編纂委員会	筑前野史	1992.3		筑前町
筑前野史誌編纂委員会	筑前野史	1988.3		筑前町
筑前町教育委員会	筑前町史の文化財1	1996.3		筑前町教育委員会
遠賀郡教育会	遠賀郡誌	1917.9		株式会社雄川書店1986復刊
遠賀郡誌復刊発行会	増補改訂 遠賀郡誌	1981.8		遠賀郡誌復刊発行会
遠賀町史編纂委員会	遠賀町誌	1988.3		遠賀町
遠方市史編さん委員会	遠方市史 上巻	1971.6		福岡県遠方市
資料一書編	遠方市史 資料編 上巻・下巻(1)による遠方のあかり	1983.3	10 高取焼の歴史と文化継承誌	遠方市役所
若宮野史	第八巻 若宮の古世陶磁器の生産	2005.3	若宮町誌上巻	若宮町
若宮町誌編さん委員会	若宮町誌 上巻	1974.9		福岡県若手町
若宮町誌編さん委員会	若宮町誌 下巻	1980.12		福岡県若手町
北九州府教育委員会文化財保護課	北九州市の文化財	1999.3		北九州府教育委員会
久留米市役所	久留米市誌 中編	1933.1		久留米市役所
久留米市役所	久留米市誌 下編	1932.12		久留米市役所
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第2巻	1982.11		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第3巻	1985.3		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第12巻	1996.3		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第13巻	1996.3		久留米市
浮羽町史編纂委員会	浮羽町史 上巻	1988.3		浮羽町
浮羽町史編纂委員会	浮羽町史 下巻	1988.3		浮羽町
浮羽町誌発行会	浮羽町誌	1966.11		浮羽町誌発行会
御井小学校建校四十周年記念事業実行委員会町誌部	御井町誌	1986.2		御井小学校父母教師会
三瀬町役所	福地町三瀬郡誌	1925		三瀬町役所
城島町誌編纂委員会	城島町誌	1998.3		城島町
吹巻富	立石町史 上巻	1996.3		立石町
立石町史編さん委員会	野野村史 産業編	1998.3		野野村
佐々木十哲	皇野村史編さん委員会	1998.3		皇野村
江原孝	郷土文物誌	1966.11		郷土史
柳川市史編さん実行委員会	柳川町史	1993.11		郷土史
八代郡役所	鶴本八代町史 増補	1917.10	豊野・野影・今村・野ノ子・鹿子子・湯宮・坂宮史	郷土史
筑後市史編さん委員会	筑後市史 第一巻	1997.9		筑後市
田原義樹	柳川市史 筑前 柳川町誌調査会	2002.9		柳川市
柳川市教育委員会	柳川の文化財	1978.5		柳川市教育委員会
福野中子	第2巻 杜若の美術 6 築地焼	2005.2	「柳川の美術1」柳川文化資料集成 第3集	柳川市
柳川市史編纂委員会編	第3巻 柳川藩主時代の美術 第1編 藩主一途	2007.3	「柳川の美術2」柳川文化資料集成 第3集-2	柳川市
福野中子	築地焼 南本村・志木村に伝	2002.3	「柳川地名長巻報告」柳川歴史資料集成 第5集	柳川市
熊本県史	筑後八代郡 第2巻 石りい 第2節 陶磁 五件1	2004.3	「柳川の民俗伝統」柳川歴史資料集成 第6集	柳川市
柳川市史編纂委員会編	第1編 大和町・三瀬町の民俗伝統 大和町・三瀬町の文化財と(1)・3 焼物(1) 瓦業	2012.3	「柳川の民俗伝統2」柳川歴史資料集成 第7集	柳川市
柳川市史編纂委員会編	第2編 立花町 第2巻 産業の発達 第3節 工業 筑前川流域(柳川産出物の瓦産物)	2001.3	大和町史 通史編 上巻	大和町
三瀬町史編さん委員会	三瀬町史	1985.9		三瀬町史発行委員会
みやま市史編さん事務局	みやま市史 通史編 下巻	2020.3		みやま市 みやま市教育委員会
鶴巻太郎・水舟新編	高田町誌	1958.10		福岡県三浦郡高田町
三池郡教育会	三池郡誌 全	1926.6		株式会社名書出版 1989復刊(雄川書店)
福岡県山門郡教育会	山門郡誌	1974.4		株式会社名書出版
大川史誌編纂委員会	大川市誌	1977.12		福岡県大川市役所
大牟田市史編纂委員会	大牟田市史 上巻	1965.3		大牟田市役所
内野繁代他編	三池地方誌	1936.10		
西山晋之助ほか	高田町の文化財	1992.3		高田町教育委員会



執筆者	題 文 名	刊行年	書籍名・誌名	発行元
上野 毅	山田の道跡 文化財	1982.1		
福塚市史編さん室	福塚市史	1975.8		福岡県福塚市 福塚市役所庶務課庶務課
	地図と見て知る福塚地方誌	1975.2		光野木書店
二瀬町誌編さん委員会	二瀬町誌	1963.3		町長 三浦木松
幸野町編纂委員会	幸野町誌	1963.3		幸野町編纂委員会
松原治郎編	山田町誌	1953.2		山田町誌編纂委員会
山田市誌編さん委員会	山田市史	1986.3		山田市
貞色博幸	第1編 農作・建築編 第2編 民俗編	2001.3	香春町史 下巻	香春町編纂委員会
和田浩治	上野村史	1936.5		加茂工業社
赤松史編纂委員会	赤松村史	1977.11		赤松村
方城町史編纂委員会	方城町史	1966.5		方城町
湯田町史編纂委員会	湯田町史 上巻	1992.3		湯田町
福塚町誌編纂委員会	福塚町誌	1959.3		福塚町
福塚町誌編纂委員会	福塚町誌	1973.3		福塚町
織田光一	第1巻第3期 高島誌	2016.3	福塚市史 中巻	福塚市
大任町誌編纂委員会	大任町誌	1970.5		大任町
大任町誌編纂委員会	大任町誌 小巻と大任 上巻	2004.3		田川郡大任町
轟郷歴史所	轟郷誌 全	1972.7		株式会社名譽出版
小竹町史編さん委員会	小竹町史	1985.3		小竹町
豊津町誌編纂委員会	豊津町誌	1985.3		豊津町
豊津町史編纂委員会	豊津町史(下)	1997.4		豊津町
大平村誌編纂委員会	大平村誌	1986.3		大平村
藤上郡史編纂委員会	藤上郡史 下巻	1958.7		福岡県藤上郡-昔市町教育委員会

県内調査報告書等

執筆・編集者	文 献 名	刊行年	副題	シリーズ名
福岡県	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第4編	1929.3	「藤田ノ貝塚及神ノ峰城址調査」	
福岡県教育委員会	大井2	1991.3	福岡県軽手郡若宮町大井の調査	福岡県文化財調査報告書第34編
福岡県教育委員会	上野原稲本屋敷遺跡	1997.3	福岡県藤上郡大平村所在遺跡の調査	一福河川山田川築堤前後埋蔵文化財調査報告1
福岡県教育委員会	香取原屋敷遺跡	1999.3	福岡県藤上郡大平村所在遺跡の調査	一福河川山田川築堤前後埋蔵文化財調査報告3
福岡県教育委員会	内ヶ塚遺跡 1	2001.3	福岡山ヶ塚遺跡に伴う福岡県直方市大字磯野所在近世前期の調査	福岡県文化財調査報告書第163編
福岡県教育委員会	内ヶ塚遺跡 2	2002.3	福岡山ヶ塚遺跡に伴う福岡県直方市大字磯野所在近世前期の調査	福岡県文化財調査報告書第170編
福岡県教育委員会	内ヶ塚遺跡 3	2003.3	福岡山ヶ塚遺跡に伴う福岡県直方市大字磯野所在近世前期の調査	福岡県文化財調査報告書第181編
福岡県教育委員会	秋月古道	2004.3	歴史の調査報告書 第2巻	福岡県文化財調査報告書第195編
福岡県教育委員会	能取島	1993.3	能取島遺跡発掘事前調査調査報告書	福岡県埋蔵文化財調査報告書 第254編
福岡県教育委員会	福岡県埋蔵文化財年報 vol.3 1988年度	1990.3		福岡県埋蔵文化財年報 vol.3 1988年度
福岡県教育委員会	福岡県埋蔵文化財年報 Vol.32 2017年度版	2018.3		福岡県埋蔵文化財年報 Vol.32 2017年度版
福岡県教育委員会	藤崎遺跡 17	2006.12	藤崎遺跡第35次調査報告書	福岡県埋蔵文化財調査報告書 第918編
福岡県教育委員会	福岡市文化財分布地図 (西部 I)	1994.3		
福岡県教育委員会	福岡市文化財分布地図 (西部Ⅱ)	1984.3		
福岡市立歴史民俗資料館	筑紫の福岡 遺迹展	1981.10		
福岡市立歴史民俗資料館	筑紫の福岡 遺迹展 資料集 2003	2003.10		
福岡県教育委員会	福岡県福岡市遺跡 1	2010.3	福岡県藤原郡遠志町大字上原原所在遺跡の調査	遺志町文化財調査報告書第10編
福岡県教育委員会	遠志町文化財分布地図	2009.3		遠志町文化財調査報告書第9編
大宰府市教育委員会	大和遺跡	1992.3	西日本鉄道株式会社大宰府駅前改良に伴う埋蔵文化財調査報告書	大宰府市の文化財第18編
北九州市埋文調査室	桜谷遺跡 1	1985.3		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第40編
北九州市教育委員会	北九州市の文化財	1999.3		
北九州市教育委員会	北九州市埋蔵文化財分布地図	1988.3	小倉北区・門司区・鎌島	
福岡市教育委員会	内ヶ塚遺跡 1	1980.3		福岡市文化財調査報告書第2編
福岡市教育委員会	内ヶ塚遺跡 2	1981.3		福岡市文化財調査報告書第3編
福岡市教育委員会	内ヶ塚遺跡 3	1982.3	福岡県直方市大字磯野宇二遺跡に近世前期築屋敷調査調査報告書	福岡県直方市大字磯野宇二遺跡に近世前期築屋敷調査調査報告書
福岡市教育委員会	永満寺宅跡遺跡	1983.3	福岡県直方市大字永満寺宅跡所在近世前期築屋敷調査調査報告書	福岡県直方市大字永満寺宅跡所在近世前期築屋敷調査調査報告書
福岡市教育委員会	福岡市内遺跡詳細分布調査報告書	1995.3		福岡市文化財調査報告書第19編
宮田町教育委員会	千石原跡	1995.3	福岡県軽手郡宮田町千石原所在遺跡の調査	宮田町文化財調査報告書第3編
岡田町教育委員会	岡田町遺跡等発掘分布調査報告書	1994.3		岡田町文化財調査報告書第16編
甘木市教育委員会	甘木町月形跡	1983.3	福岡県甘木市秋月町島崎町所在近世前期築屋敷調査調査報告書	甘木市文化財調査報告書第15編
甘木市教育委員会	甘木市の文化財	1996.3		
小石原村教育委員会	中野上の原古遺跡	1989.3		小石原村文化財調査報告書 第1編
小石原村教育委員会	中野大口(石)古遺跡	1989.3		小石原村文化財調査報告書 第2編
小石原村教育委員会	中野上の原古遺跡	1990.11		小石原村文化財調査報告書 第3編
小石原村教育委員会	一本杉1号古墳跡・倉敷跡3号古墳跡	1993.3		小石原村文化財調査報告書 第4編
小石原村教育委員会	野塚跡1号古墳跡	1994.3		小石原村文化財調査報告書 第5編
東峰村教育委員会	火口谷古遺跡	2014.3		東峰村文化財調査報告書第10編
東峰村教育委員会	東峰村内遺跡分布地図	2013.3		東峰村文化財調査報告書第9編
久里米市教育委員会	久米市市遺跡詳細分布調査報告書	2010.3		久米市文化財調査報告書 第10編
久里米市教育委員会	東部土地開発埋蔵文化財調査報告書 第1編	1981.3		久里米市文化財調査報告書第19編
久里米市教育委員会	久里米町町史 埋蔵遺跡	1999.3		久里米市文化財調査報告書 第18編
久里米市教育委員会	平成10年度久里米市内遺跡群	2000.3		久里米市文化財調査報告書 第16編
久里米市教育委員会	平成17年度久里米市内遺跡群	2016.3		久里米市文化財調査報告書 第26編
久里米市教育委員会	東野町墳墓群	2019.3		久里米市文化財調査報告書 第404編
公益財団法人財団法人藤原社	重要文化財藤原寺大講堂他六棟保存修理工事報告書	2011.3	大講堂・講堂・本堂	
藤原町教育委員会	城ノ原遺跡	1995.3	福岡県八女郡藤原町所在遺跡の発掘調査報告書	藤原町文化財調査報告書第2編
野野村教育委員会	十輪野野小学校遺跡	1994.3	福岡県八女郡野野村所在遺跡の発掘調査報告書	野野村文化財調査報告書第3編

執筆者	協 文 名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
立石町教育委員会	北山小学校遺跡	1993.3	福岡県八女郡立石町所在遺跡の調査報告	立石町文化財調査報告書第3集
みやま市教育委員会	みやま市内遺跡等分布地図	2015.3		みやま市文化財調査報告書第10集
筑後市教育委員会	水田の平田土器集	1973.9		
筑後県土史研究会				
筑後市教育委員会	筑後市神社仏閣調査書 福成寺篇	1974.3		筑後市神社仏閣調査書第4集
筑後県土史研究会	三原家と赤坂城(筑後赤坂城)	1977.8		筑後市七心のまいたちの記第4集
筑後県土史研究会				
大牟田市教育委員会	大牟田市遺跡等分布地図	2007.3		大牟田市文化財調査報告書第59集
名勝社遺跡修理事業委員会	名勝社遺跡内跡居築物修理工事報告書	2007.3	【第1編】修理工事 第2編調査・発見物 2 瓦削印 第2編資料 第3章発見物・発見等 重要等(か10)	
熊本県教育委員会	熊本高取 白旗山遺跡	1992.3	福岡県 熊本県 大宰府 大宰府野間所在 筑前高取遺跡発掘調査報告書	熊本県文化財調査報告書第14集
熊本県教育委員会	熊本市内遺跡詳細分布調査報告書	1997.3		熊本県文化財調査報告書第24集
高森市教育委員会	高森市文化財等分布地図	2012.3		高森市文化財調査報告書第4集
香春町教育委員会	香春町文化財等分布地図	2001.3		香春町文化財調査報告書第12集
大任町教育委員会	田香楼遺跡	1988.3	福岡県 田川郡 大任町 大宰府野間所在の上野系築物の調査	大任町文化財調査報告書第4集
九州歴史資料館	福岡のやまの～豊前田香楼～	1999.1		
福岡市	豊前小倉遺跡 上野城篇	2017.3		
犀川町教育委員会	城井遺跡群	1992.3		犀川町文化財調査報告書第1集
豊津町教育委員会	豊津町内遺跡等分布地図	2001.3		豊津町文化財調査報告書第25集
犀川町教育委員会	犀川町内遺跡等分布地図	2002.3		犀川町文化財調査報告書第8集
みやま市教育委員会	みやま市内遺跡等分布地図	2010.3		みやま市文化財調査報告書第6集
豊前市教育委員会	大村天神社遺跡	2009.3	長官(建設省)事務に併う福岡文化財発掘調査報告書13	豊前市文化財調査報告書第25集
豊前市教育委員会	吉本穴井遺跡	2003.3	都市計画道路橋通犀川倉前橋詰遺跡調査に併う福岡文化財発掘調査報告書	豊前市文化財調査報告書第17集
大平村教育委員会	大平村の文化財	1975.3		福岡県筑上郡大平村教育委員会

報告書抄録

ふりがな	ふくおかけんのきんせいようぎょうかんけいせいぎ							
書名	福岡県の近世窯業関係遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第284集							
編著者名	坂本真一（編集）伊崎俊秋 遠藤啓介 岸本主 酒井芳司							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 Tm092-651-1111							
発刊年月日	令和6（2024）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
福岡県内各市町村に所在する近世の窯業関係遺跡	福岡県内市町村					2020.9.24 ～ 2024.3.31		福岡県近世窯業関係遺跡調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
福岡県内各市町村に所在する近世の窯業関係遺跡	窯業関係遺跡	江戸時代	窯業に関わる窯跡					
要約	福岡県内に所在する江戸時代の窯業に関わる窯跡とそれに関係する生産、埋葬などの関係遺跡について、悉皆調査を行い、106件の窯跡について確認した。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2120253
登録年度 5	登録番号 0002

## 福岡県の近世窯業関係遺跡

福岡県文化財調査報告書第284集

令和6年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
〒812-8575  
福岡県福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 四ヶ所  
〒838-8512  
福岡県朝倉市馬田336